

目 次

スカウティング誌

「班長の手引」について	(S. 58(1983)-6月号)	1
第1章 班制度とは — その意味		2
第2章 ギャングとしての班	(S. 58(1983)-7月号)	8
第3章 班と名誉会議	(S. 58(1983)-8月号)	12
第4章 班コーナー	(S. 58(1983)-9月号)	18
第5章 隊集会における班	(S. 58(1983)-11月号)	23
第6章 班と班のデン	(S. 58(1983)-12月号)	28
第7章 野営における班	(S. 59(1984)-1月号)	34
第8章 班長と次長	(S. 59(1984)-2月号)	41
第9章 班長と初級スカウト	(S. 59(1984)-3月号)	44
第10章 班と2級スカウト	(S. 59(1984)-4月号)	52
第11章 班と1級スカウト—1	(S. 59(1984)-6月号)	60
班と1級スカウト—2	(S. 59(1984)-7月号)	66
第12章 班と自然	(S. 59(1984)-9月号)	72
第13章 班と技能章	(S. 59(1984)-11月号)	78
第14章 班と戸外活動	(S. 60(1985)-1月号)	84
第15章 班とハイカー1	(S. 60(1985)-3月号)	90
班とハイカー2	(S. 60(1985)-5月号)	95
第16章 班と他の人々	(S. 60(1985)-6月号)	100
第17章 班集会	(S. 61(1986)-12月号)	104
第18章 班とスカウトのおきて	(S. 62(1987)-1月号)	110
第19章 班長にさよなら	(S. 62(1987)-3月号)	116
結語		118
“世界の総長”安らかに眠る		119

「班長の手引」について

山田利雄

ボーイスカウト運動の基本方針である、班制と進歩制は、ベーデン・パウエルがこの運動を始めから今日まで長くボーイスカウト教育の基盤としてきた制度であり、この運動が続けられるかぎり基盤となるものといえよう。言いかえれば、この2つがなければボーイスカウト運動とは言えない。ユニフォームを着用して活動していても、この2つがなければ、それは本当のスカウト活動をしているとは言えないのである。

班制についての名著として、ローランド・フィリップス著の「パトロール・システム(班制教育)および班長への手紙」(翻訳され販売していたが、昭和40年前後に絶版となった。)は、1915年刊行以来多くの人々に読まれ、班制教育の指針とされてきた。

その後、昭和40年2月より41年10月まで21回にわたり、ジョン・サーマン著「班長の手引」が本誌に掲載されている。

この2著ともイギリスのものであり、日本の活動とはやや異なる点もあるが、班制の原理については参考になる。おそらくイギリスとても進歩課程の改正や、スカウト運動そのものの変化もあり、運営の仕方が近代化されているに相違ない。そのあたりを考慮して読み、十分に咀嚼するならばわが国のスカウティングにおいても、実り多い班制を実施する参考となるであろう。

著者ジョン・サーマンについては、長くスカウト活動に携わっておられる指導者の方はご存知と思うが、長い間イギリスのギルウェルトレーニングコースの所長をしており、昭和34年に、極東7か国からのリーダーを集めて那須野営場で開催された第1回極東トレーニング・ザ・チーム・コー

スの所長として、また、その後も何度か来日している。

この本を読んでもよくわかるが、彼の隊長時代のスカウトに対する、また班長に対する思いやり等がよく表わされている。

この「班長の手引」は1955年版の訳稿であるが、初版は1950年に出版されている。ローランド・フィリップスの「班制教育と班長への手引」は1915年の発行であるので、両書の刊行年度には、40年のひらきがあり、その間に大戦が2回もあって、社会状況は変わり、それに従って少年の生活も変わっている。スカウト活動も進歩しているが、原理は不変である。運営の近代化については大いなる進歩のあることは論を要しない。

各章ごとに故中村知先生の読後感があるので章末ごとに載せることにした。班長の手引ではあるが指導者が班長を指導するためにも熟読玩味してください。

(中央審議会議員、前日本連盟出版委員長)



班長の手引

—THE PATROL LEADERS' HANDBOOK—

ジョン・サーマン

《第1章》 班制度とは——その意味

諸君は、フットボールの規則を知らなかったら、フットボールの名主将にはなれない。エンジンの動かし方を知らずに、電車を運転することはできない。また、菓子の材料の選び方を知らずに、おいしい菓子を作ることはできない。これと同じように、班制度を理解せずに、正しい班長にはなることができないことは明らかである。

もちろん、諸君が遊び半分でサッカーの主将を務めたり、電車を運転したり、菓子を焼いたり（多くの炊事当番がやってるように）、班長をやったりすることはできよう。しかし、仕事の仕方を勉強していなければ、自分にとっても、諸君を信頼している班員にも、みじめな結果を与えるだけである。

班長の任務でもっとも大切なのは、班員が諸君を信頼していること、よきにつけあしきにつけ諸君の行動は班員に影響を与えること、よい感化を班員に与えることが諸君の務めであることを、いつも忘れないことである。最近、「あまり気にしないよ」ということばがはやっているが、これは班長にとって、もっとも悪い考え方である。このことばを本気で使うような班長は、すぐに班長章を返上すべきである。

班長には、自分に対しても、班のスカウトに対しても、また、誰に対しても「もっと用心しくは」という態度が必要である。

何度も耳にしたことであろうが——私自身耳にたかができるほど聞かされたことだが——「ささいなことが重要なのだ」という諺がある。そう、諸君にも覚えがあるだろう。見かけがどんなに退

屈で、とるに足らないつまらない事でも、すべての事には意味がある。ことに、ささいな事はいちばん起こりやすいし、より多くの人に影響を与えるものなので、もっとも重要な意味を持っているといえる。これも聞いたことがあろうが、「ささいな事はわれわれを試すために、この世に送られたものだ」ということばがある。諸君は、私と同じ人間であるから、もっとわかってもらえると思うが、われわれはささいな事に悩み、ささいな事をたいへんな問題だと思っている。

班制度は「たくさんささいな事」からできている制度である。班制度にまつわる問題点、諸問題、難解さはここに原因がある。この本を読むことによって、諸君が班制度の姿、意味、機能を正しく理解するように希望する。

私は班制度が容易でないことは喜ぶべきことだと思っている。隊本部の入口に「班制度」と書いた札をかけておけば、おまじないがかかって万事がうまくいくとしたら、あまりにも簡単すぎて悩みどころがない。幸運にも、まったく幸運にも、なかなか手ごわいのが班制度である。時代が進むにつれ、容易になるということはない。これが班制度の秘密であり、魅力であり、有用性である。班制度は、つねに、2つの特質を持っている。——すなわち、常識と努力である。諸君が前者（常識という誰にでもあるように思われるが、決してそれほどありふれてはいない）を持ち、後者に心がけていることを私は希望する。というのは、すべてのことはこの2つの特質を基盤に成り立っているからである。私たち、おとなのできることは

諸君に簡単に説明をし、あれこれと提案し、ときには忠告をし、たえず激励することであり、班制度を動かすことができるのは班長の諸君たちだけである。班制度の成否は、ひとえに、諸君にかかっている。班制度は諸君の舞台であり、諸君はその主役である。

40年以上前にスカウティングが発案したとき、班制度という考え方は、まったく革新的であった。事実、多数の人がこれを悪評し、創始者B-Pに対し、危険だとか、使い物にならないとか、混乱を起こすつもりかとか、少年たちから排斥されるだろうとか、いろいろな悪口をいった。しかし、ときがたつにつれ、班制度の方式は広くうけ入れられるようになり、学校・学校外を問わず、すべての少年活動の作業やスポーツなどにあらゆる面で活用されるようになった。もちろん、スカウティングとは関係の薄い職業や市民生活の面——爆撃隊、歩兵小隊、特別な計画にたずさわっている科学者陣の間にも、班制度は使われた。

われわれの運動は歴史のある古い運動であり、歴史から何かを学ぶことは賢明であると思うので、ここでスカウティング発案期のことを少し書こう。スカウティングの初期、英国および世界各地の少年たちは「スカウティング・フォア・ボーイズ」を買って、自分たちで班を作った。「自分たちで班を作った」ということに着目していただきたい。このことは、誰かが上からの命令で頭になったのではなく、仲間が自分たちの意志で頭を選びだし、その頭を中心にスカウトになりたい少年たちが集まって群れを作ったことを意味する。少年たちは班を作り、「スカウティング・フォア・ボーイズ」を唯一の指導者として、自分たちの訓練をはじめたのである。しかし、ご多聞にもれず、少年たちにはわからないこと、解決できないこと、おとなの助けが必要なことが、たくさん起こってきた。そこで、いくつもの班が寄り集まり、隊を作り、隊長をおくようになったのである。

1908年のこと、お小遣いを持ちよって1冊4ペンスの「スカウティング・フォア・ボーイズ」2、3冊買い求めた一群の少年たちがあった。彼らは古い納屋に集まって、B-Pが暗示したことを、

あれこれとやってみた。彼らは、大いに楽しみ、たくさんのかつを学び、またいくつかの試練にぶつかった。ある日、とうとう野営の章にきた。これまで本に書いてあることをすべて試みてきたので、彼らはこの少しばかり難しそうに見える問題にも、敢然と取り組んだ。ところが、彼らは1人として野営を経験した者はないし、野営のヤの字も知らない者ばかりだった。しかし、彼らは諸君の班と同じように「真の冒険心」に富んでいた、彼らはどんなことでも一度の失敗にこりず正しくできるまでやりとおす覚悟であった。だから彼らは全般的な計画を話し合い、必要と思われる用具を調達する手配をした。ビル、ジャック、トムの3人は、食糧調達係——調達方法などは誰も、心配しなかった——班長のマーチンはテントを調達することになり、最年少のアレックは「手押車を持って、これと思う」といった。班長は、またアレックになべの入手を命令し、全員に自分の寝具は自分で持ってくるよう指示した。こんなふうにして、6月はじめのある土曜日、彼らは同じ納屋に集合し、出発の準備を整えた。質問する者は



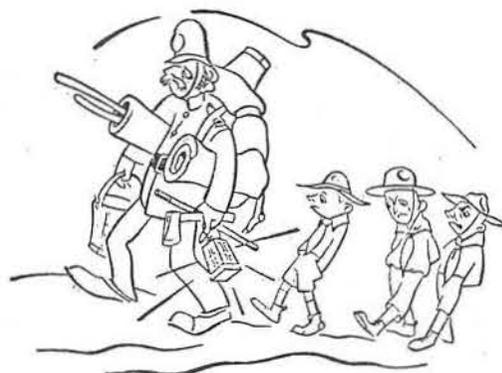
なかった。ただ、アレックが赤ん坊の弟からおもちゃの手押車をとりあげるのにとても苦労したといったことと、班長がテントだといって持ってきた古ぼけたターポリン布（タール塗り防水布）にジャックが非常な不満を示したほかは、目立ったことはなかった。しかし、彼らは、1人残らず、食糧の分量には大いに驚き、かつ満足した。今日の基準で計ればゆうに、1か月分はあった。

ともかく、積めるだけ手押車に積みこみ、食糧を積んだらほとんど余地がなかったといったぐあいだが、残りは担いでいくことにした。彼らは、目的地を決めたわけでも、地図を持っているわけでもなかった。おそらく、地図など見たこともなかったろう。彼らは、文字どおり、青空に向かって村を出発し、野を渡り、山を越えていった。彼らは、できる限り、道路を歩かないことにした。しかし、準備にあまり時間を使いすぎたので、宿泊地に到着したときには、だいぶんおそくなっていた。この場所は、いなか道と小さな川にはさまれた気持のよいところだった。流れで洗い物ができるし、炊事の水もえられるから便利だと彼らは思っ、この場所を決めたのだった。まったく、非衛生的な水ではあったが、彼らはいきけんこう一向とんちゃくしなかった。マッチを2本以上使ったが、勉強したとおりにすぐたき火を起した。彼らはアメリカインディアンの諺——インディアンは小さなたき火を起し火の回りに近寄るが、白人は大きなたき火をするから遠まきに火にあたらなければならない——を知らなかった。それから食事の仕度にとりかかった。いろいろな物をいいかげんに混ぜあわせて、火でこってり焼いた。この年ごろの少年はまずいものなしだから、味などどうでもよかった。それから、少しおそくなったが、テントをたてはじめた。班長はナイフをとり出して、若木を2本倒し、縄を器用に使って、なんとかテントらしいしろ物をターポリン布でつくった。暗くなつたし、疲れも出てきたのであるが、しかしうきうきしながら、テントにもぐりこみ床に入った。彼らはグラウンドシートなど思いもよらなかつたが——幸いにも地面は乾燥していた。彼らは寒気は地面からのぼることを知

らなかつた。たしかに、彼らは知識に乏しかったが、実行により知識を広めていった。

開拓者になったような気持で、テントの中で話をしていたが、やがて1人2人と眠りにおちていった。しかし、特別な責任を感じている班長は眠ることができなかつた。誰にも打ち明けなかつたが、一晩中目をさましているつもりだった。

まるっきり真夜中ではないかと班長には思えたが、実は10時ごろにしかなつていなかったが、外で足音がピタリととまった。班長が聞き耳をたてていると、懐中電燈が光った。外をのぞくと、大きな靴が一足、目の前に立ちふさがっていた。視線を上へ上へとたどると、紺の長ズボンが見え、はるか上の方から太い声が響いた。「いったい、何の遊びをしているつもりかね」。その声に、他の連中が目をさました。困ったことに、そこに立っていたのは警官だった。班長は「僕たちはスカウトで、野営をしているのです」と答えたが、1908年にスカウトのことを知っている警官は少なかつたし、この人も例外ではなかつた。「ここから、家に帰るんだ」といわれてしまった。まったく残念だったが、道具をまとめて、警官のあとに従うよりしかたがなかつた。驚いたことに、家からたいして離れていないところだった。地図は持たないし、方向感覚がまるっきりなかつたから、彼らは円を描いて歩き、家からたいして離れていないところに野営したのだった。家に帰ってから、彼らがどんな罰をうけたかはいわないことにしよう。しかし、彼らは、少しも、ひるむことなく、次の晩にまた納屋に集合することにした。日曜の



晩、納屋に集合するまでに、班長は時間を有効に作って「スカウティング・フォア・ボーイズ」を読み返した。だから全員が集合すると、まず口を開いた。「おいみんな、僕はこの本を読み返したんだ。そうしたら隊長のことが書いてあるんだ。どうやら僕たちに必要なのはこれじゃないかと思う。この人なら警官を追っ払ってくれるだろう」

そう、これは隊長の任務の1つであり、諸君の班や隊が、隊長を必要とする理由の1つである。

隊長は他からの干渉をうける心配なく、諸君がスカウティングを続けられるように骨を折ってくれる人である。

この班が、自分たちの力で出発したことを忘れないでほしい。少年たちが、班を作り、班にとって隊長が必要なことに気づき、自分たちの力で隊長を見つけてきた。こういう隊は、いつまでも続いていく——おそらくその理由は正しい精神で出発したからである。

今日では、隊長が班を作り、スカウトが加入するのが普通であろう。古い方法における重要な点は、最初から班長が班全体の鍵を握る地位にあることを自認していたことである。もし班長の認識が不足していれば、班は自滅してしまったであろう。班長は、知らないのや、できないのが当たり前なこと以外で、隊長の力を借りたり、おとなの助力を求めたりはしなかつた。今では、本当に班らしい班はなくなつた。班はただスカウト隊の手ごろな1小隊としてしか活用されていないようである。班には、隊から全く独立した班本来の行き方があるはずである。

スカウト隊は、班の集合体にすぎない。班が班員を掌握したりゲームをするために便利な単位としか役立たないならば、それはとうてい班とはいえない。隊集会は各班が互いに競争し合い、激励し合い、集会で学んだことを班が実行し経験を深めていく1つの場であるべきだ。隊集会はよくやるが、班集会はあまりやらないという現象がわが国や世界の各地にみられるのはまことに残念なことである。諸君は諸君の班を隊長なしに指導し、指導と援助が必要なときは隊長に助けを求めるようにしなさい。賢明な隊長は隊長の職分をわきま

えているが、ときには班長があまりにも隊長に依存したがるために、隊長の本分を越えてまで指導しているが、これは班長の責任である。

今晚、この章を書きはじめる前にラジオでなじみの友だちの話聞いた。私は諸君に、班長として記憶しておいてほしいと思う1つのキャッチフレーズを彼の話から思いついた。——それは、いつでも「隊長、いいことを思いつきました」ということである。諸君は考えの沸き上がる泉である。幸い、諸君は考えついたことを実験する場である班を持っている。スカウティングには、1つの考えがよいものか、実行する価値のあることかを計る尺度がある。それは実に簡単な尺度である。すなわち、「それがスカウトのおきてに反しないか」ということである。おきてに反しないならぜひとも実行しなさい。おきてに反するなら、他の方法を見つけなさい。

諸君が班長に選ばれた理由は2つある。第1の理由は、諸君自身を伸ばすためである。諸君は、この機会に技能を学び、仲間を指導する方法を会得できる。これはスカウティングにおける最高の名誉であり、絶好の機会である。誰も今の諸君を一人前の指導者だとは思わない。しかし、班員を指導しながら指導法を学びとり、諸君が将来りっぱな指導者になることを皆が期待している。班長になる前、諸君はおそらく普通の班員だったはずだ。このことは、諸君が班長に従うことをすでに勉強したことになる。上の者を敬う心を持たない者は指導者になる資格はない。第2の理由は、諸君の隊長も班員も諸君の指導力に信頼をおいていることである。

班長の任務の第1は、班員がスカウティングをするように、すなわち、少なくともスカウティングのもっとも重要なちかいとおきての実践だけは守るように、班員の監督をすることである。これはユニフォームを着ているときだけではない。家庭でも、仕事場でも、学校でも、どこで何をしていようと、いつでも守るよう監督することである。班長の指導で、もっともたいせつなのは、自分の行動に気をつけ班員によい手本を見せることである。たびたび聞いたことで、またかとうんざ

りするかもしれないが、たいせつなことは何度きいてもよいものだし、人間である以上諸君だって忘れるということもあろうから、繰り返すいうが、諸君は火曜の集会のときだけ、キャンプにいったときだけ班長らしくすればよいのではない。要は毎分を班長らしく行動し、物事を処理しなければならない。これは班長にとってたいせつな心構えである。諸君の班員が、諸君の前でも、いないところでも、いつでも諸君の命令を守るようではなければならない。班長章を隊長から授与されたときに、諸君はこの責任をしっかりと胸にたたきこまなければならない。隊によっては、班長任命式をするところがある——これは規約にはないが——。班長になる者はスカウトのちかいを復唱し、その他にも少しちかいをたてる。それはこんなふうなものだろう。「私は班に服従し、私の班は隊に服従することをちかいます」「私は班に服従することをちかいます」。班長は没我の精神を持つ者でなければならない。世界史に名を残した指導者はみな、この精神がいかにとうといものであるかを立証している。南極で命を落としたスコット・オーツは指導者の鏡である。ギルウェルにキャンプにきた班長にもりっぱな少年がいた。ある晩おそく、やぶに落ち込んで全身傷だらけになった班長が、管理人の小屋にとびこんできた。「いったい、どうしたんだい」と聞くと、「僕じゃあないんです。次長が、次長が火傷をしたんです」といって気絶してしまった。これは班長の鏡といえる。班長には勇気が必要である。なかなかこんなふうな犠牲を払うことはできない。諸君たちの払う犠牲は、せいぜい犠打を打ってクリケットの打撃成績を悪くしたり、班野営でケーキのいちばん大きいのを遠慮したり、ケーキを食べるのをあきらめることぐらいだろう。根本の精神は同じなのだから、後者ができれば、もしそういう状況にいたれば、前にあげたこともできるし、やる気持ちもなると思う。

悪い班長の例を2つあげよう。1つは、大きなことをいう班長、いいことは自分の成績にし、悪いことは人のせいにする者である。まあ「調子のいい」男である。「いいから、いいから——おれ

にまかしておけ」といったタイプの班長はなんの役にもたたない。もう1つは、もっと程度が悪い。いばりちらす班長だ。だいたい、班長は年上の者になるので、年が上なだけに体も他の班員より大きいから班の統制をとるには班員、特に、新入りの班員をおどかすに限ると思っている班長だ。考え違いをしないようにしてほしい。よい班には規律が必要だが、規律は「班長の行動を手本にし、班長のような人間になろう」という気風からできあがるのであって、「班長のいうとおりにやれ」という気風から生まれるのではない。大口たたきと空いばりが、よい班長になれない理由だ。このような班長は人間の悪い手本であるから、班長がいなくなると班員はまったく何をしてよいかわからなくなる。こんな班長はなんといっても最低である。

最後に班について B-P が残されたことばを1つ紹介しよう。「班長に多くを期待すれば、10中8, 9, 班長はその期待にこたえる活躍をするが、班長を甘やかしたり、その手腕を信頼しないと、班長は積極的に行動しなくなる」ということばである。これは隊長に与えたことばであるが、私はこのことばをそっくりそのまま諸君に与えたい。諸君の班員は諸君に大きな期待をかけている。諸君は自分を甘やかすことなく、班長に課せられた信頼と責任を自覚して、精神的に自分の創意をいかし、隊長の助けを得ながら班員を訓練しなければならない。——つづく——

「班長の手引」を読んで

中村 知

1. 班制度とは

私はこの最初のところに——ジョン・サーマンが、

○「班制度が容易なことでないことは喜ぶべきことである」

○「なかなか手ごわいのが班制度である」

○「制班度を動かすことができるのは班長の諸君たちだけである」

○「班制度の成否は、ひとえに諸君にかかっている」ということばに、非凡なものを感じた。

われわれは、口で、文で、講義で、何十年となく班制度について説明をしてきたが「容易なことでない」とはいつか、「容易なことでないことは喜ぶべきことである」という、このジョン・サーマンの、いいかたは、実に、含蓄のあることばだと思ふ。

われわれは、班制度の成功、不成功の鍵は、隊長にある——と、常々いつてきた。ところが、著者はそれは、ひとえに、班長である諸君にかかっている——と断言し、班制度を動かすことのできるのは班長たちだけである——と、1本、まっとうから打ちこんでいる。

私は、これぞほんとうの説明だと思ふ。それは隊長のモノでなく、班長のモノである。班長が主体であるという点で。

この文の中に「動かすことができる……」という語がある。この一語も、見のがせない。もし、動かさなかったら、また、動かなかったら、それは有機体でない。運動体でない。だから班制度ではない。班制度とは動く有機体である！ 動かなかったら単なる組織でしかない。形態でしかない。いかに精巧な部品で組織された高価な時計であっても、もし、動かなかったら運動(movement)がない。

“Scouting is a Movement, not just an Organization”——「スカウティングは運動である。組織だけのものではない」という、バーデン・パウエルの言を味わうべきである。

ところが、組織だけで、ひとつも動かなかったり、動いていると安心して、いつのまにか止まったりするような班制度？(ほんとうは班制度ではない、班制度の形に似せたニセモノ)が、不完全班制度がなんと、多いことだろう！ ネジをいくら巻いても針が動かない時計——。

ジョン・サーマンは、それは「班長だけが動かすことができる」といつた。さあ、そうすると、隊長はどうなる？ 隊長という者は不要だろうか？

著者は、「この運動には、最初から隊長がいたのではない」といつい、1908年代の歴史を語って

いる。すなわち、スカウティングは、「スカウティング・フォア・ボーイズ」という本を読んで、これはおもしろいからやってみよう——というので、少年たちが、勝手に班を組んでやり出したもので、その当初、隊長はなかったことを、述べている。

後年、少年にまかしておくだけでは法律上の責任がとれないから成人の協力をたのもう——ということから隊長ができた。今日、隊長は、団委員会によって選任されるが、もとは少年自らが選出したものだった。

以上のことから私は、今日のスカウティングでは成人のほうが、こどもの座を乗っ取ってはいないか、と、疑うのである。つまり、組織としてはその構造が近代的に、法治国家的になってきたものの、運動の面で、プロパー(本来的)な運動を維持しているかどうか、ちょっと、心配である。成人にヒサシを貸してオモヤを取られたのでは成人スカウティングになってしまう。

次に著者は、スカウトたちは、実行することによって知識を広める——つまり、行うことによって学ぶ——Learning by Doing をするものだが、その実行(Doing)のためには、組織が必要となる。それが班というものだ——と述べている。

そうすると、班活動というものがスカウティング——換言すれば Learning by Doing の核であり単位であるべきだ。しかるに

○班らしい班はなくなった——

○隊集会はよくするが、班集会はあまりやらないという現象がわが国(英国)はもとより世界各地に見られるのは残念である。

○班長は、あまりにも隊長に依存しすぎる。

○それは、隊長の罪でもある！

と、ジョン・サーマンは指摘している。

○隊長は、まかされてよいだけの信頼と指導力をもつよう、自分を修練しなさい。

以上で第1章は終わっている。

つまり、隊長に依存するようになるのは、班長としての指導力が欠けるからだ、と、班長に注意している。

いうまでもなく、この本は「班長の手引」という本で読者としての対象は、班長だから——。

班長の手引

—THE PATROL LEADERS' HANDBOOK—

ジョン・サーマン

今回、班制教育のよりいっそうの発展を願って、ジョン・サーマン氏著「班長の手引」を再掲載する。初版は1950年に出版され、これは1955年版の訳稿である。これが掲載されてからすでに18年の年月が経過しているが、指導者諸氏が熟読され、じゅうぶん咀嚼して実り多き班制を実現されるよう希望する。

《第2章》 ギャングとしての班

B-Pは「スカウティング・フォア・ボーイズ」の中で、いとも明快に班のことをギャングと呼んでいるが、もちろん、それは40年も前の話であった。

その後月日を経るにつれギャングという語はあまり芳しくない意味に——乱暴者や不良や悪党の集まり——よく使われるようになってしまった。

さて明らかに、ギャングといっても班は良いギャングであるに違いないが、悪いギャングと共通の要素を持っている。

いっばしのギャングであれば、いろいろのことをみんなでしなければならないし、ギャングの一員はその首領に服従しなければならないし仲間同士が互いに信頼し合わなければならない。

非常に明らかなことではあるが言わなければならないと思うからあえていうが諸君の班が持たなければならない資質の一つは「良いギャング精神」すなわち班員はまず第一に互いに堅い友情で結ばれた友達であり共通の興味をわかち合う者であり、一緒に物事をやり同じような事をする連中の群であるということである。ギャングの一員であるということは一つの特権であり、班の一員であるということはそれ以上に大きな特権である。しかし権利にはすべて責任が伴うものである。

諸君が班長であろうが新入りのほやほやであろうが、諸君はいつも班の名誉と願わくば栄光に対して責任があることに変わりない。

なんでも一緒にするという意義は何なのだろうか？ 重要な事の一つは、班員が互いに近くに生活しているということである。もちろん、学校隊とか開村地方という例外はあろうが、一般的に班は班員が互いに、しばしば顔を合わせるができるような範囲内におかれるべきであるという。

狭い意味では、彼らは必ずしも一緒にスカウティングをしているわけではない。私がここで狭い意味といったのは、彼らは必ずしもスカウトクラブ（作業）を実行しているのではなく、ギャングとして他のこと——写生に行くこともあるだろうし、フットボールをしたり、みんなと誰かのクリスマスパーティーに出席したり——をしているためである。

私は始めてギャングの仲間入りをしたときのことを思い出す。それは6歳ぐらいだったと思う。どうしてそうなったのかまるっきりわからなかったし、いまでもがてんがいかない。しかし確かにギャングの仲間入りをしたことに大変誇りを感じていた。

実際私が仲間入りできたのは私のせいではな

く、私の物わがりのいい叔父が無分別にも私にくれた空気銃のせいだった。とにかくこのギャングのリーダーは私が空気銃を持っているのは非常に危険だと決めつけてすぐに自分が管理することに決めてしまった。（空気銃は一体どうなってしまったのだろうか、それが空気銃の見納めだった）

しかしこのことで大切なのは、私がギャングの一員であることに誇りを持っていたことである。

私は喜んでリーダーに従うつもりだったし、事実、何かとてつもないことをする覚悟でいた。このギャングにはいろいろな儀式があったが、その一つに、新入りはわらじ虫を食べることになっていた。こんなことを諸君の班に取り入れることをすすめる気はないが——きっと諸君にだってそんな気はないだろうが——スカウトというものはどんな命令にも進んで従うことを班長に対して証明しなければならないものである。

もちろん、班長にもよろうが、かつて私がおった班長のようなでたらめな命令を出したり不愉快な命令を出したりする班長はいない。

諸君の班はまとまっているという意味でギャングぶりを発揮してほしい。すなわち物理的にはまとまって種々なことを行い、他の点では互いに助けあって困難をぬけだすことによって——要するに一つのチームとして行動することによって。

ここで私は指導ということについてももう少し、話をしたいと思う。指導の方法には三種類がありその内の二つは悪い方法であり、あと一つは良い方法である。

悪い指導方法の一つは、全く指導力がない、すなわちいつもめっちゃくちゃにやることである。

誰一人として発言をしないし、誰も決定を下さないまるっきり指導する者がいない。

この方法は全く見込がありません。班長は全く無気力で、無能力で責任感などは持ち合わせていない。

誰にでも気に入られたいという気持は本能的に起きるものであるが、班長という者はすべて、いつも誰かれなくみんなを満足させることは不可能なことを知っているべきである。どうにか幾人かの人を満足させることができれば、それで万事申

し分ないのである。

次に悪いのは、独裁的な指導方法である。

この場合、班長は決して誰にも相談をしないし、アイデアを求めようとしないし自分一人ですべてを決定し、自分が間違っていることがはっきりしたときでさえも、「僕は班長なのだ、君たちは正しかろうと間違っていようと僕の命令どおりに実行しなければいけない」といったようなことを口走って、無理を押し通そうとする。これは、いわゆる「地獄の底行き」という方法である。誰にも相談をしないような班長には班員やギャング仲間はすぐ見切りをつけるものであるから、この方法はあまり効果的ではない。

いつもいざこざがたえない班は長続きしない。また当然のことだが独裁的な班長は、あまりいい奴とはいえないし、班員がついていこうとは思わない類のものである。

第三番目は最高であり、スカウティングのみならず人生一般に通ずる唯一の指導方法であると私は考えるものであるが、納得させて指導するやり方である。

すなわち班長である諸君は、仲間が諸君を受け入れ尊敬し、指導を望んでいるために指導するのである。



少しばかり他の人々と協議するという問題に話を戻そう。

8人ぐらいの編成の隊では、8人の違った人間がいることをいつも頭におかなければならない。中にはある点に非常に優秀だが他の点には、あまりよくない者がいるし、中には年は下であるけど、料理や開拓作業とか漕艇とかウッドクラフトに異常な才能を示すスカウトもいることだろう。ある者は他より観察にすぐれていたたり、その他の感覚が非常に発達した者もいよう。

班長としての諸君の任務は個々のスカウトの才能を班全体のために役立たせるように使うことにある。

誰も諸君が完全であることを期待してない。

必ずしも諸君が実技の面で、班において最高のスカウトであることを期待しない。班の2番、4番スカウトの方が、ある特殊なスカウト活動においては班長よりもすぐれていることも正しく、よくあることである。いいかえれば、諸君がいま指導している班員に、諸君がよりすぐれているから、指導の任にあたっているのではない。

最もすぐれた班長にしても——あるいは他の社会の指導者にもあてはまるが——活動面では特別に精彩は放ってはいないが、人を指導する方法を知っている者たちである。すなわち彼らは活力を呼び起こす方法や自信を高めさせる方法を知っていて、それによって各人の能力を最高に発揮させ、班全体に役立つように各班員の才能や技能を生かす方法を知っている。

諸君は「三銃士」の話を知っていると思う。彼らは班を作っていたともいえよう。彼らがなした事には我々がそのままねをしてはいけないようなこともあるが、彼らのモットーである「一致団結」は班が当然採り入れるべき類いの考え方であると思う。不思議なことに、団結の力について私が最も良く思い出すのは私がまだ幼なかったときに読んだ話である。実は、その話は私が本を読めるようになって最初のころに持っていた本の1冊に載っていた。

多分その話を読むのに、苦勞したことや、短い物語ではあったが読むのに非常な時間がかかった

ので、それを覚えているのだろう。

諸君はその話を耳にしたことがあると思うが、いずれにしても、その話はここで披露する値打ちがあると思う。

生涯一生懸命働いたおかげで立派な成功をおさめた一人の老人が、病いに倒れ余命がいくばくもないことを知った。老人には三人の丈夫で立派な息子がいた。

彼らは父親のために働いてきたし、だいたいにおいて老父に服従してその教えを忠実に守っていたが、息子同士はあまり仲が良くなかった。

自分が死んだあと、息子たちはたぶん喧嘩し、農園は分割され、せつかく皆で築き上げた財力もうしなってしまうように老父には思われた。

老父はこのことを大いに心配した。誰だって自分が一生懸命働いて作りあげた物がなくなろうとしているのを見過ごすわけにはいかないだろう。そこで、ある朝、老父は三人の息子たちを呼びにやり自分の枕元に集まらせた。老父は1メートルぐらいの長さで、太さが2~3センチぐらいの棒の堅く縛った束を床から取り上げた。

三人の息子たちは非常に力が強かった、とくに上の二人は近所で評判の力持ちであった。

老父は年下の弟に棒の束を渡していった。「おまえは兄たちほど力は強くないと思うが、この棒の束を折ってごらん」年下の息子は棒の束を取り上げ一生懸命に折ろうとしたが折れなかった。次に二番目の息子に棒を渡していった。「おまえは弟より力が強い、さあ折ってごらん」そこで、彼は汗を流しながら一生懸命がんばったが彼の努力もむだだった。そこで非常に力が強く自信満々の長男の番になった。彼は棒を取り上げ、ひざにあてて全体重を棒にかけて折ろうとしたがそれでも棒は折れなかった。

そこで老父は棒の束を取り、縛ってある紐を切った。そして息子たち一人一人に棒を一本ずつ渡して「さあ、折ってごらん」と言った。

なんの苦勞もなく、三人の息子たちは棒を折ることができた。そこで老父は言った。「ねえ、わかったらう。棒が束ねられていた間は、おまえたちの強い力をもってしても、折ることができな

ったが、いったんその紐を切ってしまうもはや簡単に折ることができる。わしの生命はそう長くはない。わしが死んだら、いいかい、兄弟が力を合わせるより他にないのだ。もしおまえたちが力を合わせれば、いつまでも強く、栄えるであろうし、分かれてしまえば、おまえたちはこの棒の一本の力さえもないのだ、そして没落してしまうだろう」

スカウティングは、われわれを、特に班員を一つに結ぶ独特の紐がある。これはただスカウトの「ちかい」と「おきて」を実行するだけである。

この事については、後で詳しく述べるが、スカウトの「ちかい」と「おきて」は我々スカウトを強める紐であり、心から打算を捨てて受け入れなければならない紐であることを考えていただきたい。

我々の班が成功か失敗かは、「我々の責任なのであって、けっして私（班長）の責任ではない」という覚悟を常に持ちたいものである。

『班長の手引』を読んで

故 中村 知

2. ギャングとしての班

この章でギャングというものについて詳しく説

明している。成人対象の講習会の講義では「児群」についてふれることになっている。班制度はこの児群（ギャング）本能を昇華（サブリメーション）するものだという心理学的分析にはいるところである。そういう内容を著者は少年向きに書いているわけ。

しかし、それは班制度と児群本能の関連を教えることに著者の狙いが存するのでなく、指導——ということの意味をわからせるためのようである。

○班員より、すぐれているから班長になったのではない。

○人を指導する方法を知っているからになったのだ。

○活力を呼び起こす方法を知っているからになったのだ。

○自信を高めさせる方法を知っているからになったのだ。

と、具体的に、班長というものの基準を示している。

この章で著者は団結——ということを強調し、例話をあげている。その例話はイギリス版毛利の三本の矢のたとえ話そっくり。こういう例話は、イタリアにもある。いわゆるリットリオ（団結）の話。

そして、その団結のヒモになるのがちかいと、おきて——だと、いってこの章を結んでいる。



班長の手引

—THE PATROL LEADERS' HANDBOOK—

ジョン・サーマン

今回、班制教育のよりいっそうの発展を願って、ジョン・サーマン氏著「班長の手引」を再掲載する。初版は1950年に出版され、これは1955年版の訳稿である。これが掲載されてからすでに18年の年月が経過しているが、指導者諸氏が熟読され、じゅうぶん咀嚼して実り多き班制を実現されるよう希望する。

《第3章》 班と名誉会議

スカウティング・フォア・ボーイズの「班制度」の章で、B-Pは次のように言っている。

「名誉会議は隊長と班長から構成される。また小人数の隊の場合には、班長と次長で構成されることがある。名誉会議には、だいたい、隊長が出席するが、決して議決に加わらない」

「名誉会議は表彰、処罰、作業プログラム、野営、隊の運営に関するその他の問題を決定する。名誉会議の構成員は機密を守らねばならない。ただし、隊全体に関係のある決定、たとえば任命、競技などにかぎり公表してよい」

諸君はこれまで何度もこれを読んだらうとは思いますが、繰り返し精読してほしい。これはスカウティング・フォア・ボーイズの中でも、たいていのスカウトや指導者が簡単に読みすごしてしまうか、ぜんぜん読みもしない部分に入っているのではないかと思われ、私は不安である。しかも、これはスカウティング・フォア・ボーイズの中に扱われている最も重要な問題の1つである。名誉会議が活動していなければ、班制度は運用されていないといっても過言ではない。

スカウティング・フォア・ボーイズから引用した、以上の文章を吟味して、班長である諸君はこの文章に盛り込まれた意味をどうやって実行でき

るか、実行すべきであるかを考えてみよう。

まず第1に——「名誉会議は隊長と班長から構成される」さて、「構成してもよい」とも「構成することができる」ともいっていないことに気をつけなさい。いいかえれば、各隊に名誉会議を置くことはスカウトのちかいや野営にいくと同じくらいスカウティングにおいては重要である。われわれはこの事実を直視して、とにかくわれわれの隊には名誉会議を設けて、それを活用していくように心がけなければいけない。

上の文につづいて「たいてい、名誉会議に隊長は出席するが、議決に加わらない」と書いてある。私は、諸君の隊では、隊長は議決権を持たない者がそれが守られていることを強く希望する。班長である諸君は、隊長と助言者のように考えるべきである。つまり隊長は諸君や他の班長に諸君たちが考えたいと思っている事を暗示したり、脱線しそうになったときに軌道に戻らせたり、名誉会議が正しい任務をつづけていけるように、実際にする者である。しかし、どうしてもやむにやまれない緊急の場合でなければ、口出しをしてはいけない。

さて、私は次の文章を強調したい。「名誉会議の構成員は機密を守る」諸君はこの言葉の重要性

を味わってほしい。また、諸君は名誉会議の役割を十分果たす覚悟を持ってほしい。もし名誉会議というものが班長が集まって、誰かのことを議題にして話し合うだけのものなら、その名誉会議は正しく任務を果たしているとはいえない。その理由はいろいろあるが、そのうち、2つの理由をあげれば十分であると思う。

第1の理由は、名誉会議はなによりも隊の名誉を扱う、すなわち、名誉会議は隊のスカウトの個人的な行為を取り扱うということである。諸君は、事の大小はともかく、隊の名誉を落とさせた——たとえば競技やその他の重要な大会に欠席したり、何らかの方法で名誉を傷つけた——スカウトの処分を話しあうことがあるにちがいない。隊の最高機関である名誉会議を持ってこの問題を論じ、処置を決定することは、明らかに必要である。名誉会議が新米の初級スカウトや隊に無関係な人たちの共有財産になることはとうてい考えられないことである。

第2の理由は非常に異なった見方である。名誉会議はいつもきたるべき事を考えなければならないということである。次の夏期野営はどこで行うかとか、いつ団の音楽会を開くかとか、隊の特別活動をいつ、どんな方法で実施するかということ論ずる。言いかえれば、名誉会議の話し合いには1回の会合では片付かないものもある。不正確で中途半端な話を持ちこまれるほど隊にとって迷惑なことではない。もちろん、話し合いを重ねたうえで名誉会議は決定を下し、それから班長は班員に伝え隊長は隊全体に話をする。これが現代流に言えば「情報の発表は正しいときに」ということである。隊全体が正しいときに、同じ方法で情報を得るようにすることは非常に必要なことである。

したがって、各班長は名誉会議の機密を遵守しなければならない。その理由の第1は、その誓いをしたからであり、第2はこの誓いを厳守しないかぎり、隊を秩序正しく、厳格に運営することはできないからである。

さて、少し後戻りしよう。B-Pは「名誉会議は表彰、処罰、作業プログラム、野営、その他の隊運営に関する問題を決定する」と言われた。

B-Pがいう表彰とは何であるのか、おそらく、あまりはっきり理解できなからう、というのはスカウティングは優勝杯とか優勝メダルという意味の賞を決してださないからである。しかし、B-Pの真意はスカウトの立場から——すなわち、ちかひ、おきて、スカウト精神——スカウトが1級章や2級章またはある技能章をうける資格があるかを各名誉会議で決定させるところにあったと私は信じ、また、こう解釈して私は私の隊を運営してきた。

名誉会議は技能章の考査とはぜんぜん関係がない——これは隊長や各地の技能章考査員の仕事であり、彼らが、考査を行って、少年が努力をしたかとか、必要な知識や技能を身につけたかによって合否を決める——しかし、信号や救急やハイキングに完全な能力を見せた少年が、必ずしもいいスカウトとは限らない。さて、考査員にはこれは判別できない。しかし名誉会議はそれを判別できるだけでなく、それを当然知っておるべきものである。したがって、名誉会議の任務の1つは、技能章が授与される前には必ず、該当のスカウトはちかひの実践に正しい努力を払っていること、同時に、年をとるにしたがって前進的に努力が著しくなっていることを証明することである。



それはこんな具合にやる——たいていの名誉会議の議題には「考査と技能章について」という一項をおくことである。まず隊長は「ビル・バギンズ君は救急章の考査に合格した」という報告をする。そこでビルの班長はビルのスカウトとしての評価を名誉会議に対して発表する。名誉会議は、ビルが技能考査に合格点をとったことは認めるがそれに加えて私が精神考査と呼ぶところの考査に合格するかを判定し、この2つの点が技能章の授賞に値するとはっきり確信できたとき、はじめに名誉会議は授賞の決定を下すのである。

スカウティングの基準を保つためには、これ以外に方法はない。もしわれわれが物質的な面だけにとらわれるのであれば、とうていスカウト隊とはいえない。つまりスカウティングの真の目的を見失ったユニフォームを着た一種のクラブに他ならない。

表彰についてはこのくらいにして、処罰について述べよう。スカウティングにおいても、隊長が処罰のために体刑を科した時代があった。便所を掘らせたり、ジャガイモの皮むきをさせたり、ぞうきんがけをさせたりした例がある。この考え方は馬鹿げていることを、またこのような仕事は処罰としてではなく名誉心を持って行わせるようにわれわれすべてが心がけたいものである。つい2、3日前に、私は、最初の頃に行った野営の思い出にひたったことがあった。この野営では当番班は置かず、特権班だけをおいて、班が他の班のために働くのは1つの特権であることを教えた。諸君の班が課せられた任務は1つの特権と考え、処罰とみなさないように希望する。ところで、処罰に体刑を使わないとしたら、どんな罰を与えたらよいのだろうか？ 私は、スカウトが行事へ参加するのを禁止する処罰方法をとったらよいと信ずる——週末キャンプとかハイキングとか探険とか、われわれの名誉会議が、そのスカウトが参加したら隊の士気が下がると思われるものであればよい。ただし、この点についてわれわれは少々注意を払わなければならない。隊がクリケットの試合をしたときに、大量得点を期待して送り出した打者が、空振りの三振をしたとしてもそれを、おろ

かにも隊の士気を傷つけた事のように思ってはならない。隊の士気を傷つけるというのは、もちろんそんなことではなく、その者にやる気があるかないかということによってきまる。事実、スカウトが犯す罪で名誉会議の処罰を必要とすることは、いわゆる、怠慢の罪——やるべきことを為す気力がないとか、やるべきことをやらない——であることが多い。

もう1つ、名誉会議によって処罰されるべき罪がある。それはスカウトのおきての1つを破ることである。この点でも、われわれは少々注意が必要である。荷車を押しているときに車輪がスカウトの足をひけば、悪いことにはちがいないが、誰だってスカウティング・フォア・ボーイズにはでてこないような乱暴な叫び声を上げよう。乱暴な言葉使いは、ふつう、知性の低さと形容詞の正しい使い方ができないことを示すが、ものはずみで、ささいな間違いを犯すということもあるのだから、この点は大目にみなければいけない。スカウティングで見すごすことのできないことは、いかなる言葉にせよ、知っていながら悪い言葉を使うことである。われわれの隊には1つのすばらしい古い慣習があった。スカウトが乱暴な言葉使いをすると、彼の班長は、彼の上衣のそでからコップ一杯の水をながしこむことになっていた。私個人としては、うまい着想だと思っているので、それが廃止されたのは残念でたまらない。腋の下に冷水を注がれたら、どんなスカウトだってたま



たものではない。次からは言葉使いに非常に気を付けて、下品にならないように心がけたものだった。

名誉会議が決定する処罰法はスカウトが何らかの活動に参加する権利を取り上げることが本筋であると思う。ときには、なかなか決心しかねるときもあろう。しかし、諸君は正直に、諸君の任務を正しく果たす覚悟を持つべきである。たとえば、強打者ではあるが、前の週の野営競技大会に予期に反して参加せずに、隊の士気を落とした者はクリケットの試合に欠場させるのはつらいことである。今私が班長であれば、私はクリケットの試合に勝目がないのを承知の上で、あえてそのスカウトに「自分は不可欠の存在である」といった気持を持たせないようにするだろう。隊の一員であり、班の一員であることは特権であること、および、その特権は日々蓄積されていかなければならないことを、私だったらそのスカウトに自省させるつもりである。

処罰の問題についても一言つけ加える。それは、もし正しければ、隊長は経験と頭とを使って名誉会議の決定をくつがえしてもよいということである。名誉会議は簡単に腹をたてて、腹立ちまぎれに全く不当な不合理な処罰を決定するかもしれない。隊長は、立腹を考慮にいれずに、名誉会議の決定をくつがえしたのかもしれない。このような問題を扱うときには、班長の諸君はできるかぎりの任務を貫徹すべきではあるが、いつも隊長の指導に服従しなければならない。

スカウティング・フォア・ボーイズの引用文にもどり、用語の配列に重要な意味があることをくみ取ってほしい。表彰と処罰が文章のはじめにあるのは、つまり、これらは隊の名誉に関係するからである。すなわち、これが諸君が名誉会議と呼ばれる理由である。諸君は隊の名誉の保護者であるということである。第3番目に、B-Pは作業プログラムと書いた——名誉からずとはなれて——諸君は諸君の頭の中でもまた行動においてもこの順序どおりに以上のことを整理するよう私は望む。

プログラムについて私が言いたいことは、ただ

名誉会議のこの点に関する任務はまず個人的に各班の意見を聞いておくということである。班長である諸君は班の代表者である。諸君は班員の希望を聞いてあるだろうし、また班会議はプログラムやゲームなどについてのいろいろな着想を論じ、その話しあった結果を名誉会議に持ちこむのが諸君の任務である。諸君自身にはあまりおもしろくない提案もしなければならぬ。これはスカウティングから諸君がうる教訓の1つである——すなわち諸君が完全に同意できない班員の希望を班員を代表して発表する方法を学ぶ機会である。悪い班長は、名誉会議で、自分のことだけを考える者であり、反対にいい班長はいつも班員のことを考える者である。だいたいにおいて、諸君は班会議の討議した着想を完全に名誉会議で発表でき、それが隊のプログラムに反映できるよう希望する。ここで第2の教訓を諸君に与える。他の班長全員が諸君の着想をすべて拒絶することがあろう。この場合には、諸君のとるべき道は2つある。まず、諸君の敗北をつつしみ深く認めること、第2に班に戻ったときに班員が名誉会議の決定を忠実に守るように努めることである。だんじて、次のように言うてはならない。「僕たちは、それに賛成ではないから、それをやる気持はない」とか、「僕たちは、フットボールをしたいので、キャンプにはいかない」とか。このときこそ諸君の指導力をテストするときである。実際、指導力のもっとも大なるテストは自班の選択に合わない決定に班員が熱心に従うように指導することにある。

名誉会議はプログラムの細部にまで立ち入らない。それは諸君の任務ではなく指導者の任務である。諸君の務めはやりたいと思うことを表示することであり、プログラムは隊の弱点の改善に意を注ぐことである。たとえば、もし隊の野営競技の成績が地区の最下位であれば、班長は野営技術に——たんなる野営ではなく、野営技術の訓練に——もっと着目するよう提案することになる。または、1級章の信号ができなくて1級になれないスカウトが隊にたくさんいるなら、名誉会議はプログラムにもっと信号を入れるように提案することになる。名誉会議は班のスカウトの役に立つ

ようなことを、総体的に、提案すべきである。「国旗掲揚7:30、点検7:35、ゲーム7:40など」というプログラムは立ててはならない。このようなことは、すべて、隊長の任務である。諸君の決定が何であれ、隊長は諸君に話さないことをプログラムに導入する権利を持つことを諸君は承知しておくことが必要である。スカウト隊全員が火曜日の夕方7時45分に何が行われるかを正確に知っているようでは、1日が退屈の上もないノ興味はまったく失われてしまう。隊長の任務の1つは興味をどうやって継続させるかにある。諸君のプログラムへの提案はおおまかな方向づけにとどめ、詳細に至らないようにしなさい。

B-Pの終わりの言葉は「……その他隊の運営に関する問題」である。こういえばすべてのことを含むことになるが、本当の意味は、まずなによりも隊費に関する提言、すなわち隊員が納め、名誉会議だけが使う権利を持っている隊費の使いみちのことである。この他の方法で、隊または団全体のために集められた金は団委員会が監督するが、隊費としてスカウトが納める金は名誉会議の所持金であり隊長に相談したうえで名誉会議が使いみちを決める。私はお金の使い方を教えようとは思わないが、その一部はスカウティングをもっと多くの少年に与えられるような目的および諸君より不幸な境遇にある人々に善行をするために使うことを強くすすめる。

隊の運営に関するその他の問題といえば、次長と班長の選出、特別な野営などで特別な任務をする隊やスカウトの選任および隊の進歩と停滞打開のための提案がある。これらはすべて隊運営という問題に含まれる。諸君がこのために尽くすなら、諸君はすでに知ってのとおり、名誉会議が全スカウト機構の中心になることはまちがいない。名誉会議にでる意見は選別され、道理にあった形に作り上げられ、隊のスカウト全員のためにるように機構の隅々にまで波及されていく。

名誉会議は事務的に進めること、および会議録をつけるよう希望する。しかも、委員会のような考え違いをしないよう気をつけなさい。諸君は、いつでも、隊の名誉と隊の進歩と隊員1人1人の

進歩に関心を持つことである。

最後に、諸君の名誉会議が長い間開かれていなかったり、老総長がその本務として上げている任務をいささかでも怠っているようなら——さあ、今こそ新しいスタートと新しい決意を固めるときである。前進だノ班長の諸君。

『班長の手引』を読んで

故 中村 知

この章は、日本のリーダーたちに、よく読んでもらいたい章である。

日本でも米国でも、この会議を「班長会議」と名づけている。米国は別に Green-Bars 集会とも通称している。

英国だけが、なぜ、名誉会議(名誉法廷)と名づけるのか? これについては、ローランド・フィリップス著「パトロールシステム」に、そのいわれが歴史的に記されている。すなわち、ちかいのことばの前文に「名誉にかけて……」という重要な発言がある。この名誉にかけて——という意味は、名誉心とは違うウソをいわない、信頼に値する——という意味で、明治生まれの人がよく口に、「恥を知る」という内容を含んでいる。すなわち、スカウトとしての名誉を保つことである。その名誉をけがした者に対する処分の会議、すなわち、名誉維持のための裁判の法廷(Court)ということから Court of Honour「名誉法廷」と名づけたのが、そもそものはじまりであった。それとは別に隊の行政的の面、財政面、立案、計画などのプログラム面を話したり、班会議の報告をしたり、班活動の報告、各人の進歩状況の検討や、人事について別の班長会議をもっていた。このほうは、定例会議となった。

名誉法廷のほうは、そう、しばしば違反があるわけではないから、ひんぱんには開かれない。いま一つ班長訓練会がある。けれども、班長にとっては、この3種の会合を1本にまとめたほうが出

席するうえで好都合だということから合体された。合体したものの名前を班長会議というか名誉法廷というか? 法廷——は、なんだか軍法会議みたいだ。それで日本語訳は、結局、名誉会議——という名称で呼んでいる。(英語では名誉法廷)

ちなみに、日本で名誉会議というのは表彰審査会議、米国の Court of Honour は表彰式そのもの、アワードの授与式の式場をいう。アワードには技能章も進級章も含まれる。名誉の場——ということ。

ジョン・サーマンはここで、

- 君たちの隊では名誉会議をやっているか? と書いている。英国にも、名誉会議(班長会議)をしていないような隊があるのだろうか?
- 名誉を維持するとは、基準、法、価値を維持することで、それは信頼にこたえ、信頼されることの根基である。
- 処罰——ということは、名誉を破り、けがす者を罰すること。
- 名誉を保つことは、伝統を受けつぐことにも関係がある。
- 処罰は、何をモトとして判定するか? それは団、隊、班の伝統が大きく関連する。特に班の。
- 功労は自分のモノとし、悪や失敗を班員になすりつけるような班長はいないだろうか?

その次に運営面のことについて——

- プログラムの細目を決めるのは、リーダーの役目であって君たち班長の役目ではない。
たとえば、何日の何時、どこに集合し……などというこまかいことはリーダーが決めるのだ。
- 何から何までいっさいを班長が知っていたら、それはテストにならない。興味もうすらぐ。テスターはリーダーがなる。
これなど、日本の隊長たちにも注意してほしい。

○隊費を各班でどう使うか? 決める。

○次長、班長の選出について。
これは任命ではなく選出である。

○要するに名誉会議を委員会みたいに考えてはいけない。

○隊の名誉と、隊の進歩と、隊員1人1人の進歩について関心を払わねばならない。

以上でこの章を終わっている。

どこの少年隊も、このように、正常に班長会議をやっているだろうか?

この点、大いに反省する必要がある。

なお、班長訓練ということが、この会議に付随するのが常であるが、この本には、書かれていない。ちょっとふしぎである。

この名誉会議に議員として出席できる身分、つまり班長になるということは、少年にとって輝かしい名誉であるらしい。その意味で、名誉会議というのだと考えることもできよう。

私は、これは、どこまでもスカウトが自主的、自発的にやる会議だと考えるが、一面には、隊として、隊長として、どうこの会議を方向づけるかという点も大きい要素だと思う。少年を絶対に信頼せねばならないのであるが、他方、監査指導ということも、忘れてはならぬ。単なる相談会、打合せ会、委員会でない——ということをよく銘記せねばならない。隊長は、安楽椅子に腰掛けて腕組みしておればよい——というのは米国のやり方で、パトロールメソッドでは、そうなるのかもしれない。もちろん、隊長が、いちいち、口を出して采配をふるったり、機関車になるのはまちがいである。これは、班長1人1人の人物、長所、短所を鑑別するのに絶対な機会である。それと同時に、これは、市民教育、民主教育の正しいあり方を習得させる実習であることを、私が筆をとるのであれば付言するだろう。しかし、そんなことは成人に申しあげることなのかもしれない。

班長の手引

—THE PATROL LEADERS' HANDBOOK—

ジョン・サーマン

今回、班制教育のよりいっそうの発展を願って、ジョン・サーマン氏著「班長の手引」を再掲載する。初版は1950年に出版され、これは1955年版の訳稿である。これが掲載されてからすでに18年の年月が経過しているが、指導者諸氏が熟読され、じゅうぶん咀嚼して実り多き班制を実現されるよう希望する。

《第4章》 班 コ ー ナ ー

たいていの隊集会で、隊長は、状況に応じて10分、15分、20分間の「班コーナー」を命令する。私は、これまでに、数えきれないくらいたくさんこの隊を見学したが、どここの隊でも必ず「班コーナー」という声を聞かないことはなかった。白状するが、時々、私には、この言葉はプログラムの穴を埋めるために、隊長が使うのではないとか、隊長は疲れたので休息したくなったから、あるいは、次に何をしたらよいかわからないからではないかと考えざるをえないことがある。命令がされると、班長は班を自分のコーナーに連れていき、着席をさせる。時には、ほんとに価値のあることが班コーナーで行われることもあるが、それは非常にまれなことで、全般的には、どうみても「初級」、よくて、せいぜい「2級」程度である。

私が見学した班のほとんどが、次の4つのうちの1つをやっていた——すなわち、なわむすび、救急、信号、何もしない！ まあ、はじめの3つは、それ自体に悪いところはないが、この3つだけから作業を選ぶとしたら、これ以外の何千という価値のある作業は見捨てられることになる。

班長として、諸君は、隊集会で班コーナーの命令が下ったら、班に何をやらすべきか、あらかじめ考えておく必要がある。何か特別なもの、何か

差しあたって訓練する必要があることであれば、何でもよい。たとえば、班コーナーの前に行われた隊活動のリレーゲームで——なわむすびリレー、身体を使うリレー、ウッドクラフト応用のリレーなどのゲームが考えられよう——諸君の班はビリになったと仮定しよう。どんなに優秀な班であろうと、負けることはあるし、過ちを教訓に生かすことができれば、敗北は無駄にはならない。リレーゲームに敗れた原因には3つのことがあげられる。第1は、班員の調子が悪いこと、第2は、班員の知識が不十分であったこと、第3は、班のチームワークが悪かったことである。

そこで、リレーゲームの成績が最下位であり、今、班コーナーになったと仮定しよう。諸君は、すみやかに、「班会議」を開くことになろう。諸君は成績が悪かった理由をはっきりさせなければいけない。どこが悪かったのか？ どうして3番スカウトはもやい結びを忘れてしまったのか？ 自分の順番が回ってくるための用意しておくべきなのに、どうして5番スカウトは窓の外を見たり、もし室外のゲームであれば、家の中をのぞきこんだりしていたのか？ 大事な時に、どうして次長の靴が脱げて、次長はころびそうになったのか？ 靴紐の結び方が悪かったのかもしれない。

合図がされたとき、どうして班長の出発が一番おくれたのか？ 彼は、学校の事か、映画の事でも考えてぼんやりしていたのか？ たぶん、だいたいこんなことが敗因であろう。これが敗れた原因であるのなら、班長は恥ずかしいと思わなければいけない。最善は尽したけれども、相手の技量が一枚上であったために負けたのは不名誉でない。しかし、自分に負けた——すなわち、準備の不足、知識不十分、細心の注意に欠けたこと——のは、大きな恥である。

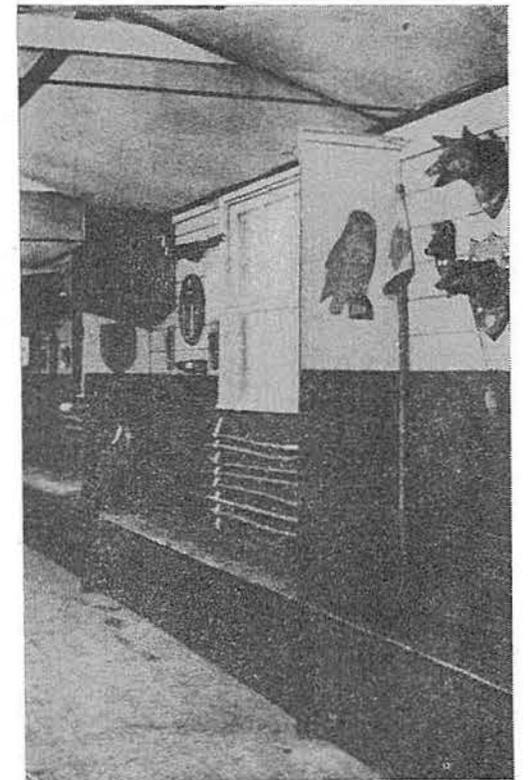
以上は、もちろん、仮定の話であるが、いつでも、まず第1に班コーナーで行うべきことは、すみやかに、班会議を持ち、それまでの方法を反省し、次に何をするか、隊長はどんな奥の手を使ってくるかなどを話し合うことである。たとえば、隊長が入ってきたときに、誰に話しかけたか気づいたか？ たぶん、あの人はスタンツの一役をつとめていて、あとで隊長はその人がどんな格好をしていたか質問するだろうから、今晚は彼に注意しておく必要があるとか、事故の実演をやった、我々の包帯の仕方を試験されるのではないかと？ 地区コミッショナーが隊を巡回するという噂があるが、我々はもう少しスマートにしなければいけない。地区コミッショナーは、きっと、いつつぎのキャンプに行くのかと質問するであろう。だから、今から班コーナーの時に、その準備をやっていこう。

諸君は気づいたと思うが、以上のことは、すべて、班コーナーの作業をそれだけ気のきいたものにする。作業のための作業とか、知識のための作業ではいけない。諸君の班をよくするため、諸君のスカウティングを高めるため、諸君自身の向上のため、この目的のための作業、学習でなければならない。

班コーナーの時間は活発な活動の時間でなければならない。隊長が諸君のなすべきことを与えてくれることもあるだろうが、たいていは諸君の考えにまかせている。だから、諸君は、班長として、まず第1に、隊集会が始終意義あるようにするためにも、班コーナーを活用できる能力を持つこと、第2に時間が余って、私がすでに述べたようなこ

と以外のことをしなければならない時には、いつでもアイデアを引きだせるようなアイデアの宝庫を持たなければいけない。これはなまやさしいことではない。班長の難かしさの一つはここにある。諸君はアイデアを渴求すようであってはならない。前に言ったことがあるが、諸君は、いつでも、班からアイデアを求めようとするのである。決して、諸君のアイデアを押しつけようとしなさいことである。しかし、諸君は班を率いる立場にあるのであるから、諸君自身が自分のアイデアを持たなければいけない。班員はみな諸君のアイデアに期待をかけている。もし、諸君にアイデアがなければ、諸君は班の気力を下げ、諸君の信用を班員から失うことになる。

まったく、別の方向——すなわち、いわゆる物理的な観点——から、班コーナーを見てみよう。諸君の隊は隊本部を持っており、そこには固定の班コーナーの場所があることを、私は希望する。こういう状況にある隊は、一番扱いやすいから、まずこのような隊について述べよう。諸君は、隊長の許可をうけた上で、好きなように班コーナー



を飾りなさい。班コーナーには、トーテム、すなわち、班を象徴する鳥とか動物の像がほしい。はくせい、模型、木彫、写真、なんでもよい。それは最高位に安置する。次に、全班員の進歩状況と目標を一目瞭然に示す進歩一覧表を掲示するのがよい。班の伝統に關係のあるもの、たとえば、今ではシニア隊員、ローバー隊員、あるいは、社会人になっているスカウト隊の出身者の写真を展示するのもよい。また、掲示板を置いて、各種の地方的、国家的、国際的なスカウトニュースを伝達するようにすれば、隊に世界兄弟愛の気風を生むこともできるし、スカウティングの動きをつかむことができる。その他に、救急用具——簡単な救急箱でよい——とか、スカウティング・フォア・ボーイズをはじめ、班に必要な本を収める本棚を備える。杖を置く棚、キャンプ用具などを格納するロッカー、こまごまとした用品、たとえば白墨、テニスボールなどを入れる携帯品の班の箱、腰かけなども必要であろう。(隊本部の建築構造によるところが大きい)班コーナーに班のデンを作るためには、ついたてのような仕切りも必要であろう。装飾の仕方は班の自由にまかされているが、隊本部全体がスマートに見えるためには、班同志が協力しあう必要がある。隊が個性的な班コーナーを作るのはよいが、隊本部を訪ずれる人たちに目ざわりになるような飾りつけには気を付けるべきである。

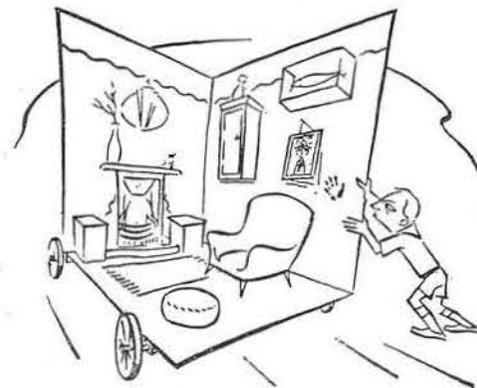
私の隊のある班が班コーナーの壁をコールタールで塗ったことがあった。暑い時期になると、コールタールがとけて、ぼたぼたたれてきた。これは班員が全員賛成でやったことだったが、思いもよらない、まったく、不愉快な目があった。アイデアがいけなかったのではあるが、それを許可した責任は私にあった。

諸君の隊に隊本部があれば、もちろん、少し頭を使った工夫をすることにより、なかなか立派な班コーナーを持つことができる。しかし、学校とか教会とかの建物を借りるのであれば、事はあまり簡単ではない。しかし、不可能ではない。よくばったことはできないが、なんとかがまんできる程度のことではある。

長い間、私の隊は学校の教室を借りて集会をしていた。とても気持のよい、大きな部屋であったが、スカウト的な装飾はなかった。しかし、スカウトたちはその部屋を魅力的につくりかえることができた。家庭で、班のデンで班員は持ち運びのできる班コーナーを作った。簡単迅速に、床に置いたり、壁にたてかけたりできるものを作ってきた。こうして、学校の教室はまたたくまに、本もののスカウト・ルームへと衣がえすることができた。班コーナーが行われている時、たとえ1人もスカウトがその場にいないとも、この部屋に入ってきた者は、ひとしく、スカウトの集会が進行中であることを知ることができた。それは、むてむて装飾はしてなかったが、個性的で、独創的で、何よりも、スカウト自身の作であることがはっきりわかった。班生活の楽しみ1つは、班作業と、班が協力して何かを作りだすことにある。班が努力して飾りつけた2枚の大きなベニヤ板には、ほんとは、大きな価値が秘められていたのであった。

こういうふうになれば、隊本部を持たない隊でも班コーナーを持つことができる。いふならば班長である諸君しだいである。諸君の班員を指導する力と、アイデアと班員の協力を生みださせることである。

どことなくふうをこらして飾りつけた班コーナーであろうとも、いつも新鮮で生き生きした装いを保たせる努力が必要である。いつも班コーナーを点検して、改善すべき点を見つけることである。のっぽのロフティーが頭をぶっつけたあの本棚は低すぎるのではないかと、上から三番目の杖は、



どうして、よく杖かけからころげ落ちるのであるのか? トーテムの虫ばしをする時期になったのではないかと、新しい旗はどうであろうかと、ちびのショウティは、いつになったら、2級課目を完修できるのだろうか? もう戴冠式の掲示はとりはずしてもよいのではないかと、6月は1年中で馬鹿げた月だ、フットボール選手の名前がずっと掲示されればなしである。だいたい、このようなことがよく気づくことであろうが、物事は、見なれてしまうと、気がつかなくなり、存在さてもさだかでなくなるようである。こうなったら、終わりである。我々は、持ち物を役にたつように、利用できるように、いつもそれに対する関心を持つように、それを使う作業を行うように、心がけなければならない。新鮮な班コーナーにいつも心がけたいものである。新しい掲示、新しい写真、新しい装飾。

班コーナーに活気があふれ、生命が宿り、諸君の一部となり、班の品性を表現することである。舞台の背景幕のように、変化のないものであってはいけない。

班コーナーを持ちなさい。隊ルームとデンが班コーナーのためのありきたりの場所であるが、すでに諸君にわかってもらったように、班はギャングでいつも行動を共にして協力しあうものであることからいえるように、班は場所がどこであろうと、ほんの2・3分の休み場所であろうと、1つのホームを持つ必要がある。ハイク先で、倒木の間に諸君が班員とともに入れる場所を見つけ、火を起し、料理を作りなさい。それは班コーナーの1つの形である。ワイドゲームなら、諸君の班員だけが知っている。他の班のスカウトには見つけにくい場所を根拠地にしなさい。論より証拠、どこへいっても、班コーナーを作るのはよいことである。諸君の隊が何かのスポーツ大会か、スカウト行事に参加しているときには、班がばらばらになっても一か所は集まれるような待合の場所が班コーナーになる。これが、班コーナーである。憩の場所であり、集会場であり、出発点であり、帰着点であり、緊急の援助に向いた先である。

この問題について最後に一言注意したい、それは、私が隊長を務めたある隊にあった話である。班長は、こっそり、移動式の班コーナーをせせと作り上げた。できあがるまで、班長は誰にも相談せず、人目にもつかないようにした。なかなかの芸術品で、できあがりはいそいそ立派だった。しかし、困ったことに班員はちっとも嬉しそうな顔をしなかった。班長は、もちろん、大いに失望したが班員の罪ではなかった。班長は班員の意気をそいだのだった。班長はギャングを台なしにしたのだ。班長は班員を無視し、協力を求めなかった。つまり、班長は利己的で、自分だけの力ですべてを片づけてしまった。これでは、誰も、喜びはしない。ともかく、班長にとってはよい経験であった。諸君も、この教訓を忘れないようにしてほしい。

どんなに完璧であろうとも、我々が独りでやったものより全員の協力によって行った下手くそなものの方が、班員にとっては好ましいのである。

『班長の手引』を読んで

故 中村 知

班コーナーについては、説明があるようである。なぜなら、日本の少年隊では、ほとんど、やっていないらしいからである。パトロール・コーナーとは何か?

Rex Hazlewood という人の書いた“The Scoutmaster's Guide from A to Z”という本に説明が出ている。それを大約すると、

- ・班コーナーというものは班制度運用上の重要手段であって、隊集会場(隊のクラブルーム)に設ける。
- ・隊集会のプログラムの進行中、隊長は「パトロールコーナー」という号令をかける。この号令に従って各班は、班のコーナーに駆けて行く。
- ・そして指定された時間(5分~30分間)、班訓練をする。その内容は班で作戦してきた課目の班

訓練で隊長が問題を出す。(つまり班制度という組織体を班長が動かして、活力をよび起こさせ、自信をつけさせ、自分の指導力を及ぼす時間である)

- ・どんな問題が隊長から出されるか、そのときにならないとわからない。
- ・時間が終わると隊長は笛を吹いて再び隊訓練にもどして当日のプログラムを進行する。(換言すれば隊訓練の中に班訓練を織り込む。これを1回または1回以上やる。こうすると、隊訓練が活気を呈する。隊長1本槍の隊訓練となるならば単調かつワンマンに陥るからそれを防ぐことにもなる)

以上のような隊集会のやり方——これが日本での程度行われているか? 講習会でも、実修所でも、この集散移行の形は実習することになっているが、自分の隊に帰ってやってみようという段になると実行困難におちいる。

その困難な事由はというと、それはスカウト専用のクラブムールをもっていない——という点。たいていの隊は借り室(学校とか寺社の建物など借用)でやっているため、作りつけの班コーナーがない。

英国も同じようなケースがあるとみえ、訓練日にだけ設定できる携行用の班コーナーセットについてこのA to Zに書かれている。訓練が終わると折りたたんで持ち帰るか、預けて帰る。

しからは、班コーナーの構造はどうか?

ここに、32人のスカウトの1隊があるとする。室内ゲーム程度の活動ができる程度の広さの、通風のよい部屋があるとする。その一面の壁に国旗マストを立て(上でひらく掲揚法)、その部屋の中央部を隊訓練の場とする。その部屋のコーナー(隅)に、班コーナーを設ける。3班なら三隅、4班なら四隅に。その各隅(コーナー)は、各班それぞれが「出城」みたいに考える。班動物の絵や写真を飾り、班の伝統をあらわすようなもの、班トーマムとか、優勝カップとかを飾る。工作品(橋の模型など)結索板なども飾る。そして班員の氏名表、出欠表、進歩状況一覧表など、月間プログラムその他をはりつけるツイタテ式のもの

設置、班の人数分の腰かけをおく。

とにかくそういう設備をしたものが班コーナーである。そしてその中心に班旗をおく。

以上のような設備を隊本部また隊クラブルームにするのである。そうしたクラブルームをなんとか(借りたり)して確保できる能力をもつことが、英国では隊長の資格(適格)にあげられている。

日本の実修所では、そこまでの施設はやれないが、ぜひ、実現されたい。英国ギルウェルコースで、この、パトロールコーナーの活用を経験された人たちは、これが隊集会上、いかに重要かを報告している。

なお、この班コーナーと、班のデンとは別物だということを申しそえておく。班のデンは、たいてい班長の自宅とか、ある個人の内邸とかにおかれ、そこはその班だけの「城」または「巢」である。他の班には公開されない秘密(?)の巢である。

その秘密の巢で班会合、班訓練した結果の成果が隊集会上にあらわれるのである。それゆえ、班コーナーというものは班のセリアイ(Patrol Competition)の場として、どうしても必要なわけである。

この班コーナーのことを、強調する一面、大きな誤解の生ずることに注意せねばならない。それは——スカウティングの3/4はアウトイング(戸外活動)であるはずなのに、なぜ、室内の隊訓練や班訓練を強調するのか? という、一矢である。

ジョン・サーマンも、この班コーナーは、野外を隊訓練の場とする場合にも、ありうる、と説明している。ただし、室内に設定したようなセッティング(道具だて)は無理であろうが、野外の自然を利用して、ある種の設定は可能である。

すなわち、原理としては、班コーナーでの活動を、織り込まない隊訓練はあり得ない——ということになる。さきに、ジョン・サーマンが指摘したように「隊集会上はよくやるが、班集会上はあまりやらない」(第1の項参照)といったのに、これは関連がありそうである。

班長は班を動かし、隊長はその「動かす班長」を動かすべきである。

隊訓練、隊集会上のやり方について大いに反省してみたい。

班長の手引

—THE PATROL LEADERS' HANDBOOK—

ジョン・サーマン

今回、班制教育のよりいっそうの発展を願って、ジョン・サーマン氏著「班長の手引」を再掲載する。初版は1950年に出版され、これは1955年版の訳稿である。これが掲載されてからすでに18年の年月が経過しているが、指導者諸氏が熟読され、じゅうぶん阻礙して実り多き班制を実現されるよう希望する。

《第5章》 隊集会上における班

「私は自分のことより班のことを、班よりも隊を優先することを約束します。」これは、私の隊の班長たちが班長章と班旗の授与をうけた時にいつも約束した言葉である。非常に簡単な約束ではあるが、正しいことである。諸君は班長として特別な約束をしないとしないとかかわらず、このような気持で諸君の任務を果す覚悟でなければならぬ。あまりにも多くの班長たちは自分の名誉を飾るため班を利用しているらしく思われる。彼らは班長なんていえる代物ではなく、「がき大将」でいられることに満足している小僧にすぎない。こんな班長は班長の任務とは、第1に、模範を示すこと、第2に、この価値ある模範に従うように班員を指導することに気がつかないやからである。なによりもまず、班が隊の一部であると考える前に、我々は正しい心構えを持たなければいけない。さもないと我々は自分と班と隊との関係を正しく把握することができないと思われるからである。

班長のだれもが守らなければならない任務の1つは隊の伝統に反してはならないことである。スカウトとして、諸君が隊の現在ばかりを考え過去や未来に思いを及ぼさないのは大きな誤りである。この本を読む諸君の大多数は30年、40年続い

ている隊の班長であろう。したがって、諸君の隊からは何百人ものスカウトが巣立ち、中には遠く世界の果てに移り住んだ者や隊への関心を失った者もいようが、大部分の者は、静かに目立たない風に、彼らが加入していた隊のことに非常な関心を持っており、彼らが築き上げた伝統が現加盟員のスカウトによって放棄されないように見守っていることだろう。伝統とは非常に素晴らしいものである。伝統は過去の良さを汲みとり、現在に生かすことであり、我々はそれに新たなものをつけ加え、我々が後継者に班長をゆずるとききたときに、伝統が輝きを加え、我々が入隊したときよりも少しでも良いものを残すことが必要である。

わが国には、1万以上のスカウト隊がある。私は多数の隊を知っており、それらはみな立派なスカウト隊であるが、どの隊もそれぞれ異なった特色を持っている。これは非常によいことであると私は信ずる。もちろん、どの隊も創始者が「スカウティング・フォア・ボーイズ」に盛りこんだ考えを基本にしている点で同一であるが、スカウティングという遊びを行なう方法においてちがいがでるのである。このわずかな相違が貴重なのである。隊の伝統を築くのはこのわずかな相違である。このわずかな相違こそ、諸君の隊を肩につい

た隊名章やネッカチーフの色以上にはっきりと先輩のスカウトに諸君の隊を判別させることができるのである。

班長として、隊に関係して諸君が第1にすべき任務の1つは隊の伝統を維持すること、隊の名誉を維持することである。このことはとりもなおさず、水泳とか、救急とか、野営とかの活動において隊の水準を維持するように大いに努力することを意味する。これは諸君たちが全く異なった技能に同程度習熟することとは訳がちがう。諸君たちがちがう技能に上達すれば、隊の伝統に加味されることになる。しかし、新しきを作ると同様古きを維持する必要を見落してはいけない。

諸君の隊長は、おそらく立派な隊長であろうと思うが、諸君とはちがった立場から隊を見守っている。班長である諸君たちは隊集會を構成する一部分と感じてよいのだが、隊長は隊集會を班の集合体として把握している。このようなあり方をとっているので、隊長は、できるだけ、班の団結を崩さないように、班活動に障害が起らないように気を使ってプログラムをたてている。諸君は班の団結を保つこと、左の胸の上に2本線の入った布切（班長章のこと）をつけた者に率いられたスカウトのぶざまな寄せ集めにならないことが必要である。

一目みれば、諸君は真実の班を見分けることができよう、私は見分けることができる。隊集會を見学に行くと、直感的に、班とスカウトの寄せ集めとを判別できる。どうして見分けるか、その理由は簡単である。外見して団結があり、仕事をすればまとまって行動し、すべての行動に班長が先頭に立って、姿勢を判断し、班員の意見をきき、命令をだす。そして命令に対してはすみやかに忠実に愉快に実行する。文句をいったり、ぐずぐずしたり、大さわぎしたりしないのである。これが、寄せ集めとなると、班長は怒鳴ったり、大声を発したりするし、班員の中には自分がオオカミ班なのかカワウソ班なのかもまるっきり忘れたように行動する者がでる——班意識などこういう班にはなく、1週間のうちにアマツバメ班になったり、ガラガラヘビ班に変わったりするのだらう。寄

せ集めの班は、こっけいである。それはゲームをやるためのもの以上に何の意味もない。生命はかよっていないし、実のところ、見せかけにすぎない。

隊の伝統とはどういうことかを考えてみよう。私が昔隊長を務めた隊では、どういうわけかオオカミ班は野営に一番すぐれた班であった。思い返してみると、この班は他のことではちっともいいところがなかったように思われる。ゲームなどは、まったく、ひどい成績ばかりとっていた。——事実、ときたま、まれにこの班が優勝すると、他の班の班長たちは「よかった」と大いに激励したものだ——ところが、野営は優秀であった。隊の他の班の野営水準は高かったが、オオカミ班はいつも最高点をとった。（それは、これが過去の伝統であったからであった。）班長は自分の班の任務をわきまえ、すぐれた野営術を身につけていたし、班員に対してもすぐれた野営をするよう訓練につとめた。彼らは野営に自信を持った。この自信はゲームにはなかった。彼らが自信を持ち、班長はそのことをじゅうぶん承知していたことが、自信を一層強めるのに役立っていた。もちろん、ときたま隊を訪れる先輩のスカウトたちはオオカミ班の班員に会うと、まず第1に「野営はどうか？」と聞くのがつねであった。先輩た



ちは班の伝統を知って、あるいは全く意識せずにこんな簡単な質問によって班の伝統を盛り立て、価値あるものにしていたのであった。

普通の隊集會と隊集會におくる班のことを考えてみよう。よい隊集會は隊員の集會時間がくるまでの時間、集まってきた隊員が次々と加わっていきけるようなゲームではじまる。定刻に——たぶん7時30分であろう——合図によって、隊は集合する。さて、班長はどこにいるかな？ 一番前かな？ そうでなければいけない。整列ばかりでなく、何をするにも先頭に立たなければいけない。国旗掲揚、点検、ゲーム、何であろうとも——諸君は、班長として、班員が何でもやれる用意をさせておくことである。隊集會は、ゲーム、競技、指示の順で進行する。諸君の班は、いつも、優勝するとはかぎらないであろうが、勝っても負けても、2つのことを実行しなければいけない。それは、いつも、じゅうぶんな用意をすることと、いつも、成功しようと思うことである。「目的地に着くことより、愉快に旅することの方が、たいせつである」ということを忘れないように、

それから、すでに、本書で扱った「班コーナー」へと隊集會は進もう。そうして、考査の時間になる。班長の諸君はそれだけの用意をしているか、何をするのか、はっきり、わかっているか？ 次長は、諸君が何をしようとしているのか、わかっているか？ 諸君は、このプログラムにおける次長の役割りを次長に話しておいたか？ それとも、班のコーナーに、こそこそ、戻って、ほこりの積った丸太の上に腰かけ「何をしようか？」と相談することになるか？ どうしたらいいのかわからずに、諸君は諸君のスカーフを取りはずし、そばにいる初級スカウトの頭に包帯をするであろうか？ あるいは、あらかじめ計画をたてたか？ 何か面白いこと、役に立つこと、スカウトの記憶に残るようなこと、スカウトの考査と技能章の訓練になることをやらせるつもりか？ さて、隊集會とは、ざっと、そんなものであらう。隊にとって、ほんとの試練は「15分間班コーナー」という命令がでたときであらう。班集會の前に必要な用意をしないで平気な班長がいる。班コーナー

がはじまって、ちりの積った丸太に腰かけ、いい考えの浮かぶのを待っているのでは、まったく、なさない。ちりの積った丸太の上に座っていても、いい考えは浮かぶものではない。いい考えは仕事の課程に湧き上るものである。班長が30分ぐらい考え抜いて、道具だてをしている間に、ここぞというときに、いい考えは起るものである。この班長は運がいいわけではなく、それだけの用意ができてたのである。班コーナーは価値千金の機会である。

隊集會の終了のときになった。指導者の誰かが夜話をしてくれることがあらう。それは諸君が、前に、聞いたことのある話かもしれない。あるいは、その話し方はあまりうまくないかもしれない。班長は指導者に対して礼儀正しい態度をとるようにすることがたいせつな任務である。指導者に対して、敬意を持って処することは、すぐれた隊の伝統として欠かしえない要素である。

やがて、国旗降納、お祈り、解散前の指示がおこなわれる。指導者の指示が伝えられたら、解散してもよいであらうか？ 集會が終わったら、諸君の任務は完了したといえるであらうか？ 隊集會の解散が命令されたら、すぐ、班員全員を班コーナーに連れて戻りなさい。今うけたばかりの指示を復習させなさい。諸君の班員は指示を理解したか、解らない点はないか、期日と時間を控えたかを確認する。次の集會の期日、場所、集會について知っているか確めたか？ 班員は次の班集會に



持ってくるもの、次のキャンプに持っていくものを知っているか？ 彼らは必要な用具と所要経費のことを知っているか？ すべてのことをはっきりわかっているか？ これは諸君の班の問題であり、班員が自分の役割を知り、役割がおろそかにされないようにすることは諸君の務めである。たしかに、班長の責任はたくさんある。考えることも、しなければならないこともたくさんある。しかし、それをすべてやったとはいえない。

11月の夜、時間は9時になった。隊集会場の隅の扉は開かれ霧が流れ込んできた。先週カブから上進したばかりの幼いシムはだいたいぶかな？ 諸君は次長とトランプに興じて、シムに霧の夜道を1人で帰らせるのではないか？ 諸君が家まで送っていくか、誰か同じ方向に住む者を付添させたか？ 諸君は気をきかせたことと思う。よく気がつくということは班長の任務の1つである。これは班長の隊に対する務めの1つである。諸君たち班長は班長章の返かんをするまで班長の務めを果さなければいけない。いつも、班長であることを心においてください。隊集会での諸君の任務は、はっきりしているから、やさしい。しかし、任務を正しく理解しているかどうかを決めるのはこういう小さな思いやりである。ほんの少しの親切とやさしさは、諸君の任務の1つである。カブ上りのスカウトを霧の夜家まで送ること、元気のない少年を家まで送りながら、元気づけてやること、家や学校や仕事先でいやなことがあった者の気持をはぐしてやること、病気の者——諸君に好意を持っている娘ばかりでなく、お父さんや、お母さん——を見舞うことである。このようなことは班長が班に率先すべきことであり、班員のことにはすべからず関心を持っていることを示し、しかも、おせっかいにならない程度に手だすけをすることである。このような精神を持ってこそ、諸君の班は価値のある班になり、諸君の隊は価値のある隊になるのである。私は諸君に1つの道をさし示した。諸君はこの道を通ってくる者と思う。この道は過去に何万という班長が通った道であり、班長とその配下のスカウトはこの道をたどったが故に一層向上したのである。

『班長の手引』を読んで

故 中村 知

この章を読むと、英国においては、班長任命式の時、「私は、自分のことより班のことを、班のことよりも隊のことを、優先させるよう約束します」と、班長になる少年が誓約し、そのうえで班長章と旗を隊長から授与される、と記してある。そして――

○自分の名誉を飾るために班を利用してはならない。ガキ大将になることだけに自己満足してはならない。

○班や隊の伝統に反してはならない。

○伝統に新しいものを加えて後輩に渡しなさい。と述べて、新しい班長に班長としての基本的な教示を与えている。

われわれは、とかく、伝統というものを保守的にのみ考えやすい。ただし、伝統といっても、いろいろある。いったんきめたものは変更してはならない、と、いう保守主義の伝統もあれば、いまあげたような、新しいものをつけ加えて後輩に渡しなさい、と、というような進歩的な伝統もあることに注目したい。サーマンは、かさねて、次のような説明をつけたしている――

○どの隊も、創始者が「スカウティング・フォア・ボーイズ」にもりこんだ考えを基本としている点では同一であるが、スカウティングという遊びを行なう方法においては、ちがいが出るのである。このわずかなちがいが貴重なのである。

という佳言をかかげている。これは、原理と方法——の関連およびその区別、そして進歩というゴトバの解釈を、はっきり示している点で成人リーダーにもあてはまる教示であろう。

この章で、著者は――

○班長と隊長のあり方。

○ほんとうの班と、寄せ集めの班とのちがいを。

について述べ、オオカミ班の伝統——という例話をあげている。そこに述べてあることは、実際、隊長の役を経験した人々にとっては「珍しくもない」と、読みとばされ、隊長の経験のない人たちには、なんのこともよくわからぬままに、読みとばされそうである。

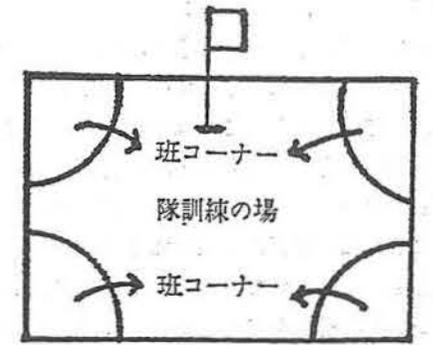
だが、班長たちにとっては大きな示唆となるだろう。私はそう思うのだけれども、中学1年や2年生の若い班長に、その意味がわかるだろうか？ と、首をかしげてもみる。

その次に、著者は、隊集会について、再び、班の動き方を写実的に書いている。集合のときからの動きを――。そして、もう一度、班コーナーのことを書いている。それは本誌の1ページの左半分、ほとんど全行にちかい長文である。班コーナーについて知りたい人は、ここを熟読されたい。著者は――

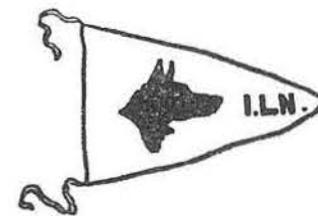
○隊にとって、ほんとうの試練は「15分班コーナー」というこの命令がでたときであろう。

○班コーナーは、価千金の機会である。と記している。

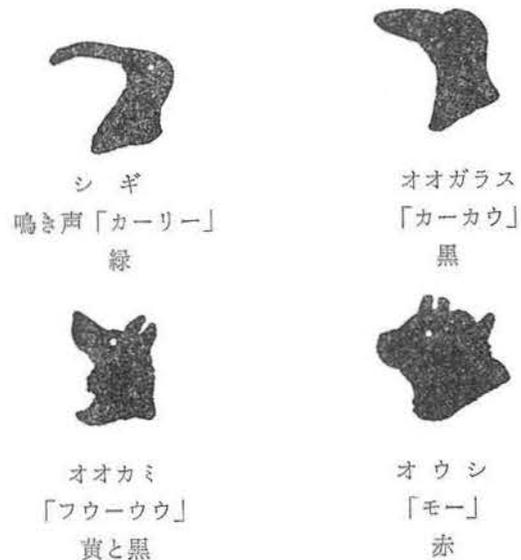
このところに書かれている隊集会プログラムの



一例は、ぜひ、読んでおきたい。ある人は、ことによると、これは英国式の隊集会であって、米国式のところがうのではないかと、日本は必ずしも英国式にする必要はなからう、など、というかもしれない。ここでは、英式採用論の可否とは関係なく、ジョン・サーマンの書いた本によって、英式隊集会というものを知らうとしているにすぎない。それを採用するしないは日連のポリシーの問題なので、私見できめられるものではない。○隊集会が終わったら、班コーナーにもどりなさい。そして隊長の指示を復習したり確認する。とある。



これはロンドン第1隊、オオカミ班の班旗だ。



シギ
鳴き声「カーリー」
緑

オオガラス
「カーカウ」
黒

オオカミ
「フウウウ」
黄と黒

オウシ
「モー」
赤

班長の手引

—THE PATROL LEADERS' HANDBOOK—

ジョン・サーマン

今回、班制教育のよりいっそうの発展を願って、ジョン・サーマン氏著「班長の手引」を再掲載する。初版は1950年に出版され、これは1955年版の訳稿である。これが掲載されてからすでに18年の年月が経過しているが、指導者諸氏が熟読され、じゅうぶん咀嚼して実り多き班制を実現されるよう希望する。

《第6章》 班と班のデン

班にとって、自分たちだけの場所、班が隊から離れ、隊長から離れ、家族から、その他の知り合いから離れて、自分たちだけが他からの干渉や妨害を受けずに集まることができる場所を持つことほど重要なことはない。

たしかに難かしいことであると思うが、その気になれば、自分たちのデンといえる場所が見つけれられないようなことは、やる気のある班であればないと思う。

デンのことを考える前に、何故それが必要なかを考えてみよう。どんな家族でも、それ自身の家庭が必要である。非常に古い諺に「英国人の家庭は城である」というのがあるが、この言葉は人間ばかりでなく班にもあてはまる。もちろん、班は隊の中に班コーナーという場所を持っているし、そのことについてはすでにふれたとおりである。しかし、それは似て非なるものである——つまり、班コーナーは借家にすぎず、おそらくカブ隊と同居する場合がほとんどではないか。それに反し、デンはわれわれが集会をし、われわれがスカウティングの活動を中断されることのない場所であり、もっとも重要なことは、われわれが戶外活動の冒険をいろいろ計画できる場所である。そ

れはわれわれの備品、班になくてはならないこまごまとしたもの——班日誌、テント、スカウティングに必要な用具のあれこれ——を保管することができる場所である。

デンはどのような場所に置くべきかについてはまあ、何百という場所が考えられる。夢を描くことはやさしいが、それを実現することはなみだいでいことではなからう。私の好みを言えば、行き来がおっくうにならない距離で、適当にひなびた町はずれの郊外に小さな小屋を構えるのがよいと思う。小屋は、雑木林や小さな森の真中あるいは、あまり大きくない丘の斜面に建て、班員が入って、座を占め、炬のようなものをこしらえ、そのまわりに集まって冒険の計画がたてられるくらい大きさがあればよい。しかし、こんな高望みをしなくても、不用になった車庫跡、屋根裏の部屋、空き部屋、誰かの庭にある物置小屋、工場の片隅、商店の裏にある不用になった倉庫でもよい。けっきょく外観にはちっとも捕われる必要はない。要は四面に壁があり、内部を自由に装飾し住みよくできることが許されるデンがあることである。私が訪れた最上の班のデンの中には、外観は全く見すばらしいが、内部は手入れがいきとど

き、たいせつにされ、つまり、家庭という気持ちにしみでる犯しがたい雰囲気を持ったものがあつた。デンはどんな場所にあつても構わないと思うが、いつも夢を持って、その実現に努力したいものである。しかし、デンはあまり大きすぎると、経費はかさむし、手入に時間がかかるし、負担になるから、大きくしないことである。特に、デンに関する必要なことはすべて、班が行うことを強調したい。あらゆる飾り、あらゆる調度、照明、炬、荷物入れなど、おそらく、金を集めて、誰かに作ってもらったら、もっといいものができるであろう。しかし、私にはどんなによくできていてもそんなものに興味はない。われわれが作ったもの、われわれが誇れるもの、われわれが試行錯誤する間に、いつも、より優れたものを作っていくこと、これだけである。

使用について——そう、もちろんわれわれは少なくとも1週1度はデンで集会をする。われわれ各員がデンの鍵を持ち、いつでも自由にそこに行くようにし、そのかわり、そこをきれいにし、火をもやしつづける責任を持ち、ココアやそれに類したものを切らさないように気をつける。われわれがそこへ行くときには他の人に行先を告げる必要はないと思う。それはわれわれの家庭であり、つごうのよいときやひまなときに好んで足を向けるべきところである。われわれは、隊長に、われわれのデンの在りかを教え、招待したときにはきてほしい旨を伝えておくことである。もちろん、われわれは隊長やその他の指導者をそこに招くようにしたい。しかし、隊長などが来るのは、権利ではないから、われわれの家庭でわれわれに会ってほしいと思ったときに招くべきである。

デンには、班コーナーにある物と同じようなものを揃えておくべきである。進歩記録、しかし班コーナーのよりもっと詳しいもので、われわれの班の母体であった他の班の記録までさかのぼったものがよい。小道具を少し用意しておくこと、かなづち、ねじまわし、プライヤー、のみなど班の作業に必要な道具を用意すれば、ここで作業をすることができる。たしかに、キャンプ用具やユニフォームや使い古したり、こわれたりしたものな

どを修繕できる道具は備えなければいけない。

しかし、デンの主要な用途は、班の戶外活動の計画をたてる集会場として役立たせることである。われわれのデンは、われわれの帰るべき巣であり、そこでスカウティングをする場所ではない。われわれがそこに集まる目的は1つである。その目的とは、班員すべてのスカウティングの向上である。ここで、班会議を開き、班の問題を討議し、隊の他班との関係について話し合い、キャンプや町と地方への探険の計画を練るのである。ここで、われわれはキャンプファイアーの新しいスタンツを考えだし練習するのである。ここで、われわれは、これから手がける考査課目、技能章課目の計画をたてるのである。ここに、われわれは人々を招き、話をしてもらい、われわれの得意な問題の解決法について教えをうけるのである。また、ここで時々、班が小宴を張ることにもなる——班だけで、他の班を招待して、また、隊長たちを招いてするのである。たしかに、班の小宴はスカウティングにおいて非常に特別な位置にあるが、よい班は自分で準備ばんたんを整え、母親たちに負担をかけないようにすべきである。キャンプばかりでなく室内での調理を学び、配膳のしかたを学び、クリスマスやその他のお祭りのための部屋の飾りつけを学び、デンに楽しい集いの雰囲気、1つの目的のある雰囲気、和気あいの雰囲気をかもしだす方法を学ぶことができる。これらすべては、われわれが学ばなければならないことであり、班のデン以外ではなかなか学べないことである。

町や地方の班で、非常な困難を克服したのちにデンを持つに至った事例を多々知っている。これらの班はどれもみな優秀な班であった。それらはほんとに、班の名に値する班であった。それらはギャングであり、いっしょに作業し、団結をしていた。デンといっても、それは、旧式の防空壕を利用したもの、廃車されたバスであったり、電車であったり、さびた4枚の鉄板とわずかの煉瓦で作ったものであったり、大きな梱包用の箱であったり、地面を掘ってわずかな煉瓦とコンクリートで湿気を防いだものもあつた。

だから、班長の諸君、やってみたまえ！ 計画をたて、設計し、悩み、意見を聞いて、諸君のデンを作りなさい。苦勞の甲斐はあるし、諸君の班は真実の班となり、机上の班ではなくなるであろう。

私は、班を象徴する模型、写真、鳥の剥製、動物の頭の剥製を、一段高い位置にすえるアイデアについてすでに話したが、これだけに満足することなく班の象徴にたえず研究を払っていくことを希望したい。

まず第1に、班呼について一言。スカウティングの初期には、すべての班はそれぞれの班呼を持って、それを使っていた。今では、班呼を使っている班は非常にまれであるように思われる。その理由は、多くの班のスカウティングのやり方が、おそらくほとんどのスカウトが室内活動に熱中して、あまり戸外にでかけないために、班呼を重要視しなくてすむところにあると思う。明らかに、室内では班呼はあまり役に立たないものである。しかし、森や野原や広い地域でスカウティングを行うときには、班呼の利用価値は絶大である。これは諸君の班員は聞き分けて返答ができるが、まわりにいる他の人々は、おそらく、ちっとも気がつかない自然な呼び声である。班呼は諸君が選んだ班名に多少影響される。諸君は老総長が、班の象徴は自隊の付近で発見できる鳥や動物から選びだすべきであるといったことを記憶しよう。このことからいえば、諸君の班がリンコンシャーにあるなら虎班という班名は少々おかしい。しかし、動物園に接近している第1リージェント公園の班は虎班の名前がぴったりするのである。諸君は、班長として、模範を示し、班呼を練習して、戸外のスカウティング（野営のときもしかり）では、いつでも、班呼を使うようにすることである。また、諸君の班員に手紙を送るときには、班員の署名をした後に、班のしるしを描き、同じことを班員に奨励するようにしたい。スカウティングの楽しみの1つである。このようなことを失うことは、とてもかなしい。われわれは馬鹿やませた人間になりたくない（この2つの言葉は同一のことを意味する）。われわれは老総長がわれわれに与

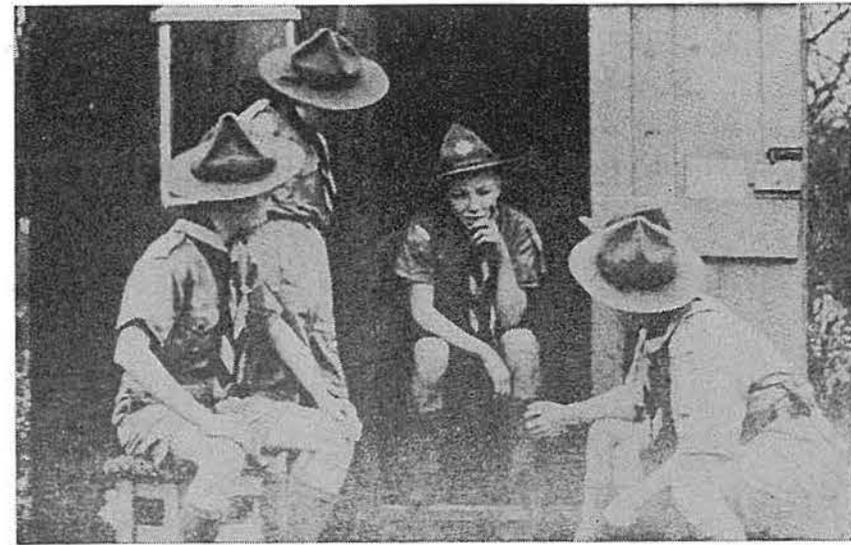
えてくれた、このようなたわいのないささやかな楽しみを失わないようにしたいものである。

班の象徴について、もう一言つけ加えたいことがある。諸君の象徴として、選定した鳥や動物について、その特徴の発見に務めるのは、諸君の任務である。それに関するものを読むとよい。たぐさんの自然に関する優良書を読んだり、絵を見たりして、その姿や、生息地、食物、習性などを知りなさい。スカウティング・フォア・ボーイズにあげられている鳥や動物は、すべて、われわれと同じように、たぐさんの良い性質と悪い性質を持っている。これはよいことであると思ふ。何故かという、班として、われわれは、われわれの選んだ鳥や動物のよい習性を見なさい、その悪い面をわれわれがしてはならないことへの警告と見なすことができるからである。

カワウソを調べて見よう。さて、良い習性——清潔で、勇敢で、すばらしく水泳がうまく、自主独立の気質を持つ、悪い点——欲張、他の生物のことを考えない、利己的、ずるい。ここで、「カワウソという言葉スカウト」におきかえてみると、長所と短所を持つたぐさんのスカウトが思いだされる。

他の班のことも調べてみよう。フクロウはどうか？ ここで注意したいのは、これは老総長の班の名前であったことである。フクロウは非常に賢いという評判がある。賢いからには、きっと、疑い深い。一見たしかに賢そうである（私はフクロウのことをいってるのであって、老総長の話をしてるのではない！）しかし、フクロウには他にもいい面がある。フクロウはその行動が清らかで、どんよくな鳥ではない。しかし、その反面、夜かなり騒がしく、他の迷惑になるし、巢のまわりがあまり清潔でない。まったく、フクロウの巢は、どこかの隊ルームと同じように、台風が襲われたあとみたいである。

さて、特定の班の話をするのはこれくらいにしよう。諸君は自分たちの班のことを調べて、よい点をすべて書きだし、諸君の班がそれに達するように努力し、それとともに、班の鳥や動物の悪い面を書きだして、注意しなければおちいりやすい



誤ちに対する警告とするがよい。

これはすべて班の象徴に、生命を吹き込み、班のために役立つ真の象徴を作ることの意味する。虫が食っている剥製の狼の頭を壁にかけても誰の役にも立たないし、ただへんな臭がするだけで、結果は目ざわりな厄介物になる。われわれは班の象徴を誇りに思い、それを実用的なものにしたい。そのためには手入れを行き届かせることである。

これまでに1、2度、いろいろな物を見学することについて話をしたが、ここで少々この種のことについて述べたいと思う。諸君や諸君の班員は皆映画に行くことと思う。たいていの人はいくようである。私は、たびたびではないが、機会あるごとに映画にでかけ大いに楽しむ。実際、私はたびたびいかないから、それだけ他の人より興味が大きいといえる。

私が次のようなことを言ったら、諸君にはその意味がわかるであろうか。「映画に行くのではない。フィルムを観賞に行きなさい」私がいいたいの、いつも火曜日の晩には映画に行くことにしている、火曜日の晩であるから、今晩は映画に行くということをするなどということである。——これは、何をやるにせよ、とんでもない理由である。これでは諸君は形にはまった人間になるし、1つの習慣、あまり感心できない習慣を身につけることになる。映画の評判がよいから、映画を見に行くようにしなさい——おそらく、諸君の

好きな俳優が出演するとか、映画評を読んだと見る気持ちになったとか、いろいろ理由はあろうが。何かをしななければいけないということだけでは、時間潰しもはなはだしい。スカウトは何かすることを捜し回すようなことがあってはならない。諸君の問題は私の問題と同じであると思いたい。つまり、やりたい

とまっていることをすべてやる時間をどうやってつくるかということである。時間をつぶすために映画や他の場所へ行くということは、いわゆる、いまましい話である。諸君が映画観賞を活用する、しかも賢明に活用するように私は望みたい。時々、諸君の班で特定の映画を見に行くようにしなさい。そして、映画から帰った後、次の集会のときにデンで、集会の何分かをその映画について話しあうようにしなさい。何故諸君がその映画を気に入ったのか、何故気に入らなかったのかを見いだすようにしなさい、好き嫌いを知るだけではじゅうぶんではありません。諸君はその原因をただすことである。現代用語でいえば、「批評眼を伸ばす」といえよう。いらぬことまで考えをおよぼす必要はない。ただ好きな理由、嫌いな理由がわかればよいのである。

私が映画についていったことは、その他のあらゆること——例えば、読書もその1つ——にあてはまる。私は諸君がスカウト読本ばかりでなく、広く読書することを望むものである。スカウト読本だけでは不十分である。他の追従を許さない文学を持つ国に住む諸君は幸運である。我が国には、いつの時代にも、文学者と呼ばれる人、すなわち、名言をばき、その表現方法を知っており、万世に通ずる文章を残した者が生れてきた。諸君の年齢で、諸君の目の前にある文学の世界の扉を開くのは何とすばらしいことか。新しい発見はな

いという人がいるかもしれない。たしかに、その人のいう通りであるが、古いものの中には探究にあたいするすばらしい面が多々ある。諸君が読書をし、諸君の班員が興味を持つ本を見つけ、諸君の班のデンで朗読し、それについて話し合い、おそらく、キャンプファイヤーのだし物のアイデアをそこからひきだせたらと思う。著者が有名であるから、本の装幀が古びているから、「古典」であるからという理由だけで、つまらない本ときめつけてはいけぬ。古典にもつまらないのはあるが、現代の本とても同じことである。——いや、つまらない現代本の方が古典本よりその数は多い。諸君が探究すべき領域はかくのごとくである。諸君たちの何人かはオリバーツイストを映画で見たであろう。また、はじめてその本を読んだ者もいよう。これは、これまでの著作の中のけっさくの1つに入ると思うが、これは古典である。古典であるがために、その価値が失われてはいない。しかし、私は諸君のすねのように長々とした本の目録を作ろうとは思わない。私は諸君が自分で探究の手を伸ばしてもらいたいからである。——これは諸君のスカウティングの1つである。

音楽について同じことがいえる。音楽に耳を傾むけるようにしなさい。しかも、いろいろな音楽に耳を傾むけることである。古典音楽のわからない人は、ジャズのわからない人と同程度の音痴であり、賢明な人は両方がわかるものである。彼は自分の好みを知り、好む理由がはっきりしている。また、あらゆる音楽を聞くように努め、その場のムードに合った音楽を理解している。場合により、古典的なもの、バッハの作品がびったりとすることも、たいへんな音を発するトミー・ドーシーのジャズがよいこともある。

さて、私はこの種のことをこれ以上お話ししたいとは思わないが、次のことは忘れないでほしいと思う。それは探究ということである。探究は諸君の班が、芸術の世界が放つあらゆる可能性にふれる機会を与えてくれる。他のことと違って芸術は諸君の心に長くとどまるものであるから、今のうちから、これらに関心を持ち始めるこ

とが重要である。寒さが厳しすぎる季節、われわれが年をとりすぎ、ハイクやキャンプにあきる時期はやって来る——諸君はそんなことはないと思うかもしれないが、こういう時期は間違いなくやって来る。しかし、われわれの道程の糧を文学や芸術の世界から得られなくなるという時期は決して起らない。

『班長の手引を読んで』

故 中村 知

- デンは、班の本拠であり、「城」であり「巢」である。班コーナーは「出城（でじろ）」である。「出先」の「借家」みたいなものである、と。
- デンは、われわれがそこに集合し、スカウティングの活動を中断することなく続ける場所である。

と、著書は説明する。そして、デンは——

- 戸外活動を計画するところであり、
 - 班の備品（テント工具、炊具など）の保管所であり、
 - 班日誌、班記録の保管所
- であるという。そして、班コーナーに備えるものと同じもの——進歩表も掲げる。出欠表も。黒板なども、

と。どんな場所にデンを設けるのか？
著書は、ガレージの跡、あき部屋、物置、工場の片隅、不要な倉庫——などを借りるのだという。その内部を自由に飾りつけてよいという了解をえておく、というのであるが、日本では、たいてい、班長の家とか知人の邸内とかになるらしい。班がデンをもたない隊のほうが多いのではなからうか？

ここで注意しておくことは各班専用の班テント、炊具、工具、毛布類を、どの班も自班の資産として所有することの必要性である。そうでなく、隊で、何セットかの野営具をもって、キ

ャンプのつど、班に貸し出すようなのは、はたして、ほんとうの班制度、パトロール・システムだろうか？ 私は怪しむ。もし、そういう隊があるならば、それはパトロール・システムに似て非なるパトロール・メソッドをとっているのではあるまいか？ と思う。工具、炊具、寝具なども同様である。ただし、個人用品は別である。

日本のりっぱな団では、団本部の中に年少、少年、年長、青年とわけた別々の隊ルームをもっており、そこに各班の巢を作っているところがある。それは、デンなのか。コーナーなのか？ それとも兼用か？

このコーナーと、デンとが、われわれ日本の現状では未分化の状態にあるように思える。しかし、それは前にもいったように、隊集会のやり方いかんによるもので、それが現在、ポリシイとしてきまっていないのなら、仕方がない。

著書は、この章で班呼（Patrol call）と班のシンボルについて記している。

班名について、英国は「スカウティング・フォ

ア・ボーイズ」に出ている、動物の名77種に限定するが、米国は自由自在、創意にまかせている。この米国式が日本に流れこんだため、戦後、変な班名も生まれ、したがって班呼をもたない班名もできて班呼も有名無実になった。たとえばアパッチ班なんていう班名も相当ある。ひどいのは、サル班、モンキー班。ベーデン・パウエルは、モンキーはスカウトではない、といった。「バンタローグは仲間じゃないぞ」という歌もある。

（「ジャングルブック」参照）「モンキースカウト」はスカウトのカスとされた。

著書は、英国でも近来、班呼をつかわない隊が多いと指摘し、それは戸外活動をしなくなった傾向からくるのかも知れない——と嘆いている。

ここで、スカウトたちが、デンに集まって映画や、読書や音楽を談じているシーンが描写されている。あたたかい飲物も親和感をさそう。

こうした、デンのたのしい思い出は、私の少年時代にもあった。

〔ア〕

アグーナリー (Agoonoree)

⑤ 障害スカウトが集まって開くキャンプ大会
第1回国際大会は、1958年にオランダで開催され、アグーン (Agon) と呼ばれ、その後、この種の大会をアグーナリーというようになった。我が国では、昭和48年に第1回アグーナリーが名古屋で開かれた。その後第2回 (昭和51年、名古屋)、第3回 (昭和54年、大阪)、第4回 (昭和58年、兵庫) と続いている。

アプローチ (approach)

接近すること、手がかり、手段。
⑤ 「問題の取り上げ方」「取り組み方」をさすことが多い。

アダルト (adult)

成人、大人のこと。
⑤ ガールスカウトでは、成人メンダー (18歳以上) の部門として「アダルトスカウト」がありこれを「アダルト」と略称する。

指導者として知っておきたい 外来語・外国語

スカウト関係の書籍や指導訓練のときには、ふだんあまり耳にしない外国語がよく使われます。スカウトの指導者として、知っているに役に立つ外国語、外来語を、今後少しずつ紹介していきます。

アドバイザー (advisor)
アドバイスをしてくれる人、つまり助言者、忠告者、顧問の立場の人。

アドバンス コース (advanced course)

上級コースのこと。
⑤ 我が国の隊指導者訓練では、ウッドバッジ実修所がこれにあたる。
* ⑤は、特にスカウト用語として使われる場合の意味。

班長の手引

—THE PATROL LEADERS' HANDBOOK—

ジョン・サーマン

今回、班制教育のよりいっそうの発展を願って、ジョン・サーマン氏著「班長の手引」を再掲載する。初版は1950年に出版され、これは1955年版の訳稿である。これが掲載されてからすでに18年の年月が経過しているが、指導者諸氏が熟読され、じゅうぶん咀嚼して実り多き班制を実現されるよう希望する。

《第7章》野営における班

はじめに、この章は野営術 (Campcraft) を主題にするのではないことをことわっておく。たしかに、この中で、野営術にふれることはあるが、しかし、班の野営についての章として話を進めるつもりである。

班野営は、3つの別の状況で考えるべきであると思う。諸君に話の方向を知ってもらうために、まず、このことをはっきりさせておこう。第1は、隊野営に参加したときの班野営、第2は班だけでやる班野営、第3は班のいく人かの者がやる野営である。

この3つの条件下の班野営をいろいろな観点から研究してみよう。もちろん、野営には不要の要素がたくさんある。しかし、全部が同じとは決していえない。そこで、隊野営に参加したときの班野営から掘り下げていってみよう。

隊長は、班長たちと相談をした後で、野営地を決定し、同時に費用、輸送、食糧、薪、水などを含む重要な事項の手配を済ませ、また、地区コミッショナーに野営の通報をし、野営基準証明書の発行をうける。たしかに、隊野営に出発するまでに、済ませなければならないことはたくさんあるが、それをみな完了していることであろう。隊長は、班長である諸君に、諸君の役割を伝え、また

諸君は班会議を開いて野営全般について班員と協議をし、各班員が各自持ってくる物の報告をする日限と野営から戻る期日をはっきり知らせたことと思う。諸君は、班員が両親と関係者全員に野営の通報をしたことを確認しなければならない。

すぐれた隊野営の秘訣の1つは、出発前夜に班員が各自の携行品の梱包をすませ、点検をうけるようにすることである。このときには諸君は点検に立ちあうようにしなさい。点検は1つの試練ではあるけれども、諸君の班は自信をもってこの点検にのぞんでもらいたい。しかし、たぶんそれほど自信はないと思うけれど。点検の結果諸君の班のスカウトのうち3人は何かたいせつな物を忘れてきた——新米のピルは毛布を忘れ、ジャックは歯ぶらしを持ってこなかったし、トムは必需品以外に不必要な品をたくさん持ってきた——と仮定しよう。この不祥事の責任は誰にあるのか。ピル、ジャック、トム、それとも班長か？責任をとるべき者は班長である。なぜかといえば、班長は点検1時間前に班員を集めて、荷物の点検をし、不備があった班員は家に帰らせて整備させる余裕を持つべきであったのに、この当然の義務を果たさなかったからである。こうしておけば、隊長の点検は諸君が点検をした後であるから、問題なくす

まされるし、諸君は準備が完璧なことを知っているのだから、誰の点検も恐れることはない。いうまでもないが、携行品を完全に整えることと、それを正しく梱包し、リュックサックや小物入れが、体裁よく見え、また物が整然と配置されているように梱包することとは、別の問題である。私は非常にこっけいな梱包を見たことがある。リュックサックの詰め方がまずいので、ひどくぐてぐてした大荷物になって、背負いにくそうなのや、リュックサックのつるし皮に一杯いろいろなものをぶらさげて、まるで田舎のお祭りでよく見かける放浪のいかけ屋のような格好をしたスカウトなどを見たことがある。また、リュックサックを開くのを見て、びっくりしたこともある。——汚れたやかんを包むようにきれいなシャツを詰めたり、毛布でマーメイドをくるんだり、パジャマにべったり割れた卵の汁がくっついたり、水筒の水がもってリュックの中味が洗濯屋の洗い物入れの洗濯物のようになっているのを見たことがある。私はスカウトを叱ろうとは、けっして、思わない。この責任は(当否は別にして)班長にあると、私はいつもいうのである。

野営に行く場所がわかったときに、諸君は野営地の写真を見たり、地図で場所を調べたり、どのような状況の場所かを班員に説明したりするか？諸君は、班テントの設営場所、炊事場の位置、野営地でやらなければならない仕事などを考えているか？各班員は野営地での作業を知っているか？それとも、見知らぬ土地へ来て途方にくれ、なにをしたらよいのか、いつしたらよいのか、どうしたらよいのかもわからずに、班全体が手のつけられない混乱におちいることになるか？

ちょっと、テントのことを話そう。班員は野営前にテントの立て方を練習しているか？テントを立てるときの、各班員の分担をみな知っているか？風向きを考えて、テントの向きをきめたか？張り綱とベグの数を点検したか？木づちを持ってきたか？テントの破れ目や割れ目を修理してあるか？野営地に到着したときに、班員は、短時間に、



テントの包を開いて、たておわることができるか？それとも、見ず知らずの他人から小包を貰った者のようにテントの包を開くのか？テントの形にとまどって、いったい支柱がどこに入るのか、どうやってたてたらよいのかもわからずに途方にくれることになるのか？

炊事場のことを話そう。たいていの炊事場はひとりでにできあがるようである。誰かが火を起すと、他の者が湯沸しをつるす腕木を作り、中には非常に操作しにくい扉を作ること決心する者もでる。こんな扉は、日ならずして、とんでもない厄介物になる。なかなか感じはいいが、そこを通るのはいまいましく思われ誰も炊事場へいかなくなるのがおちである。諸君の班は、配置の妙を考えに入れた上で、炊事場の建設にかかっているか？諸君は、まず必要不可欠の設備を作り、装飾的なものは時間の余裕ができるまであとまわしにするように、設営順序を心に描いているか？花園と「歓迎」の石文字はたいへんけっこうであるが、必要不可欠なことをしおえるまでは、あえて急いでやるまでもないことである。

よい野営では、炊事場は目だたないことから手をつけるべきである。麻ロープで場所の区画をし(あとで時間に余裕ができたときに、丸木で区画する。)かまど、簡単な食器棚、汚物捨て場——この場所の設定は慎重にしないと、うっかり、班員がふみつけたり、訪れたコミッショナーがふみこんだりすることになる——をつくるようにする。

炊事場はどこにきめたらよいのか？テントからあまり離れてはいけませんが、あまり近すぎたり、

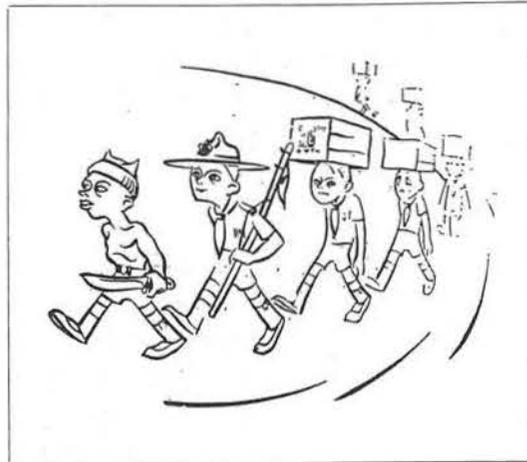
風が吹けば炊事の煙がテントに吹き込むようではいけない。なるほど、煙は蠅や蚊などの昆虫を追い払うが、スカウトまでも追い出してしまいかねない。我々の炊事場はこんなふうであってはならない。外観や全体の配置が見るに似てはいけない。炊事場は、薪置場や給水所になるべく近いことが必要である。要するに、計画的に炊事場を作るのである。

計画という作業には2つの面がある。まず、家で計画をたててキャンプ場にあてはめることになるのだが、我々が描く計画はいわば理想の設計であり、どのキャンプサイトにも完全にあてはまることはない。そこで、第2段階として計画を練り直すことが必要になる。我々は机上の設計をサイトで班会議を開き、その話し合いによって改良する。時間にすればわずか1・2分で済ませるが、これでサイトにぴったりあった計画がたてられる。炊事場の端を少しのばせば、一端はしげみにかかるから、そこにかっこうのごみ捨場がつくれる。あそこにある蟻の塔さえも使い道がある——炊事当番の腰かけにはならないが、薪割り台をすえつける場所になろう。我々が炊事場の一方の端に炊事用の洗い桶をおくようにすれば、ごみ捨て場には近くなるので洗った後の水はちょくちょくかえることができる。このように、諸君は2つの計画、机上の設計と現場の設計をする必要がある。この2つの設計によって、特定の場所の立地条件を考慮し、それにあったように設営ができる。

隊集会の場合と同じように、我々の班は次に起こる事態に備えておくことである。諸君は班野営の楽しさと体験を班炊事をしたり、完全に自分たちだけを頼りにして、味わうことを私は期待する。このためには、諸君の側でじゅうぶんな計画を万事、時間通りに進めることが必要になる。私が隊を持っていたとき、一番先に準備の完了した班というのは、えてして私の考えている準備完了とは解釈を異にしていたので、よくうんざりさせられたことがあった。

多くのスカウトは仕事と遊びとは全く別の作業のように考え違いをしている。この責任は、班長である諸君の全体的な物の見方、どんなことにも

熱心に全力を傾注する模範的な態度によるところが大きい。もちろん、キャンプでは班員全部であらゆる任務を果すように分担をきめることがたいせつである。ジャガイモの皮むきでも、毎回やられるのではかなわないが、なかなか楽しいことである。諸君の任務はスカウトにできるだけ大きな体験を与えることである。全員が炊事、食糧の用意、火を起こし、洗い物、新しいごみ捨場の作製、その蓋作りにあたるようにし、皆が1つは用具を作るようにしたいものである。班長が、次長のたすけをかりて、いい仕事はすべてやっしまい、やりたくない仕事は下の班員にやらせるのは、まずいやり方である。キャンプが終了するまでに、班員1人1人が、野営について何か新しいことを習得できるようにすべきである。こうするときには、こげたオートミールや煙くさい茶を飲まされる破目になるが、これは班員が習得したことに比べれば非常にやすい代償である。



やりたくない仕事を下の班員にやらせるのは……

さて、我々の設営は一段落し、班野営と班炊事が軌道にのったとしよう。次に何があるか？各隊・各班は朝の点検をすることであろう。持物は清潔で、毛布にはよく空気を通し、天気よければテント内のものはすべて外に乾し、テントは紋り綱で紋り上げ、また小さなテントであれば紋り上げる以上にまき上げ——テントの半分を折り上げて、地面の草に陽光や外気をあてるようにする。しめった、からまった草ほどいやなおいのする

ものはない。これをさけるには、できるだけまめに、太陽をあて、空気通しをするに限る。

私は文字通り何百もの野営を見学したことがある。だいたい、朝の点検は悪くない。しかし、3・4時間後はどうであろうか？2・3時間前のあの整然としたサイトのおもかげはない。まるで台風と鹿の大群の共同攻撃を受けたみたいである。炊事場をのぞいてみよう。かまどは、燃えかけの紙と空缶、それに誰かが投げこんだたべのこしのパンで雑然としている。洗い物用の器は汚れたままである。斧は地面に放置されたまま、もうさびがではじめている。誰かの上衣は入口の門にぶらさげてあり、毛布の紐はたるんでしまっ、毛布は昨夜の雨にぬれた地面にたれ下がっている。張り綱はたるみ、テントの支柱に重みがかかっている。テントの真中にはきたならしい衣類がうず高く積まれ、「スカウト」誌はサイトのあちこちに放りっぱなしになっている。ジャムのびんは蓋が開いたまま、きばちが群がっている。どうして、こんなふうになったのか？点検から今までの間に、何かとんでもないことが起こったのであろうか？私にはそのわけがわかる。班長は、これで今日の任務はおわったと考えて、もう気を使わないことにしたためである。今朝はスカウティングをやったか？いや、ちっともやってない。彼らがやったことは、ただちらかすことだけであつた。ところで、私と一緒に、別のサイトを見学してみよう。ここは事情がちがうようである。ここは、点検がほんの2・3分前に終わったかのごとく、きちんとしている。寝具は、まだ、乾してある。毛布の紐はびんと張っているし、テントの中には何もないので、太陽が草にまであたっている。炊事場はどうか？そう、やかんは火にかけられ、しゅっしゅっ気持のよい音を発し、きちんとマスクをつけた斧は薪割り場にある。水ばけつは水が一杯入れてあり、その上に蓋がしてある。薪は割って、大ききごとと高く積んである。紙は、明日雨が降ったら急場をしのぐために班長がかまどの下につこんでおいた紙きれ以外に、まるっきり見えない。使われてないやかんは食器棚で太陽にあてられ、それは手入がゆきとどいてびかびかと照り輝いて

いる。班員たちの姿が見られる。ピリーにとってはいい朝であつた。彼は2級の火起こしに合格した。ジャックは2級の追跡にとてもよい成績がとれた。ちびのトムさえも、班長と一緒に湖にでかけ、ほどなく泳げるようになれよう。トムが泳げるなんて、2日前は誰も思いもよらなかった。この班はスカウティングをやっている。その理由として2つのことが上げられる。第1は、班長にスカウティングをやる気があること、第2に班長がそれを実行していることである。彼は清潔なキャンプの価値を知っている。彼は清潔なキャンプは人に見せるためのもの、隊長や視察にくるコミッショナーを喜ばすためのものではないことをわきまえている。彼は、スカウトがスカウティングを進めていくためには、その背景として、どうしても清潔なキャンプに心がけさせることが不可欠であることを知っている。さて、私のいいたいことがわかってもらえたと思う。諸君は、自分の班をどちらの班に引っぱっていくべきか、きめたことと思う。どの班にもあてはまるモットーを教えよう。すなわち、「我々のサイトはいつでも点検をうけられる準備がしてある。」

このキャンプでは、他にどんなことが行われるか？諸君は班員を見なおすことになるであろう。おそらく、諸君は班員のことは前から知っていよう。諸君は班員の名前はもちろん、彼らについていくらかの知識を持っている。しかし、同じテントに起居を共にし、班の炊事場で一緒に炊事をするとは別の面がわかるのではないか？班員が別なふうに見えてくるのは、驚くほどである。あまりパットしないチビのティムがおいしい料理を作るのに異才を放ったり、のろまだと思われていたボブがサイトを飛び交う鳥や蝶の名をことごとく知っていたりする。しかしチャールスはそれほどのことはなく、まったくみそこなってしまった。キャンプ前には大いにしゃべりまくったのに、ろくに仕事はしないし、やることはいいかげんである。おそらく、諸君は彼に忠告を与える方がよい。営火の後の時間がよかろう。おそらく、原因がつきとめられよう。彼はホームシックなのか、睡眠が足りないのか、便通がないのかである

う。それをつきとめるのは、諸君の務めである。諸君は諸君の班を観察し、彼らのことを知るようになる。しかし、彼らも諸君を観察し、諸君の正体を知るようになることを忘れてはいけない。彼らはどんなことを見るか？ 有能な班長であるかどうか、何でも知っているが決して知ったかぶりをしない男であるかどうか、あるいは班のデンでは立派なことを話しながら、朝は一番最後におきだしてくる男であるかどうかを見ている。彼らは、今朝、諸君が歯をみがいたかどうか注意している。いやおうなしに、諸君はおたがいを観察しあう。しかし、これは大切なことである。このことから利益をえるように努めなさい。諸君は班の長所を見つけてそれを生かし、また班員および自分の欠点はなくすようにすることができる。これは、キャンプならではの試練である。キャンプはすぐおわってしまう。時間をたいせつに1分たりとも無駄にしないように。

ところで、考査はどうであろうか。隊ルームでは実現不可能なような考査がやれる。諸君は大都会に住み、伐材のための木を見つけるのに困っていたことであろう。しかし、隊長は、この土地の持主は何本かの木を切りたおしてよいといってくれたことを名誉会議に報告した。これだけあればじゅうぶんである。諸君は1級の木樵章の練習をし、それに合格することができよう。水泳のできない者や、今まで泳ぐ機会に恵まれなかった者にかっこうな湖が、我々のサイトの傍にある。ねばり強く、泳げるまで練習をしよう。また、我々は鳥や木の見分け方があまり得意でないのにボブがあれば鳥のことを知っているのは変である。彼が我々を連れだし、いろいろな鳥の見分け方や名前覚え方をおしえてくれないものか、たしかに、この場所はそうするのに絶好である。我々が隊ルームや団本部でやることは、すべて、練習済みで、それに習熟している。しかし、考査課目にある「街へ行く」ことは、キャンプでしかできない。今週は練習をして、来週は隊長に考査してもらおう。家に帰るときまでに全班員が2級になれるようにしよう。もしできない者がいたら、他の者への見せしめにここに残させる。

隊における班野営について述べたことはすべて班だけの班野営にあてはまるが、その他のことをつけ加える。諸君および次長が、事前に、しなければならぬことがたくさんある。諸君は野営地を見つけ、实地踏査し、食糧、薪、水の手配をし、各スカウトにかかる経費を算出し、日曜礼拝のために教会の手配をして、その牧師に礼拝にできることを連絡する。医者が必要になることを予測すればあらかじめ医者の家を知っておく必要がある。最上のことを期待し、最悪のことに対処できる準備をすることがよい。諸君が準備万端を整え、計画ができ上がり、いよいよ班野営に出発するために隊の集会場に向かう途中、どこかのうすのろが道に煉瓦を捨て、諸君はそれにつまずいてひっくり返ったとする。運わるく、諸君は鎖骨を折ってしまった。重傷ではないから、すぐに治るのであるが、キャンプへは行ける状態ではない。こうなったら、全員がいけなくなってしまうであろうか？ もし諸君が自分だけで細部まで計画をたて誰にも知らせてなかったら、そういうことになろう。しかし、諸君の次長が諸君と同じくらいに計画を知っておれば、次長がやることができよう。次長にとっては、彼が影の存在ではなく、次長の真価を発揮する絶好の機会である。彼はちゅうちょせずに任務を引き受け、班の志気が高くさえあれば、諸君がいなくとも、一層よいキャンプがやれることになろう。何故かって？ そのわけは、班内に故障が起こると、班の志気が高ければ、却って全員が全力をつくすことになるからである。しかし、だからといって、諸君が度々鎖骨を折ったらよいとは思わない。私が諸君にいいたいのはつねに備えていること、諸君の次長を信頼すること、次長の職分を重んじ、任務をゆだねられるようにすることである。

キャンプの場所について、少し、話をしよう。私はキャンプ愛好者にちょっと悩まされることがある。彼らは週末ごとに同じ場所にキャンプにかけ、まったく同じ場所にテントをたて、ほとんど同じ草の上に寝ようとしている。それは悪いことではない——たしかにキャンプに行かないよりはるかによい——しかし、ほんのちょっと変えた

らどんなものだろうか？ 少なくとも夏場は3か所は別のところへいき、できるだけちがう野営地をさがすようにしなさい。諸君は英国連盟本部の野営場へいくことができる。ギルウェルへも来なさい、大歓迎します。他の森の野営地へいくこともできる。森の中でキャンプをしないように忠告する本が沢山あることは知っている。しかし、内しよの話だが、森のキャンプはなかなか面白い。しかし、夏のキャンプ向きではない。諸君がそれをやれば、諸君の班はその考えに賛成してくれよう。朝は肌寒しい、いつもより早目に暗くなる。ブヨは大きく、ふとって、刺されるととてもいたい。しかし、森のキャンプは平原よりも冒険に富んでいる。夜はすこし気味が悪いし、私だって1人ではそんなところにいたくないが、班と一緒にスリルがあって面白いであろう。営火は趣がことなるがいつもよりもっと気持ちよく友情を深められるし、実際よりも遠く人里離れた気分を味わえる。第3番目のサイトには農家に善行をする場所をえらぶことができる。農場の隅のくすんだような空地はサイトに不適かもしれないが、ここなら生垣の補修や稲刈りの手助けをするのに便利である。こんなキャンプをするのも、なかなか気持ちのよいものである。

ついでに、毎週末キャンプに行くようにしないように注意したい。諸君には家庭があり、教会へも行かなければならない。過ぎたるは及ばざるがごとしである。

場所の選定と携行具についてはこのくらいにして、はっきりした目標を持つことをすすめる。ぜひとも、プログラムをたてなさい。しかし、毎日を1分1秒まで細分した時間表のことをいってのではない。追跡とか、木の識別とか、木によって燃え方がどうちがうかあるいは橋をかけるにはどうしたらよいかを実験するというような、目標を設定しなさい。キャンプから帰ったときはいつでも、出発前より、自分の知識が増え、技能が上達しているようにすることである、すなわち、野営とスカウティングの実力を上げることである。目標を持つことはキャンプの日課を引きしめ、キャンプがだらだらと無目的に長引かないようにす

る。我々と一緒にスカウトのはしごを——初級、2級、1級、ブッシュマンズソング、クイーンズスカウト——のぼっている。キャンプの時間をこのはしごをのぼるためにすこしでも使うことができれば、本を読みデンの見せかけの状況で遊ぶよりはるかにすぐれている。我々のキャンプ場であれ、ギルウェルであれ、森であれ、川岸であれどこでも我々はスカウティングをやることができる。

さて、最後の野営状況——班のいく人か、おそらく班長と次長と、もう1人ぐらいでキャンプをする——について話そう。3人という数はキャンプでは縁起の悪い数ではない、荷物は軽いし、炊事場はそんなに手の込んだものを作らないですむ。しかし、目標のある健全な野営をする心掛けには変りない。我々の目標は特定な問題をかかえた特定のスカウトを援助することとか、お互互士の理解を深めるためのことであろう。

諸君の班員の1人がある考査課目に手こずっているの、その課目に専念させるためのことであろう。短期間の野営で困難は解決されるであろうし、このようなキャンプは、どこへでかけたいとか天気がよさそうだからという、ふとした動機から、ほとんど、実施されるものである。

他にキャンプについていうことがあるか？ 荷車についてはどうか？ 私がスカウティングに入った頃の想い出の1つに、手品箱そっくりの古い荷車がある。この車に我々の荷物を全部つみこんで、川や溝のところに来るとばらばらに分解して渡せた。車の両側ははしごになるし台はテーブルに早変わりする。車の柄は旗竿に、といった具合で、いろいろな目的に使えないような部分は1つとしてなかった。現在はあまり荷車を見ないようである。隊が自動車でやってくるのもある。たしかに、非常に快適で、有用であるが、これでは頭を使う必要はなくなる。自動車に乗ったのでは、荷車を引きずって目的地にたどりついた時に感ずるある気持ちを班の者が味わうことができるかうたがわしい。荷車が1台手に入るか、あるいは週末の2時間借りることができるかやってみたまえ。班員がびったりと肩をくっつけ合って、引っぱる

様を想像したまえ。それこそ、本当のチームワークである。これこそギャング（遊び仲間）の協力である。身の安全と、合理性と、自動車かぶれとにとられるな。我々の足と筋肉を使って、荷車ならではの楽しさと経験を味わおう。

ギルウェルの団ルームには、ラドヤード・キプリングの引用句がかざってある。

たそがれ時にたき火の煙を味わい
かばの木の燃え音に耳を傾け
夜のおとないをめぐとく知る者
彼を仲間に入れてあげなさい

かの若者の足は はっきりした希望と わかりきった喜びを与えるキャンプへと向かっている

キャンプでは、この気持が大切である。諸君の班員に、諸君のキャンプは「わかりきった喜び」であることを教えなさい。この喜びは、成長した将来、過去を振り返り、思い出すものであり、現在中年になったオールドスカウトたちが楽しい班野営の思い出にひたりながら感じているように、班員たちはきっと諸君に感謝をすることであろう。

『班長の手引を読んで』

故 中村 知

班野営——ということばについて、明確な説明をしてあるのは、さすがにジョン・サーマン先生である。我々は、ふつう、班野営というと、班が、その班単独で勝手にキャンプに出かけることだ、と、考えやすい。ローランド・フィリップスの「パトロールシステム」のなかに、優勝を何回もかちえた班に、隊長がごほうびとして、単班野営を許してやる。それが、班野営であると書いている。ただし、その班長は1級スカウトであること、と限定している。

ジョン・サーマンは、これについて——

(a) 隊野営の中の班野営。

つまり、隊野営なのだが、各班はそれぞれ別々のサイトに野営する。班と班との間隔をあげてほかの班にじゃまされないようにする。ただし、班と班とはたがいに友誼ある競争—Competition をする。そういう形も班野営で

ある。

(b) ある一つの班だけが単独に野営するという形の班野営、すなわち他の班に関係なしに。むろん、隊長の許可を要する。この場合、隊付またはリーダーが、ひそかにその様子を見にゆく。

(c) ある一つの班の中の、なんんかか、班の野営具を持ち出して野営する——という場合の班野営

という3種の班野営をあげている。

日本では、班野営という用語に定義ができていないとすれば、おそらく(b)のようなものを、みんなは班野営だと考えるだろう。私見をいうのはさげたいが、(c)の例はシニア段階以上のものではないかと思う。そうでないならば、これはテスト（たとえば1級旅行）のための野営と考えたい。そしてその人数は3人1組でありたい。2人では、万一の場合うち1人が救護に当たるため、急報に出る者がいないから。

ここで、著者は「手品箱そっくりの古い車」を回想している。

近年は乗り物の発達によって、使わなくなったらしいが、英国のスカウト隊では、昔から Trek cart と名づける荷車を用いていた。これに野営用品や食糧、寝具を積んで全員がロープでひっぱる。あと押しする者もいる。班の人数全員のチームワークを狙ったものである。この車は分解できる。車輪、梶棒、車体がばらばらになるから、分解して山岳を登ることも可能。しかも、この車1台で、ハシゴにも応用できるし、食卓にもなる。浅い川なら、川の中をひっぱって渡河する。さまざまな用途がある。このトレック・カートの訓練を、1911年、ロンドンのスカウトのラリーを見学された乃木将軍が見て、びっくりし、帰朝後学習院での講演で話されたという記録が残っている。京都の中野忠八先生が大正年間この車と同じのを日本で作らせて用いられた私の記憶がある。

英国では、たぶん、各班に1台ずつ、この車をもたせたのだろうと思う。これも班活動を増進する一助となる。我々は、これを「スカウト車」とよんでいた。

班 長 の 手 引

—THE PATROL LEADERS' HANDBOOK—

ジョン・サーマン

今回、班制教育のよりいっそうの発展を願って、ジョン・サーマン氏著「班長の手引」を再掲載する。初版は1950年に出版され、これは1955年版の訳稿である。これが掲載されてからすでに18年の年月が経過しているが、指導者諸氏が熟読され、じゅうぶん咀嚼して実り多き班制を実現されるよう希望する。

《第8章》班長と次長

私の考えでは、スカウティングでもっとも無視されている男は次長である。次長はポケットの上に1本線をつけているが、それさえも他の人はほとんど気がつかないし、それに目がとまったとしても、気にもとめてもらえない。

スカウティング・フォア・ボーイズの初期の版では次長は伍長と呼ばれていた。また、1本線はポケットの上ではなく袖につけていた。昔にもどして、次長を伍長と呼びたいとは思わないが次長の仕事は伍長と全く同じであることを覚えてほしい。班長である諸君に関係することだけからいえば、諸君は次長が班に対して諸君と同じ指導能力を持つように訓練しなければいけない。諸君が隊集會に出席できないとか、デンの班集會に出られないときがある。また、キャンプに行けないことがある。こういうときに、諸君がいないために班に故障が起るようではいけない。諸君がいるときだけ班の統率がとれるのでは、諸君は班長として半人前である。真の指導力は諸君がいないときどういふことが起るかによってはかられる。私が若いときに習った非常によい格言を教えよう。「君の部下に君の仕事を教え、君は上司の仕事を感じるようにしなさい。」人間は誰でもこの世の中に欠かしえない存在であり、他の人がと

って代ることのできない人材であり、誰1人がいなくとも世の中は止まってしまう。しかし、利己的で、自分のことばかりにあくせくしている人が何と多いことか。そのために、人が代ると、その人がせっかくなり上げてきたものは、こわされてしまうことになる。こういう人は指導する立場に立てない人であり、権力の座にあぐらをかく人にすぎない。私は、諸君はこういう種類の「指導者」ではないと信じてたい。諸君は諸君の下にいる次長に班長の仕事を教えていることと思う。したがって、万一諸君が隊から離れても諸君に代って次長が諸君の務めを果してくるであろうし、諸君がシニア隊やローバー隊に上進するときや、諸君が他の地区へ転居し原隊から完全に離れることになっても、諸君の任務は完全に下の者に託せることであろうと思う。こういうふうな事を運ぶためには、諸君の次長はもとより、諸君の班員にもある程度事態に処する正しい知識を持たせるようにすることである。賢人は人生計画がきちんとできているから、いつ、街で自動車にはねられても、他の人に迷惑ができるだけかからないようにしてある。諸君が、こうあるためには、することはただ1つ諸君を助けて班を統率する次長に諸君の意図を正確に伝えておき、その必要が起こっ

たならば、諸君に代ってことを運ぶことができるようにすることである。このためには、もちろん、班会議をたびたび開くことであり、また、1つには班長が次長に絶対の信用を置くことである。

まあだいたい、諸君の次長は班長である諸君より年が下であろう。われわれは他の者より少々年が上のときには、少し前にはわれわれは彼らと同じ年で、彼らとまったく同じくらい素直であったことか。われわれが班長としての任務を正しく行えば、彼らは自分の体験だけでなく、われわれの経験をも吸いとることができるのであるから、われわれよりも一層優秀になるにきまっているということを忘れてしまいやすい。

諸君の次長を信用し、正しい体験を分け与えるようにしなさい。班長は、ときには、わざと班長会やキャンプに遅れて参加するようにするのはわるい考えではない。このときには、あらかじめ、次長に集会を始めさせるように、また、キャンプの配置の計画、テントの設営、炊事場の建設、食糧倉庫の準備などを進めておくように命じておく。やり方まで教えたり、図示したとしては何の価値もない。その場にあってのように、次長に思いのままやらせることである。ここは、もちろん、同情をしやすいところである。しかし、思いのままにすべてやらせる方が、仕事しやすいし、それに興味が大きい。とはいっても、班長があとでキャンプに駆けつけ、あまり苦勞をしないようにすることがよいのである。班長は、自分の任務を果たすことが大事であるが、彼がすでに習得した体験を他の班員、特に次長に、積ませるようにすることである。スカウティングのすべてはなすことによって学ぶことが肝心である。このことは2つの意味がある。1つは、諸君自らがなすこと、もう1つは、互に批評し合っこそ諸君は学習するのであるから、他の人を批評し、また他の人から批評されること、である。行為だけではふじゅうぶんである。いつも、間違っやり方であることを処理するようでは物足りない。諸君が間違いを見つけ、また、間違いを他の人に指摘してもらい、2度と同じ間違いを繰り返さないようにすることが真の学習である。なかには、あまりにもはっき



りして、2度とあやまりを犯さないような間違いがある。川が増水しているのに川岸でテントを立てればけっして忘れることのできない教訓をえるであろうし、オートミールをかきまわすのを忘れると、その味の悪さは口からも、記憶からも拭いされないであろう。

どうやら、次長のことから横道にそれたようである。次長に対して、われわれがしてあげられることには他にどんなことがあるか？

諸君が気をつけてやったらよいと思うことの1つは、いつも、次長にはっきりした任務を与えることである。キャンプでは、次長には食糧の貯蔵か、寝る仕度か、献立かを受け持たせるとか、隊集会では、特に責任の重いリレーの最終走者という役割を与える。

班長が一方の端、次長が他方の端にいるようにするのはなかなかいい考えである。なかには、これと反対のことをしようとする次長に対して非常に寛大な班長がいるが、こういう班は頭でっかちで尻きれになり、新入り、ないし初級スカウトはぜんぜん注意してもらえない。優秀な隊では、次長は2人ぐらいのスカウトを専門に

みようとやっている。私は、次長は4番および5番スカウトのめんどろをみてやるのがもっともよいと思う。新入りの6番スカウトは、もっとも世話がやけるから、班でいちばん経験のある班長の監督下におくべきである。

おそらく、諸君の次長は諸君が持ってない技能を何か持っていることであろう。結索がうまいとか、開拓作業や、炊事や、信号に諸君よりすぐれているかもしれない。次長に諸君より優れたところがあるからといって、それは諸君にとって不名誉なことではない。恥ずべきことは、諸君の班の利益のために次長の才能を生かせないことである。諸君は信号の腕が少し下がったかもしれない。一どんな名人だって腕にはぶるのだから不思議はない。困るのはそれがために、諸君の班がワイドゲームで通信を発信地から目的地まで迅速に送れなくなることである。責任を感じて班長が失敗をごまかそうするのは馬鹿な、利己的な班長がすることである。賢い班長なら次長が信号に秀でていることを認めて、彼に「君の腕のみせどころだよ、ビル、楽にいけよ」と声をかけるであろう。これこそ真の指導者である。それにはそんなにむずかしいことではない。ただ、真の指導者の資格は正純な人類愛につちかわれていることを知り、いつもそのように心がけることがむずかしいだけである。

私は、諸君が次長のことを考えてやることを望む。できるだけ次長を盛りたててやるようにしなさい。諸君の次長は次の班長になる可能性を持った者である。彼が班の指導面に加わる権利を持っていることと、2つがばらばらであるより、協力しあう方がはるかに強力な威力を発揮することを心してほしい。

『班長の手引を読んで』

故 中村 知

この章の、まっさきのところで、サーマンは○本運動で、いちばん、無視されている人物は一次長である。と、急所をついている。もとは Second (次長)

といわないで Corporal (伍長) とよんでいた。これは兵隊用語だということで改正されたのだそうである。

そこで、では、次長とは何か？ ということについて次のような説明がある。

○次長は、班長と同格の指導力をもつように教育されていなければならない。

○班長不在のとき、班の統制がとれないようなことがあってはならない。もし、統制がとれないならば、その次長は、まだ半人前である。

○班長は自分の仕事を次長にやらせ、君(班長)は、上司の仕事をおぼえなさい。

○もし、担当者が変わったがために、その仕事でそれでおしまいになり、後継者がなくなってしまふようでは、ほんとうのリーダーではない。

○後を継ぐ者の育成がたいせつだ。

と、leadership と followership の関連というたいせつな教示を班長にしている。

こどものときから、こういう自分の後継者育成をして来た人であるなら、あとでリーダーになってからも後継者を育てるだろう。それによってスカウティングは滅びないものとなる。

次長すなわち班長後継者——の育成について著者は、次の示唆を班長に与えている。

○次長に、絶対の信頼をおくこと。

○次長の思うままにやらせること。

○はっきりした任務を与えること。

○次長は、スカウト2人分の世話ができるはず。

たとえば4番スカウトと5番スカウトの世話を……

○次長をもちたててやりなさい。

○その長所を活かしてあげなさい。と。

私は、隊長諸氏にも、この示唆を受け入れられるよう望む。諸君の副長は、はたして、隊長になる教育を、あなたからされているかどうか？

班長の手引

—THE PATROL LEADERS' HANDBOOK—

ジョン・サーマン

今回、班制教育のよりいっそうの発展を願って、ジョン・サーマン氏著「班長の手引」を再掲載する。初版は1950年に出版され、これは1955年版の訳稿である。これが掲載されてからすでに18年の年月が経過しているが、指導者諸氏が熟読され、じゅうぶん咀嚼して実り多き班制を実現されるよう希望する。

《第9章 班長と

初級スカウト》

班長の役目でもっとも重要なことの1つは、カブ隊から上進したばかりとか、はじめてスカウティングに入ったばかりという、年のいかない初級スカウトを訓練することである。彼らが正しい道を歩むようにしむけたり、初級スカウトの考査課目を習い覚え、理解をし、なかならず、楽しく修得するように気をつけるのは諸君の役目である。

諸君の目的は彼をじゅうぶんに訓練し、彼が自分のなしとげたことに誇りを持ち、彼が諸君の指導および訓育に尽くした努力に感謝をしながら、考査をやりとげる覚悟を持てるまでにして、彼を隊長にゆだねることにある。初級スカウトの訓練はいろいろな方法で行われるが、その中でも班長はもっとも重い責任を持っている。スカウトとして、班長として、あるいは隊長として、また、実のところ社会のいかなる領域でも、われわれすべてが直面せざるをえない危険の1つはわれわれがよく知りつくしていることが、はじめてその問題を扱う者には、未知で、風がわりで、ことによると、困難にさえ思えることを忘れてしまう誤りである。このことを別に言いなおすと、優秀な班長は下の者を教えるときには、最初に教えた者に対

すると同じだけの熱意を持って、最後の1人までめんどろをみてやることである。このように、最後の者にいたるまで新鮮さを保ち最初の者に与えたのと同じだけのことを最後の者にまでしてやることは、指導者の大きな、そして、厳しい試練の1つである。たいていは、とても親切に最初の者のめんどろはみてやるが、同じことを繰り返すことになるので、班長はいささかうんざりしてしまい、その結果、だんだんいいかげんになってきて、はしょった教え方をするようになる。実地考査には戸外へでることをせぜずに、隊ルームとか班のデンなど室内ですませて満足してしまう。こんなことでは、班長は考査に生命を吹きこむことはできないし、熱意を全身にみなぎらせ、入隊することに胸を躍らせ、スカウティングを实践しようと張切っている、訓練のいきどおいた初級スカウトを隊長に引きあわすことなどは思いもよらないことである。彼ができるのは意気しょうちんした、考えのない少年、それでいて、どうして意気しょうちんしているのか、自分にはわからない少年を作ることぐらいである。

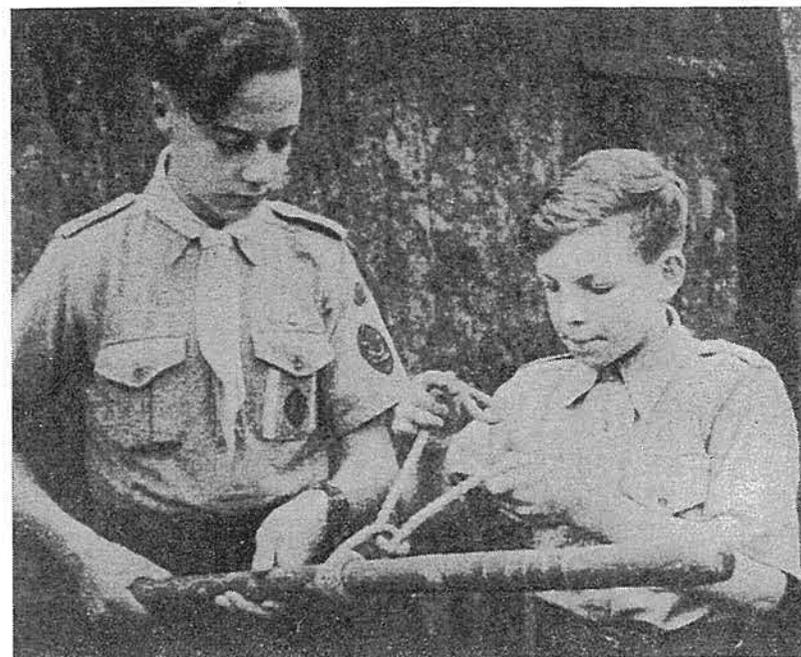
初級スカウトの考査には、1つの特色があることを忘れないように。すなわち、スカウティングに入ったわれわれすべては、初級スカウトの時代に将来の基盤が形づくられることである。この時代に熱意の火花がとびちり、1つの炎にもえあが

るのである。この時代は少年がよいスカウトになるか、スカウティングを楽しむことができるか、あるいは、彼はいやいやながらついていくことになるか、あまり進歩をしないか、あまり熱を入れないか、もしかすると、少したってやめてしまうか、何か他のことに移ってしまうか、きまるときである。

何はさておき、初級スカウトの訓練には身を入れなさい。考査ははなやかに興味深くし、できるだけ、戸外でやるようにしなさい。

一般的なことはこのくらいにしよう。

さて、どんなことを教えるにも2つの面があることを忘れてはいけない。どうもいい方がむずかしくて、まだるっこしくて時間がかかるかもしれないが、諸君にまず「Popocatepetl」という語を覚えて、その綴りを暗記してもらおう。(たしかに、その綴りに間違いあるまいと思うが、)さて、たいして苦勞もせずに諸君はこの語を覚え込み、その字がかけるであろう。諸君はこの語の意味とか、いったいなんなのかも知らないであろう。新しい結索の呼名か、パタゴニア人の武器か、それとも、エスキモー人のスープ料理であろうか、要するに、字が書けるだけではなんの価値もないということになる。しかし、ここで私が、メキシコにはプエブラ州というところが実在し、そこには非常に美しい火山が1つあり、その火山には、たくさんの伝説が伝えられているということを、諸君に話したとすると、話はますます面白味を加えるが、この2つを結びつけなければ、いったいなんのことかづじつまがあわない。そこでわれわれが知るの、メキシコのプエブラ州には多くの伝説をひめた美しい火山があり、その名は「Popocatepetl」である。これで、完全な知識ができあが



った。さて、この考え方をスカウトのちかいとおきてにあてはめてみよう。小さい少年にスカウトのちかいとおきての字句を記憶させるのはやさしい。また、その字句を一字たがわず覚え込ますことは非常に大切なことである。よけいな心配をするが、諸君はちかいとおきてを知っているでしょうね。しかし、字句を完全に覚えているだけではよく調教されたおおむやくくまるがらすの芸とちっとも変わるところがない。新しい隊員はわれわれが一生けん命教え、また、彼にやる気を起こさせることができれば、どんなことでも覚え込ますことができる。しかし、これでは彼の役にはたたないし、これでは彼は一言半句も意味を理解しているとはいえない。一方、スカウトのちかいとおきてを初級スカウトに説明して、それをわからせるまでにいたらなら、まあ、おおむ返し法よりましであるが、それでは、けっして完全ではない。あたりまえのことではあるが、この問題の正しい扱い方はただ1つ、スカウトのちかいとおきてを完璧に覚えるように教え、また、彼がその意味をほんとうに理解するように、新人に説明することである。

私のいうことがわかってもらえたか疑わしい。思い返してみると、どうやら私のいいたいことは

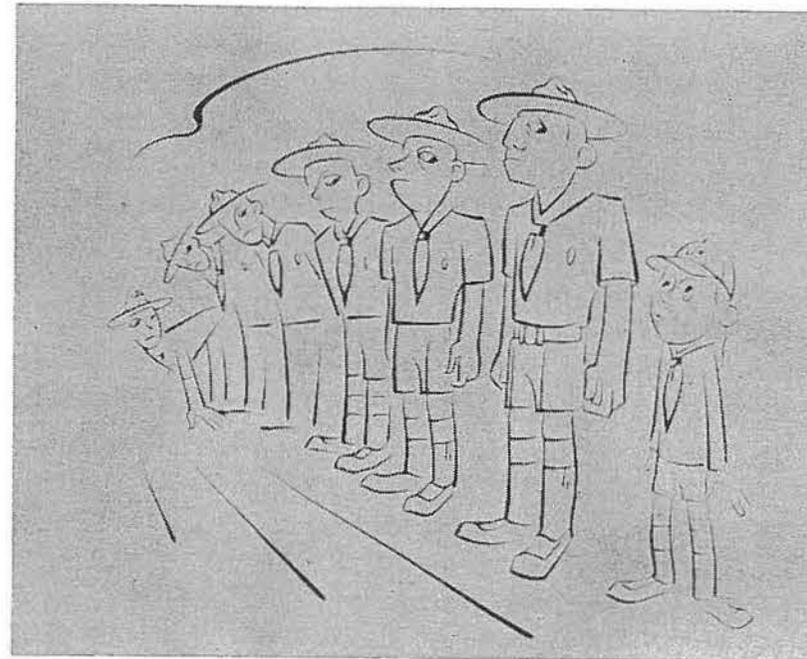
ほんとうは、こういうことではないように思われる。誰にでも自分の言葉で、あることを説明するのは、たいへんよいのだが、諸君の力で、彼がその意味するところを自分の言葉でいいあらわしえるように導くことができればもっとよい。この理由は、彼が理解したことは他の人から無理に詰め込まれたことより、はるかによく覚えていられるからである。もちろん、名誉とか、忠誠とか、礼儀正しさとか従順とか、が何を意味するか、彼が考えることを、年のいかないうちのスカウトに説明させるのは、やさしいことではないが、おそらく彼には、彼にふさわしい考えがある。彼にしゃべらせてから、諸君の経験を彼の考えに加えてやるようにしなさい。できれば、諸君や班員の誰かが体験したことを夜話とか、寓話に仕立てて話してきかせるようにしなさい。諸君が問題につきあたったときには、おそらく、スカウトのおきての1つが諸君の役に立つであろう。この種の教え方は、人間的で、自然で、友好的であるからいちばんいい方法である。これこそ、ほんとうのスカウト的な行き方である。諸君が班員に自分の身になるように理解することを教え、「スカウトの名誉は信用される場所にある」ということをいつも心におくようにすれば、その他のスカウトのおきては簡単にその意味がわかり、その意味が深まる。何よりも、複雑にしないようにすることと、長ったらしく話をしたり、気ままな話をこしらえあげて新人を悩ませないようにすることである。おそらく、諸君は彼より2つか、3つは年が上であろう。諸君は自分が11歳であったときのことを思いだし、どの程度のことが理解できたか、どんなことに興味を感じたかを考えてみることに、諸君が班長から教わったことを彼に与えることである。——あるいは、諸君は班長からは教わらなかったが、教わった方がよかったこと、教わりたかったと思うことを教えることである。

この問題で私が他に付け加えたいと思うことは、あと1つ次のことである。私はいつも、今こそ諸君が基準を置くとき——ということとは規律を意味するのだが——であるといっている。諸君の新入班員のうち1人でもスカウトのおきてをない

がしろにする者がでたら、諸君は「いいよ、彼は経験が浅いだから、そのうちよくなるさ」という態度をとらずに、ただちに彼に注意をあたえ、諸君は班長であることを彼に見せ、諸君は他のこともスカウトのおきてと同じように厳しく守るように監督しなさい。物事をいいかげんにやると、諸君はとりかえしのつかないことをしてしまう。でだしを少しきびしくするのが、よい指導者の秘訣であり、諸君の新入りの班員はそのことに対して諸君を尊敬するであろう。

次に、カブから上進してきた少年とスカウティングの経験の全くない、外部から入ってきた少年とでは班長の諸君は違った扱い方をしなければならない。事を簡素化するため、両方の少年が同一年齢、すなわち、11歳~12歳までの間であると仮定して話をしよう。

カブ出身者は、すでに、スカウト兄弟の間になっている。ジャングルの時代から、彼はスカウティングの初歩についてはたくさんを習っており、諸君と同一の団の一員であるから、同じネッカチーフをつけ、同じ団員章と同じ州名章をつけることができた。彼は、長い間、スカウトになる日を夢みてきたので、彼に対する歓迎の仕方とか、彼の扱い方は、おのずから少し違ったものになる。諸君は、彼のジャングル時代が有意義であること、その時代は彼にとって1つの名誉であることをわからせる必要がある。スカウト隊に入るカブは、ほとんど、カブ隊で組長や次長を経験した者であろう。彼らは、腕に2本線をつけ、帽子に星を2つつけ、技能章をいくつかは持っている。小さい少年の間では、かなり重要な者たちといえる。突然、これらすべてをうばわれたとしたら、どんな気持ちになるか、ちょっと、考えてみたまえ。諸君の帽子とあの大切な星はなくなってしまし、技能章を着用することもできないし、組長章までもとられてしまうのである。組の親分——年下のカブたちが尊敬する組長、アケイラをあれこれと助ける組長、なかなか重要な地位である——が、突然、狼班のしんがりに、班の最年少者になるのである——技能章は何もない、雰囲気はちがうし、ほとんど知らない者の間におかれる



ライオンの尻尾になる方が……

のである。カブ出身者がスカウト隊に入隊したとき、われわれは彼にりっぱなことを要求するし、入隊してはじめてのときに正しい印象を与えさせることは非常に重要である。班は彼を熱心に助けてやれるか？彼がリレー競争で彼の番をまちがえ、班が失点をとられたとしても、班長は勇気づけの言葉をかけてやれるか？古いことわざに「ライオンの尻尾になる方が、20日ねずみの頭になるよりよい」というのがある。たしかに、その通りであるが、小さい子供が理解するのはとても困難である。カブ隊では、彼は20日ねずみの頭であった。今は彼はライオンの尻尾のようなものである。彼がライオンの尻尾でいられるかどうかはひとえに諸君にかかっている。

諸君は、スカウト隊に入ったカブの何人が隊をやめていくか、それも班長の側に少し思いやりがたりないために、ほんの少しやさしい言葉で勇気づけなかったために、何人やめていくか知っているか？ 班長が自分の任務を理解し、それを果たさないようでは、隊長はたいしたこともできないことは、諸君にもわらう。どんなスカウト隊でも、その将来はいつも班長の手の中にある。

さて、もう1人の少年、外部から新しく入って

きた少年はどうであろうか？ 彼には、もっと大きな理解と援助とが必要である。彼は団の伝統にはまるで染まっていないし、過去の実績とも関係がない。おそらく彼は、あっちこっちに突きあたりながら、カブ出身者ほどの知識もえられないであろう。

望みは、彼がスカウトたらしとする強い意欲にもえているところにある。つまり、彼は全然関りのない外部から自分の意志で入隊したのである。明らかに、彼はスカ

ウティングは非常に自分のためになると感じているにちがいない。そうでなければ、なぜ入隊する気になったか道理がたたない。彼の熱意は少しばかり問題になるかもしれない。彼は歩くことが満足にできないのに走りたがるであろう。スカウティングの言葉でいえば、彼が結案ができ、火起こしができる前に、キャンプとかハイイクに行きたがるということである。われわれは熱意を少しさませなければいけないが、あまりやりすぎると熱意は死にたえてしまう。また1つには、彼にはカブ出身者に与えられる特権が認められない。彼はネッカチーフを着けることができないし、左手の握手をする資格がないし、敬礼や、スカウトのサインをすることも許されていない。これらはスカウト兄弟のしるしであり、この特権は獲得しなければならないものである。彼がそれを獲得できるように気を配りなさい。

どのようにしたら、これらの権利を新入りの隊員は獲得することができるか？ まず何よりも第1に、初級考査に合格すること、第2に、隊および班の規律に従い、隊および班両方の伝統をうけ入れる意志のあることを示すことである。

さて、やっと、考査のことを述べるところにこ

れた。ちかいとおきてについては、いわんとするところはすべていいつくしたので、このままにしておく。

英国国旗の構図を知ることがあまりむずかしくはない。いや実のところ、やさしい。しかし、旗を知るだけではじゅうぶんではない。問題はなぜわれわれが旗のことを知る必要があるかということにある。スカウトのちかいに話は戻るが、旗は1つのシンボルである。諸君が英国国旗に敬礼するときには、諸君は1片の旗布に対して敬礼をしているのではない。諸君は国王に対し、国家に対し、英連邦諸国の国民に対して、敬礼しているのである。諸君は自由なる国民として、敬礼をし、諸君が国旗の持つ意義に誇りを持っているからこそ、誇らかに敬礼するのである。これが、国旗儀礼の意義であり、これがわれわれが国旗を持つ理由である。これが、新隊員が国旗についての知識を持ち、それを理解していなければならない理由であり、国旗の歴史を知らなければならない理由である。彼は聖者の物語を知らなければならない理由である。彼は、すでに、これらの物語を知っている。たぶん諸君よりよく知っているかもしれない。われわれは旗の話から勇気を得、過去の出来事から、現代のわれわれに対する1つの手本を得る機会にしよう。新隊員が旗を見るときにはいつでも、このことを考えるように訓練しよう。彼に、旗の正しい開き方に興味を持たせたり、国旗が教会に向かって行進していくときに拳手の礼をする。そのやり方に関心を持たせたりするのは非常にやさしい。たしかに、その意味は重大である。国旗を1片の旗布として、また審査に合格のために、冷淡に見ずてならば、それでは何の役にもたたない。

それから、「傷口を洗って、ほうたいをする」という審査になる。これを真に迫った方法でやるのはたやすいことではない。たとえ、どんなに熱心な班長でも、新しい班員に実演をさせるために、自分の腕に傷をつけることはできるものではないし、まして、この目的のために他の人を傷つけるようなことはしないことを望む。しかし、諸君が知ってのとおり皮肉な運命の神はとんでもない

ことをしてくれる。諸君が班をひきつれてハイクやキャンプにいくと、誰かがかならず何らかの傷をこしらえるものであり、その回数といたら驚くほど多い。だいたいはたいした傷ではないし、また、たいしたことがないように切に望まれるが、これは新しい班員にとってまたとない好機であることはたしかである。しかし、彼に下手にいじくらせてはいけぬ。傷のあらい方と正しい手当法を彼に教え、実際に彼に手当をさせることである。スカウティングに加わった新入りが全員もれなく生きずの手当を経験できるほど、傷はたえないものであり、ギルウェルで皮がはがれたり、すりむいたり、切ったりする傷の数から判断して、これは事実であるし、ギルウェルで傷つく割合は他とくらべられないほど高いとは私には思えない。優秀な班長は、いつも、どんな状況をも見逃がさず、実際的な方法で班員が訓練するようにつとめなければいけない、ということをここで注意しておこう。

ウッドクラフトのサインは簡単である。十字、円、矢印は簡単に覚えられる。私は封筒の裏に鉛筆で書いたり床にチョークで書いたりして、これを教えているのを見たことがある。何とつまらない、味気ない教え方ではないか！ どこに面白さが、冒険があるのか？ どこに感激があるのか？ これは怠け者の班長のやり方である。優秀な班長は、最初から新しい班員を外に連れていき、追跡をさせる。新しい班員に自分でサインの使い方とそれぞれの意味をきめさせて、追跡をさせなさい。彼があやまちをおかしたときに、班長は彼のあやまちを正してやり、新しい班員がどうやら覚えこんだときやわかったときには、今度は立場を変えて、班長が追跡をするようにする。これは30分あればゆうにできるし、面白いし、戸外で、冒険があり、自分でやってみることができる——これがスカウティングである。われわれはこういうスカウティングをやるように、スカウティングをするのであって、スカウティングの遊びをしないように心がけよう。

初級審査の次の項目は結索の部門である。これもまた実際にすることである。諸君が結索はほうた

いの両端を結ぶのに使うといったなら、そのときには、ほうたいを使いなさい。諸君の新しい班員が包をしぼるのに使えるといったのなら、彼に包をしぼらせるようにして、ほうたいはやらすにおきなさい。彼に使い方をおしやせ、彼がどのように結ぶかを観察しなさい。初級の結索をほんとうに理解しているかを観察しなさい。そのために、結ばせてからそれをほどかせなさい。諸君がむずかしい姿勢や、悪い条件の下で結索の練習をするのはよい。拳闘のグローブをはめて結索をしたり、水に手をつっこんだまましたり、手が油でぬるぬるしているとき、ロープがぬれているとき、また、暗闇でやってみなさい。木の高いところのぼって片手でぶらさがりながら、片手で結んだりしなさい。しかし、諸君の新入りの班員にはこんなことをさせてはいけぬ。これは諸君がやったり、諸君の班の新入り以外の者にやらせるべきことである。

丸太から立上がりなさい！ そんなところに腰を下して、2本の紐を結びあわせているのが結索ではない。結索とは、われわれがキャンプや、ハイクや、橋をつくるために、舟にのっけながらやるものである。——われわれが隊ルームでやるものではない。われわれが新入りの班員を隊長の審査をうけさせるために送りだすのは、彼がかなりむずかしい審査に合格できる、すなわち、障害の下で結索ができるとか、いくとおりかの方法で結索ができると諸君が自信を持ってたときにすべきである。

しかしながら、結索はこれですべてではない。文章の末尾に短かく次のように書いてある。「ロープの端をとめる」班長の何人が満足に索端どめができるか、私は疑わしいと思う。上手に索端どめをするのはかなりむずかしい作業である。むずかしいからこそ、われわれは上手に索端をとめられるように真剣な努力をしなければいけない。私が班長であれば、私は2つのことを教えるつもりである。すなわち、編みロープ (Braided Rope) には簡単な索端どめ、より編みロープ (Laid Rope) にはセイルメイカースの索端どめをする。何？ 審査課目に追加するのかって！ そう、も

ろん、われわれはわれわれの班に誇りを持っているのではないのか？ 審査は審査、それは1つの指針である。われわれはそれをのりこえていかななくてはいけない。審査がおわったからといってそこで休んではいけない。われわれは前進をつづけ、各問題をもう少し掘りさげて勉強しなくてはならない。

スカウト杖の使用、これが審査にないことは私は知っている。しかし、杖はスカウティングに欠かせないし、スカウトはその使い方を学ばなければいけない。私が隊長をしていたときには、何百という使い方を耳にしたものであった。その中には、あまり実用的でないのもあった——「隊長、これは縄をたたくために使うんですか」——しかし、なかにはすばらしい名案もあった。次にあげる例は新入りに教えてはいけぬことである。諸君は「これはスカウト杖である、諸君はこれを狂犬を追払うのに使いなさい」なんていってはいけぬ。新入りにこれを与えるときに、こういってらよい。「ところで、これはどのくらい使い道があるか調べてみよう。さあでかけて、どんな具合かやってみよう」。諸君の新入りの班員が、いくらか、スカウトらしくなっておれば、彼はすぐに、溝をとびだしたり、門をとび越えたり、何百という使い道から、何かにそれを使うことであろう。彼が使い方を考えだしたら、そのたびに、諸君が他の使い道を見せるようにしなさい。これが賢明なやり方であり、座って使い方の話ばかりしたり、諸君の博識を披露するのではいけない。彼に考えさせるようにしなさい。それは彼のためにも、諸君のためにもなるし、そのことがどのくらい班のためになるか、新入りからどんなにたくさんすばらしいアイディアがでるか、諸君が驚くほどである。これらのアイディアはスタンツとかキャンプとかで、班の役に立とうし、隊の他の班との競争に生かすようにすれば、大した成績があげられる。諸君は、班員のすべてが、何かの特技を持っているものと考えなければいけない。彼は学んだり、教わったりするために、班にいるのではない。彼は班に貢献するためにいるのである。われわれの話はギャングのことに戻るが、班は一致協

力体である。初級考査には考えなければならないことがたくさんあることが、諸君にわかってもらえたと思う。資格をみると一見かんたんにように見えるが、また、やさしくするところに意味がある。おわりに、創設者B-Pの言を引用しよう「これは、彼が彼の役職に価するかどうかを計るための簡単な考査である」。われわれも、それは簡単であることに同意する。しかし、それは考査であることをしっかり覚えておこう。われわれの新しい班員がこのことを理解するように、言葉づらだけでなく実際にそのことを理解するようにさせよう。彼が考査に合格したときに、彼が自分のなしとげたことが実感できるように、また、彼が彼の役職に価する、ことを心ひそかに自慢できるように、させたいものである。

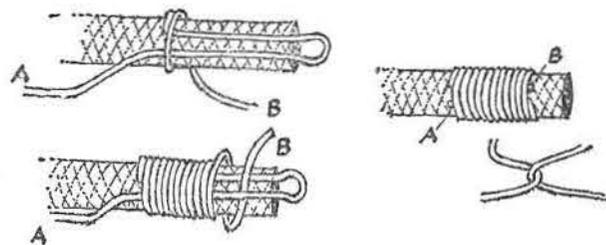
「班長の手引を読んで」

故 中村 知

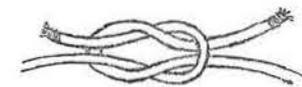
ここに「初級」と翻訳してあるのはテンダーフット（見習または仮入隊）の誤訳だろう。初級と

いうと、日本では、すでに、ちかいをたてていて、これから2級になる教育過程にいる者である。だからここでいうのは見習または仮入隊者のことである。

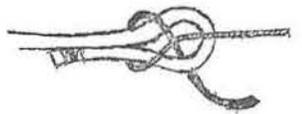
- 班長は、見習の教育をすること。
- 初級課目は基本となる大事な課程であるから、班長がする。
- たのしくやらせること。
- 自信をもたすこと。
- ちかい、おきての教え方をしっかりやる。
- カブから上進するものと、そうでない者とを区別しなさい。
- 国旗、救急、結索などは室内でするものではない
- 索端止めを君はできるか？
- 考査は考査である。考査課目以上のことをしてはいけないではありません。たとえば——
スタッフ(杖)は考査課目にはないでしょう？
また、各スカウトは、それぞれ自分の特技をもたねばならないから、一定の規格にするような考査の仕方は問題だ。
- 班は、特技をもった各人の一致協力体です。
(each for all, all for each)
と、親切に教示している。



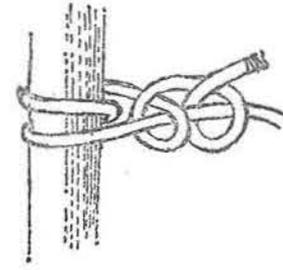
ロープの端がはつれるのを防ぐには、そこをとめなければいけない。糸を輪にしてロープにそえる。糸の長いほう(B)をロープの端から1/4インチのところまでぐるぐると巻く。きれいに並べて固く巻く。(B)を輪に通して(A)を引いてしめる——引き抜いてはとけてしまう。これで(B)が巻いた糸の下に入る(半分くらいまで入れるのがよいだろう)。余った糸をきれいに切る。



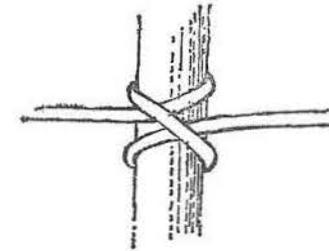
1. 本結び 小荷物をくくる時のように、ゆるみなく二つのロープを結び合わせるのに使う。平らに結べるので救急作業に使う。抜けないで解きやすい点で最もすぐれた簡単な結び方だ。



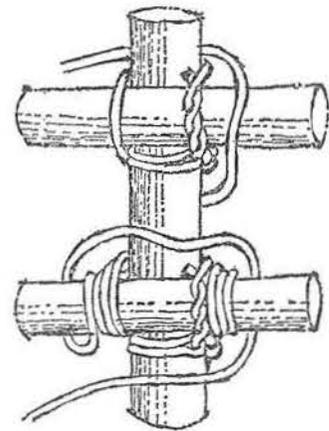
2. ひとえつき コンモンベンドともいって、同じ太さ、または太さのちがうロープを結び合わせるのに使う。一方のロープで輪をつくり他のロープの端を輪に通し、輪の外をひと回りさせてから、そのロープの下をくぐらせ首を出させる。



3. ひと結び ロープの端でロープの元を巻き、内側から出して作る。端を反対に引いて輪にすれば簡単にゆるむ。ロープを丸材に結ぶときは丸材をさらに一まきしてひと結びを二つにする。



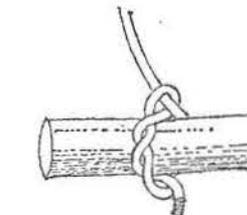
6. 巻き結び ロープを丸材に結ぶのに使う。どちらの端を引いても抜けないし、横にも下にもすべらない。



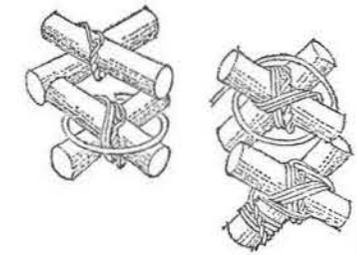
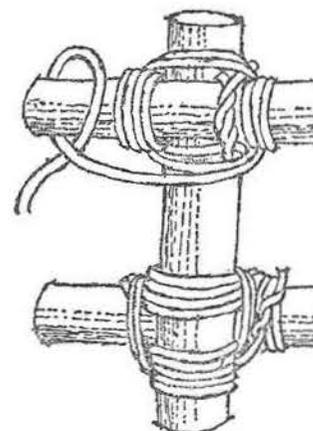
角しばり まず水平の材の下に巻き結びをする。そして図のように回す。回すごとによくしめる。巻く綱が交差しないようにきれいに並べて巻く。数回巻き終わったら、締め綱を、今までのと直角にかける。これもきつく締めなければいけない。最後に手近な丸材に、いま締めたと直角に巻き結びをしてとめる。ゆっくり作業して、しっかり縛る。



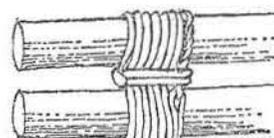
4. ちぢめ結び ロープの長さを縮めるのに使う。図のように縮める部分をまとめる。そして両端にひと結びをする。



7. ねじ結び 丸材、丸太などにロープの端を結びつけるのに使う。



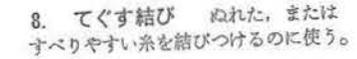
筋かいしばり まず両方の材にねじ結びをする。またに綱を回して巻く。締め。最後に巻き結びをする。



はさみしばり 1本の材に巻き結びをする。それから2本いっしょに巻く。締め。最後にどちらかに巻き結びをする。



5. もやい結び 人の体に巻きつけ、建物の上からおろす時などに使う解けない輪。輪を作り、そのもとに小さい輪を作る。大きな輪の端をこの輪に通し、ロープを回して、またこの輪に通す。



8. てぐす結び ぬれた、またはすべりやすい糸を結びつけるのに使う。

班長の手引

—THE PATROL LEADERS' HANDBOOK—

ジョン・サーマン

今回、班制教育のよりいっそうの発展を願って、ジョン・サーマン氏著「班長の手引」を再掲載する。初版は1950年に出版され、これは1955年版の訳稿である。これが掲載されてからすでに18年の年月が経過しているが、指導者諸氏が熟読され、じゅうぶん咀嚼して実り多き班制を実現されるよう希望する。

《第10章》班と2級スカウト

この章を書きはじめるときに、なんということなしに、私はP. O. R. (規約)を開き、第246条にふと目をとめた。それは次のとおりである。「初級スカウトとして入隊した後、彼は2級スカウトの資格をとり、それから1級スカウトの資格をとる」私は言葉につまった。「ワッハッハ！ たいへんおかしい！」なぜかって？ その理由は、私は多くのスカウトを知っているが、その多くはこの規約どおりに進歩していないからである。2級までは、期待どおりとまではいかないが、まあまあうまくいっている。しかし、1級スカウトになる者がどのくらいいるか、諸君は知っているか？ おどろくなかれ1隊に1人強である。なんとみじめな成績ではないか、1隊に5、6人の1級スカウトがいたら、どんなに見ごたえがあることか？

それでも、これは戦前よりいいのであるから、諸君は安心してよい。戦前は、1隊あたりの1級スカウトの割合が3/4人であった。——1人に満たないのであったから、居心地が悪かったことであろう。

スカウティング・フォア・ボーイズで、B-Pはいった。

「この間に、諸君は多くのことの初歩を習う」。ここに、2級スカウトと1級スカウトの全容への

手がかりがある。2級スカウト記章のどの一細目も1級スカウトになるための一段階である。2級スカウトのあいだは、諸君は何事にも完成していない。実際2級は記章ではなく、それは、1級に到達するための道標にすぎない。私は諸君が2級章を道標以上のものに考えないことを望む。

諸君の班は、全班員が1年ぐらいスカウトを続けているなら、全員が2級になっていなければいけない。もし、そうでなければ、班長の諸君に欠陥があるといえる。たしかに、こういうふうには物事を見なければいけない。班には、少しの責任もない。責任は諸君にある。(もちろん、諸君は1級になるつもりであろう。1級になっているかな？ 1級にならなくとも、班長としてやっていると考えているか？ 私は班長になったらすぐ1級になれといっているのではない。しかし、班長になったら、6か月以内には1級になりたいものである)

諸君は大きな屋敷を訪れ、家主に屋敷内を案内された経験があるか？ 家主は、おそらく、いろいろなへやの扉(とびら)を開いて、「これが居間です—これが食堂です—これが玉突場です—これが温室です」と教えてくれるが、へやの中をよく見て回る時間はない。諸君は、ただ、家の間取りと通路がわかるだけである。諸君は家の中に招かれ、時間をかけてゆっくり見てまわるときがや

がてこよう。今日では、大きな家は残り少なくなった。もしかすると、諸君は大きな家を見る機会がなかったかもしれない。しかし、諸君はキャンプには行ったであろう。諸君が第一にすべきことは見て回ることである。あそこにある茂みはなんであるか？ あれはなんの木であるか？ 丘の頂上からの見晴しはどうか？ 海が見えるのではないのか？ 川にはどんな魚がいるか？ あのリンゴの木は塀(へい)の向こうまであるのか？ いつでもキャンプに行くと、私はまず第一に、大急ぎで、その場所を一巡し、上に書いたようなことを考えながら、大ざっぱに状況を把握する。通り道に面したところ以外のことは、よくわからないかもしれないが、どういうことを探索したらいいのかはわかる。これは、ちょうど、2級章のようなものである。2級では、スカウティングでどういうことを探索するかを教える。この段階では、くわしく学ぶ時間がない。それに、われわれの経験および技能は未熟であるから、たいしたことをやることはできない。

課目の表題をみてみよう。基本・健康・観察・開拓・信号・探検・公共奉仕——7つあるが、この7項目がたくさんの細目にわかれている。探検すべき事柄、発見すべき事柄、習得すべき事柄、練習すべき事柄、これらはいずれも門口にすぎない。ほんの少ししか、中に立ち入らないへやがあるかと思えば、奥までは入り込むへやもある。しかし、いずれのへやの探検も1級スカウトになって、はじめて完成するようになっている。

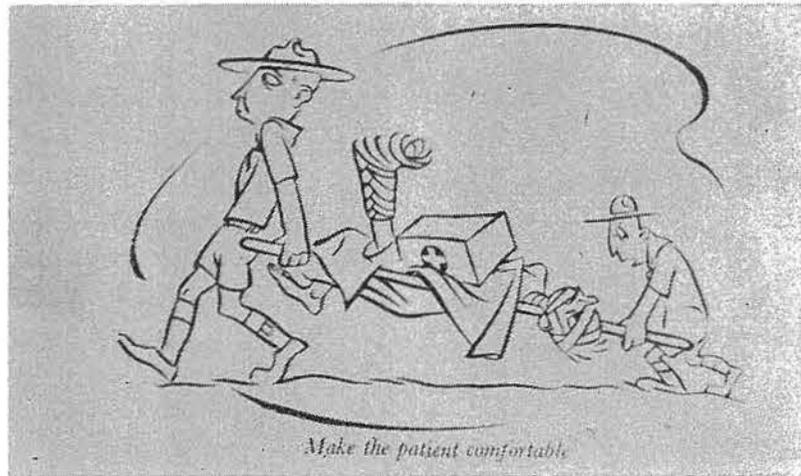
最初の考査は、ちょっと、おどろかされる。「初級の考査に再合格できること」もちろん、われわれはそれに合格できるし、それを習得している。しかし、ちょっと待って、できるかどうか反省してみなさい。全員ができるであろうか？ この間のリレー競走で、3番スカウトはもやい結びがうまくできなかったのではないか、また5番スカウトは追跡で横道にそれたし、諸君自身にしても、この前の隊集会の終りにスカウトのおきてを朗唱したとき、とちったではないか？ たぶん、反省すべき点はいくつかあろう。おそらく、われわれの初級考査はもう一度点検してみる必要があろう。

——今だけではない。だいたい毎月するようにしたい。毎回、すこしずつやれば、たいして時間をとらない。諸君の班が、私の知っている何百という班と同じようにだらしがないなら、初級考査を改めることが必要になる。私はクイーンズ・スカウトが、上級の考査より、初級考査に欠けていることをよく発見する。真のスカウトはこのことをよく心にとめておくべきである。特に、「簡単なことが、人間の価値をきめる」ことを。

さて、健康という細目はどうであろうか？ これは病傷というわれわれすべてに関係の深い問題である。きり傷、かすり傷、ねんざ、打ち傷、鼻血、刺し傷、かみ傷、やけど、日やけ、どれもこれも、まったく不愉快なことである。しかし、これらの傷の手当を知っていれば、かなり不愉快さをまぬがれることができる。考査で求められていないが、私がここで強調したいことは——スカウティングでもっとも重要視するのは諸君が健康なことである、諸君の班は健康な班でなければならない。そのためには諸君の班員がスカウティング・フォア・ボーイズに書かれているとおりに健康の規則を、個人としても、班全体としても、励行することである。諸君は正しく呼吸をし、正しく身体を洗うことを守ることである。中にはB-Pのやり方は今ははやらないといって、冷笑するものがあることを私は知っているが、私はその正しさを信じている！ 一つのことが今ははやらないからという理由では、それが時代おくれということにはならない。B-Pの簡単なやり方は、いまでも、なかなか的をえていることは事実である。何千もの人が注視しているときに、この方法は見ばえのするものではないが、これは人に見せるやり方ではない。たしかに、このやり方には見せもの的な要素は、まったくない。われわれは、これを、アルバート体育館でやろうというのではない。これは諸君が寝床から起きたときにする方法である。おそらく、寝床から起きたときにはたいしたひまやたいした広さはないであろうが、このくらしいのことにする余裕はあろう。諸君の班員がこのことを理解するようにすること、および、諸君がこれを実行していることを班員に知らすこと

は、班長のつとめである。

病傷について、応急手当を扱う本はたくさんあるし隊長たちは、班員にたいしてたびたび応急手当を施しているから、だれよりも応急手当に熟練してるにちがいない。しかし、実際にすることである。応急手当の機会があるたびに、自分からやるように、またそれを要領よくやるようにさせなさい。班員が互いに応急手当を、隊ルームの中だけでなく、どんなところでも、どんな状況においても、施すようにしなさい。事故は、よい条件の下では、起こらない。腕かけいすに心地よく座っている人が足をくじくことはあまりない。私にしても、いすに腰かけている間に足をくじいたという人は、たった一人しか知らない。それは、もっとも危険なスポーツはなんであるかを皆が話し合っていたときに聞いた話である。いろいろな説がでて、ラグビーがいちばん危険であるという者、クリケットだという者、登山だという者、議論は果てしなかったが、中に一人すみの方で、黙って口をつぐんでいる人がいた。皆、この人に注目して「いちばん危険なゲームはなんであると思うか」とたずねた。彼はしばらく考えていたが、おもむろに口を開いた。「あなた方は信じないと思うが、私はチェスだと思ふね」「チェスだって！」皆が叫んだ、「いったい、なんということをいうんだい」彼はそれに答えた。「私はあなた方のおっしゃることはひととおりのやりました。ラグビーもやりました、クリケットもした、山にだって登った。しか



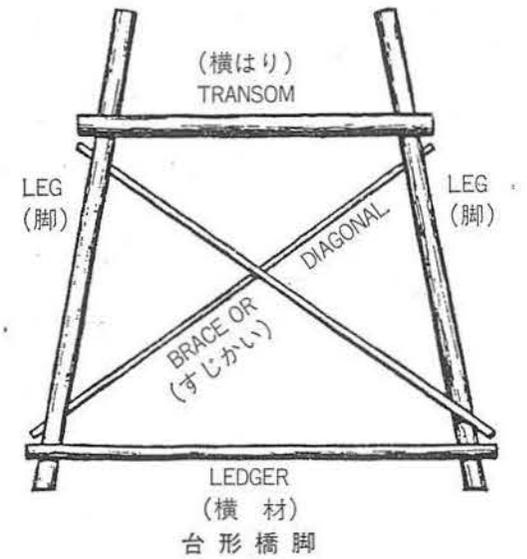
患者を楽に……

し、私が事故を起こしたのは、チェスでしかない。お話ししますとね、私の相手が、あんまり駒を動かさないで、私の足はしびれを切らしてしまつたのですよ。やっと私の番になって動かしたんですが、つい足に力が入りすぎて、足を折つたというわけです。それも、まったく、ひどくいためつけました」諸君がこんな災難にはあうとは思わないがほんとのことである。

患者を楽にしてやる。やさしい言葉、頭の下に枕をあててやることは、とてもよいことである。何年か前に私は救急の競技で審判をした。スカウトたちの包帯の仕方は、たいへん、うまかったが、彼らには一点も与える気にはならなかった。彼らは、患者をアリの塔の上に、頭を巢に向け、顔が日に当たるようにねかせた。次長は水を捜しにでかけて、なかなか帰ってこないし、帰ってくると患者に水をかけていたし、初級スカウトは患者の手をふんづけるし、班が患者の手当を終わったときには、かわいそうに、その少年はほんとうに手当が必要な状態になってしまった！ 重い傷は医者にかかせなさい。われわれの問題は看護することである。

B-P は、観察する習慣を身につけなければ、一人前のスカウトとはいえない、といったが、観察のいきとどかない少年がたくさんいる。偉大なスカウトといわれる人は、みな、よく観察をする人たちであった。観察は、たいへん、おもしろいことである。2級のキムス・ゲームは次のようになっている。「異なる24種類の品のうちから16種を見分ける」か、あるいはその代わりに、30種のウッドクラフト・サインをつけた半マイルの道を25分以内で追跡をする。われわれの班は、両方をやることにしよう。もちろん、もんくなく、さんせいしてくれるであろう。われわれが両方をやるという理由は、両方と

も、それだけの価値があり、両方とも、おもしろいからである。われわれは、観察に徹しなければいけない。たとえば、私が諸君の前にマッチ箱を置き、それを片づけたあとで、諸君になにを見たかと聞いたとしよう。もし諸君が「マッチ箱です」と答えたら、それは正しいにはちがいないが、もし諸君がほんとに観察したのであるなら答えはちがってこよう。それは、白鳥印の蠟マッチの箱で、半分ぐらい使っており、外装はかなりくたびれており、ラベルの白鳥は北東をさしているという答えがでよう。まったく同じマッチの箱であるのに、このように2つのちがった見方ができるのである。このことは、キムス・ゲームに使われる品についても、あてはめられることである。ことこまかに観察する習慣をつけなさい。観察は諸君がユニフォームで、全員そろっているときにも、ユニフォームをぬいで一人であるときにも練習できる。班集会の行われる晩に、バッジを1つ付けていないとか、ガーターの房を見えないようにしていくとか、ベルトを左右逆にしめていくとか、ちょっと変わった身なりで出席して、だれかがそれに気づくかどうか試してみなさい。それから、他の班員にかわるがわる同じことをやらせて諸君が気がつくかどうか試してみなさい。これはみなキムス・ゲームであり、そのやり方は際限がないほどある。ハイグにでかけ、男の人を追い越したら、その人がどんなネクタイをしていたか、髪はなに色であったか聞いてみなさい。 magari 角を回ったときには、班員に、いま通りすぎた最後の木はなんであったか、出発してから何人の警察官に出会ったかを、聞いてみなさい。道路を歩きながら、このようなことをやるのは、とても興味がある。しかし、ぼんやりと歩くのでは、どんなことにも、目がとまらないし、なんの価値もない。諸君の目を大きく開いて、諸君の感覚を働かせなさい。全班員が、どんなことも見のがさないように、注意深くさせなさい。月桂樹の生垣にこっそり身をひそめていたのを諸君が見た男が、近くの家に住む老婦人を殺したというようなことが起こったら、諸君はその人相・風体をこまかく、しかも、正確に写実することができるか？ こん



なことは起こりはしないって？ それで、起こることがある。

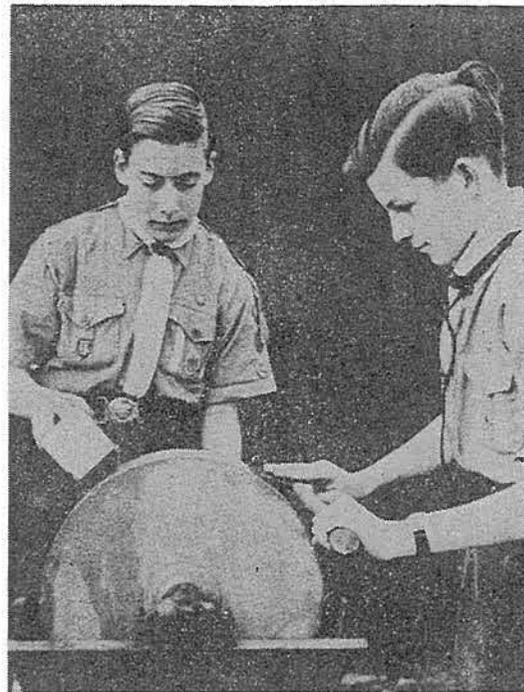
ところで、追跡はどうか？ われわれは矢印・円印・十字印を覚えてしまっている。今では、それらの印はもっと小さく、不鮮明につけられている。しばった草、折った小枝、道ばたに組み合わせた小石、ニレの木に目だつようにかぶせた樫の葉、たいていの人のはうっかり見落としてしまうような小さな目印であるが、諸君にはわかる。一それとも、わからないかな？一諸君が訓練を受けていなければ、それらを見落としてしまうかもしれないが、追跡の仕方を習ってさえいけば、それらを見すぐすことはない。この世の中に、困難な追跡をやることほどおもしろいことはほとんどない。諸君の仲間が目の前にある目印を見落としてしまうとしても、訓練された者の目はそれを見つけてことができるし、訓練されたスカウトは、この本の頁の文字を読むように、はっきりと追跡符号を読みとることができる。

開拓の細目では、諸君が学ばなければならない結索法がまだある。それは使い道の広いティンバーヒッチとフィッシャーマンという2つの結索法である。ティンバーヒッチはどんなことにでも使えるたいした結索である。迅速に結べるし、堅固である。これは、諸君が綱をしめればしめるほど、がっちりするという点で特にすぐれた結索であ

り、2本の柱がゆるむことはない。こういう特長のある結索はあまり例がない。

「角しばりとすじかいしばりを用いて、スカウト杖で台形橋脚をつくる」私はここに台形橋脚を图示したが、これは、あまりにもへたくそなのをよく見かけるからである。しばるときには、競争をしないことである。その理由は、1巻きごとに力を入れてしめることが必要であるからであり、そのためには、じゅうぶん時間をかけてしめる以外に方法はない。しばることは、これくらい力を入れる必要があり、これほど重要なものであるから、われわれはそれがうまくできるように念を入れるべきである。班のまとまりをテストするのに、班全体で1つの台形橋脚を作らせてみるのは、よい方法である。一人で台形橋脚を作るのは、あんがいたやすいが、6人がかりでやってみると、なかなかうまくいかないものである。

次に、手斧とナイフのことにふれよう。なんと多くのスカウトが自分の足や仲間の足を手斧で傷つけることか？ ごく最近、私はギルウェルの手助けをしてくれる医者の一人と話をしているうちに、彼はこんなことをいった。「ギルウェルはとてもよいところなので私はここへ来るのが楽しい。しかし、私はよく少年たちは道路のあなうめよりも、自分の足を傷つける方がうまいのではないかと思うことがある」もちろん、彼のじょうだんではあるが、私は大いに考えさせられた。私自身、どうして、こんなに多くのスカウトが自分の足に手斧をぶちこむのかと首をかしげることがある。彼らは手斧の振りおろし方が悪いのであろうか。それともどんなことになるかやってみたくてやるのであろうか？ そんなことであるはずはない。きっと、彼らが手斧の使い方を知らないのが原因である。これは、諸君にはがてんのかないことかもしれないが、私は彼らが手斧をときすましておかないことが原因であると信ずる。刃の丸くなった手斧は鋭い刃の手斧よりはるかに危険である。刃が丸くなると手斧はねらいをつけた木をすべり、その振りおろした斧の先はどこへ行くのかわからないから始末がわるい。たしかに刃は鈍いが、諸君の足に打ちこむにはじゅうぶんな鋭さ



諸君の手斧を友だちのように大切に

はある。スカウトには、運動靴とか、素足のままで、手斧を使わせないようにしなさい。皮靴とストッキングをはくことが、こういうときの正しい身なりである。これは、わずかではあるが、保身になるし、また、それ以上に重要なことは自信を与える。

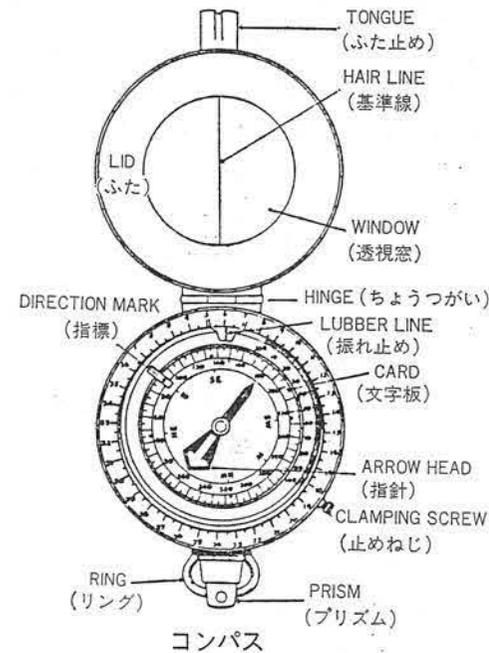
手斧のとき方は、写真で見せるとおりであるが、あまりとぐことに時間をかけてはいけない。手斧は、使うたびによく拭いて、油をつけ頭にはマスクをつける。諸君の手斧を友だちのようにたいせつにしなさい。道具であるからといっていいかげんに扱わないようにしなさい。

スカウトにとって、もっとも重要なナイフは、刃のしっかりしたもので、折りたたみ式のものであると私は信ずる。しかし、もし諸君が狩猟のできる農山村に住むのであれば、狩人用のナイフがよい。刃の背の厚いナイフは動物の皮をはぐためによいのであって、キャンプの日常の仕事にはあまり役に立たない。いずれにせよ、どのような種類のナイフを持っていても、きれいにしておくこと、といっておくこと、もし折りたたみナイフであれば接ぎ目に油をきらさないことに心がけなさい。

信号を覚える方法はただ一つ、一生懸命に努力することである。練習、練習につぐ練習である。諸君が相手の声が聞こえる距離でばかり練習するとしたら、信号は習得できない。諸君は、可聴範囲外にでて、お互いを理解させる方法は信号しかないというふうにするべきである。このような方法でやれば、諸君はかなり早く習熟するであろう。とくに、諸君は弁当を食べたいのに、相手方が諸君の弁当を持っている場合は、なおさらである！

機会あるごとに、諸君の信号を使うことを忘れないことである。

探険の細目には「コンパスの16方位を知れ」とあるが、どうして、そこでやめてしまうのか？



32方位を覚えるには2倍の時間がかかるだけであり、しかも、その利用度はずっと大きい。諸君は、隊ルームで、実際の方角を学ぶことができるが、部屋の中ではコンパスはたいして意味をなさない。しかし、戸外へでれば、その意味は大いにある。われわれが読図をする段階にいたったときは、コンパスに習熟しているのと、いないのでは、大きなちがいがおこる。諸君の班員をコンパスを使わなければならないような場所に連れてい

ったり、方位をたよりに家へ帰らせたり、あるいは、一日か半日、まったく見ず知らずの地方で目的地を探させるようにさせなさい。

「マッチ2本と自然の燃木を使って、戸外で火を起こす。この火を使って、2人分のオートミールとねじりパンまたはダンパーを料理する」

これはやさしい考査である。諸君には2本のマッチ——そのうちの1本は節約できることを私は望む——が与えられている。しかし、火起こしを諸君はどのように班員にやらせるつもりか、諸君は陽気のよい日が来るのを待って、燃木が乾燥して、またたく間に燃えつくようなときにそれをするつもりか。それとも、諸君の班員が風の吹く雨模様の天候の日に、いくぶんしめり気をおびたマッチを使って、丘の斜面で、火が起こせるかどうかを調べるつもりか？ 雨のふっている、いとわしい日にこそ、諸君はほんとに火がほしいと思うものである。なにを使って、諸君は火を起こすつもりか？ 薪、そのとおりである。しかし、なんの木がよいか？ かれていればどんな木でもかまわないか、それとも、もっとも適当な燃木はなんであるか知っているか？ 諸君は堅い木と柔らかい木との見分け方を知っているか？ 諸君は、夏ないし冬に木からおちた枝を見て、その識別をすることができるか？ そう、諸君ははっきり識別できなければいけない。諸君はもっとも燃えやすい木、もっとも燃えにくい木を知っているか？ 悪い薪とはどういうものか？ 最上の薪で火を起こす方法を知ることはいいが、同時に、たまたまそこにある材料で火が起こせることも必要である。山道をたどったり、キャンプをしているときには、いつでも薪を選択して拾いあつめられるとはかぎらない。スカウトはトネリコの木を所望するのが常であるが、いつもトネリコが得られるとは限らない。別の頁でいろいろな木の燃え具合を表で示すつもりであるので、見てほしい。これは、大まかな手引にすぎない。それは正確とはいえないが、だいたい大過はないつもりである。

火を起こして、炊事をしないというのはおかしい。オートミールを作ると、それらしきものはできるが、スコットランド出の者には、どうも、い

ただけの代物ではない。大部分が、うすいねばねばしたものになり、その香りといったら、燃え木の香りがしみこんでいる。諸君の班はオートミールは形のしっかりしたものを作ってほしい。ねじりパンやダンバーは、作りさえ正しければ、うまくできる。粉をよくかきまぜることと、くしに使う棒はなにを使うか知っておくことである。イチイとニワトコの木は、とてもいやな臭いがするから、使わないことである。あまり早く火にかけたり、粉をあまりやわらかくこねないことも必要である。いちばんおいしいのは、諸君がねじりパンを作ったときには、できたてのねじりパンにバターをつけることである。どんなパン屋のパンにも負けないおいしい味がする。水をわざわざ家から持って行くのか？ 粉だけ持って水は途中で手に入ればじゅうぶんである。

それでは、公共奉仕について——道路交通法を知りそれを実行しなさい。これは班の名誉に関係のある問題ではないか？ われわれは道路交通法を守り、他の人にも同じようにこれを守るようにさせなければいけない。私があえて諸君にいうまでもないことではあるが、戦時中の統計より、現在は、路上での死傷者が多い。これらの人々は公德心が欠けていたがために、あるいは死に、あるいは不具になるのである。これは、スカウトが2級の訓練を通して学びえたことにより、生きた手本を示すことのできることである。

おわりに、われわれはこの章の最後に至ったが、われわれはここで終るのではないことを忘れないことである。2級はわれわれが1級章にとり組む前に、息をつくためにひと休みする場所である。さあ、元気をだして次の章へと急ごう。1級はまだかである。

『班長の手引』を読んで

故中村 知

この「2級」という翻訳は「初級」とすべきだ

ろう。すなわち、これから2級に進級する者について、班として、どういう教育をするか、それを述べている。

この章で、サーマンは、P.O.R. (規約) の246条を引用して、「初級の者は進んで2級となり、1級になるべきもの」——とあるのに、1級になった者が、たいへん、少ない。これはなんたることか、と、ボエンをやっている。1つの隊に、せいぜい平均、1人強しか1級がいない——と、統計上から叫んでいる。

○2級で班長になった人は、少なくとも6か月以内に1級になりなさい。

○2級という段階は「探求」ということを教える段階である。(探求——explore)

○初級課目の再考査を毎月すること。

英国の規約には「再考査」というものが、どの項にもある。いったんパスしたら、もう、それでよいのだ。考査は一度パスすれば……という考え方の多い日本の教育思想と根本的にちがうのである。すなわち、正札どおりということを強調する。「いつも正札どおり」それが「そなえよ、つねに」ということである。

考査がすんだら、アトはみな忘れてしまう——正札をはずしてしまうのではスカウトではない、ということ。正札どおりだから信頼される。それがスカウトの名誉——という思想である。私は日連の総裁石坂泰三先生の座右銘が「正札どおり」である、と、聞いてこれなるかな、と、思う。

○2級は観察ということに重点をおいている。

ここで著者は巧妙な実例をあげている。

○観察力の養成は追跡から……。追跡サインは、よほど注意を払わないと発見できないように、設けよ、と。

私は、ここでも米国のやり方との相違点をのべておきたい。それは1例なのかも知れないが、米国のあるリーダーは、私に、日本のリーダーは不親切だ。なぜ矢じるし(進路サイン)を、チョークで大きく書いてやらないのか？ いじわるだ！

もし、サインを見落として進路をあやまったら、君はどうする？ 君の責任ですぞ、と、私を

叱り、長さ1メートル大の矢じるしを、彼はチョークで白々とつけた。アメリカは国土が大きいから、もし迷ったら、一生うちに帰れないのだろうと、私は、感心(?)したことがある。米国式は、英国式と、こんな点でもちがうのだろうか？

○開拓(パイオニアリング)と縛材。

縛材では結索競争のような競争をやらせてはいけない。

これは、たいへん、よい注意だと思う。縛材は、時間をかけて慎重に、堅固にしないと構築物に弱点を作り、人命の危険を伴うからである。さすがは建設技師出身のサーマン先生の言である。

○斧、ナイフについて。

刃の丸い斧のほうが、刃の鋭い斧よりも危険である。

この注意も、なかなか、みごと。

○信号は、音のきこえないほどの遠い距離で練習しなさい。コトバでいえるような近距離でやるとは、ほんとうの役にたたない。

○考査の出題には16方位——とあるが、16方位以

上を教えるてはいけないではありません。16方位で満足しないで32方位教えてよろしい。

○地図読みは、コンパスを、かならず図上にセットして練習すること。これは、コンパスハイクをくりかえし、くりかえし、行うことによって、習熟します。

○火の作り方。これは、いろいろちがった気象、天候下で練習しなさい。

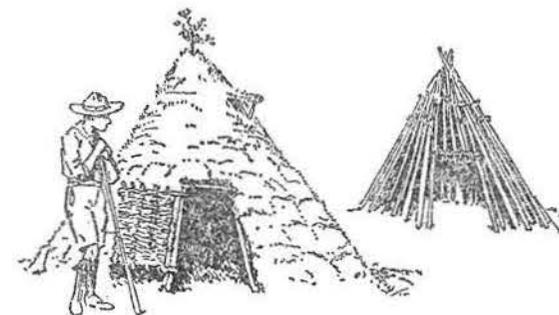
以上で、この章は終わっている。

これらの注意は、すべて、まことに実際的である。懇切である。どの隊長も、こう、あらねばならぬと、班長を教えているはずである。

もし、そうであるならば、わざわざギルウェルパークの所長が、多忙な時間をさいてこの「班長の手引」を書く必要はないはず——

サーマン所長が、このように、ていねい、親切に班長に教えねばならないほど、隊長たちは無力なのだろうか？

そうは、思いたくない。氏が班長を愛すればこそ——と考えたい。



班用の小屋は、細い木を築めて立て、その骨組に芝をかぶせて作ることができる。

班長の手引

—THE PATROL LEADERS' HANDBOOK—

ジョン・サーマン

今回、班制教育のよりいっそうの発展を願って、ジョン・サーマン氏著「班長の手引」を再掲載する。初版は1950年に出版され、これは1955年版の訳稿である。これが掲載されてからすでに18年の年月が経過しているが、指導者諸氏が熟読され、じゅうぶん胆嚙して実り多き班制を実現されるよう希望する。

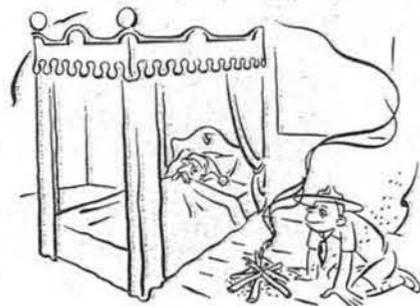
《第11章》 班と1級スカウト—1

B-Pはいった。「2級スカウトは、いつまでも、2級スカウトでいたいとは思わないものである。だから諸君は、1級スカウト章を得ることになろう」と。B-Pがいたり、書いたりしたことは数限りなく多いが、そのなかで、まったく的はずれといえるものはほとんどない。しかし、上にあげた引用文に限り、どうも正しいとはいえないようである。私は、前の章でわが国の1級スカウトの数が比較的少ないことを——わずかに、1隊につき1名強であることを——述べた。

私が、やがてB-Pの言葉が正しいといわれるようになってほしいと望む。すでに、その言葉の一部は正しいものになっている。その一部とは「2級スカウトは2級スカウトでいたいとは思わない」ということである。しかし「思わない」と「実行する」との間にはへだたりがある。このへだたりはスカウトが行うことになっている仕事量からなり立っているので、希望が実現するか、それとも、ただの夢に終わってしまうかは、努力の有無にかかっている。

私が隊長をしていた時代には、1級章をとることは、ほとんどすべての考査が、1人の特定の考査員によって行われるきまりになっていたために、また、地区が考査員をじゅうぶんもって

なかったために、なかなかの問題であった。ときには、考査員が死んだのに、だれもわれわれにそのことを教えてくれなかったり、考査員が年をとって、耳が遠くなったり、いつでも考査の日取りをきめるのに苦労したものである。これは、すべて昔話になった。というのは、連盟本部はこの種の手配に障害があることに目をつけ、戦時中に改正を行ったので、今では、1級旅行を除き、1級章の考査はすべて隊長が行えるようになったからである。諸君は、なんの苦もなく、隊長と連絡がとれるであろうから、考査を受けることになんの支障もない。しかし、ここでたいせつなのは、諸君自身の隊長が諸君の考査に当たるのであるから、考査の基準は昔の制度下での基準より、もっ



ときには考査員が死んだのもしらずに

と高くおくように、われわれが期待していることである。

考査課目の個々を扱う前に、私は諸君が1級章に対する制度について考えを持つように望みたい。

この本では模範ということをたびたびいつてきたが、ここでも、そのことを繰り返したい。諸君の班員が1級スカウトになるように勇気づけるもっとやさしい、もっとも分別のあるやり方は、諸君自身が1級章を着用する資格を得ることである。諸君が、諸君の班員に果たすことを求めていることを、諸君がそのとおりにやれることを身をもって示さないかぎり、いくらお説教をしても、強制をしても班員にはききめがない。

1級章に対して、どのような態度をとるべきであるか？ あたかもそれを取得することはなにか異例の、非常にまれなことであるかのごとく、際立った業績のように1級章を見なすのは、まちがっている。この態度は、もちろん、諸君の班の平班員に、諸君が1級であるなら、それはとりもなおさず諸君が非常に賢い（諸君がそうであることを望むが）ことをあらわすと思わせ、同時に、彼らには到達できないという気持を持たせることになる。1級章は道の終着点ではない。

ほんとのところ、それは、道の初めの部分の終着点である。おそらく、こういったほうがわかりやすかろう。それは実際的なスカウティングの基礎であり、その上にわれわれは積み重ねをしていくものである。それはスカウトという国をまわるわれわれのハイクの最初の部分である。それは、われわれの基本訓練の完成である。これには非常に例外的な要素はなにもない。事実1級章は、普通の少年ならだれでも15歳ぐらいになるまでに取得できるように、よく考えられている。1級章は普通のスカウトのあたりまえの実績である。

1級章の作業には2つの方法がある。1つの方法は、1級章作業をいっとうに手がけずいたところ、突然しなければならぬ気持になって、それから2週間ばかり1から10まで丸暗記をして、がむしゃらに合格し、合格すると2・3日のうちにまるっきり忘れてしまう。たしかに、諸君はこんな方法で作業をすることができるし、多くのス

カウトたちはこんなふうやってきている。しかし、それにはどのくらいの効果があるか、諸君がスカウトたちに「消防士の腰かけ結び」をするように命ずると、彼らはびっくりして諸君を見つめ、あたかも真赤に焼けた釘の火床をまたいで渡れといわれたような顔をする。こんなスカウトを私はくさるほど見てきた。彼らにしても、かつては、ほんのつかの間、考査に合格するまでの間だけ覚えていたのであるが、彼らは正しく習得をし、実際に使っていなかったために、いっとうに、それが身につかなかった。

諸君が1級章をとったり、また、諸君の班員に1級章をとらせる正しい方法は、諸君の班が——デンヤ、ハイクやキャンプで——同一行動をとるときにはいつでも、諸君がなんらかの1級訓練を班員にやらせるようにすることである。諸君には大した負担にならない——結索の練習、鳥や木の見わけ方を検査したり、まったく、たわいのないことである——しかし、スカウティングのすべてにいえることであるが、1級章は数限りないたわいのないことからでき上がっているものであり、1級章を取得する正しい、自然な方法は、スカウト隊にはいった



その日から1級章に向かって訓練を積み重ねることである。ついでだが、初級スカウトおよび2級スカウトに関する章で、われわれは考査が終わってもや

めずに、いつも前進せよといったのは、このためであり、このようにしてこそ入隊した日から1級を目ざせるのである。ともあれ、1級章をいつも1つの目標として心にとめておき、諸君の班員1人1人が、たえずこの達成を目ざすようにさせなさい。諸君がこのようにすれば、1級章のおもしろさは増すし、気持もぐっと楽になるから、この

意味で作業を苦しなくなるであろう。

さて、考査の内容をみてみよう。まず、われわれのおなじみの連れ——基本——から当たってみよう。「2級考査に再合格できなければならない」これは私の言い分を裏書きする言葉にほかならない。1級章は隔絶したものではなく、初級章と2級章から成長するものであり、この基本という簡単な考査を実際に知って、それを覚え込んでいることがはっきりしないかぎり、1級のなかのもっとすすんだ考査に手をのばしてもむだなことである。諸君が調理もできないのに、1級章の要項にもとづいて、野営をやっても、得るところはないし、ばかげてさえいる。諸君がまず第1に6種の木の識別ができないのに、62種の識別をしようとするのは道理にあわないし、諸君がまず第1にまきしばりができないのに、まきむすびをしてもまったく、見込みがない。

1級章の基本には、もう1つおまけがついている。——野営の考査。「少なくとも1回の週末野営を含み、10晩はスカウトとして野営をした経験を持つ」諸君に10晩以内の野営経験しかないとなれば、それはまるっきり野営したことがないのと同じことである。私は諸君が毎週末を班員との野営にすすことを要求しようとは思わない。諸君にはしなければならない務めがほかにも——家に対するものとか、教会に対する務め——ある。しかし、1年に10晩ぐらいは都合がつけられないとは思えない。しかし、それが優れた野営であり、それが純粋の野営であるように気をつける必要がある。純粋の野営というのは、諸君の家の庭にテントをたてたのは計算に含まないということである。これでは単に外で寝たというだけである。野営とはすべてのこと、テントをたて、炊事場をつくり、火を起し自分の炊事を用意し、調理することすべてを意味する——すなわち、テントに寝



諸君の家の庭にテントをたてたのは計算に含まない

ることは、ちっとも、野営に含まれていない。野営の考査は、われわれが野営をはじめの最初からしなければならないことの一つである。班長にとって、彼の班が行った野営量を正しく記録しておくことは、非常に必要なことである。また、諸君が野営の基準に疑いを少しでも持つような野営があるなら、それは数に入れられないようにしなさい。諸君には、もう、野営とはどういうものか、テントの中でもさませしているのはなんであるかが、わかったことであろう。

次に、健康の問題になる。これは当然これまでに習ったことの継続ではあるが、いっそう高度化した救急を必要とする。救急に関する本はすぐれたものがたくさんあるから、私は救急のどの一つをも詳しくここにとりあげようとは思わない。しかし、以前いったことを諸君にここで再び思い起こしてもらいたい。——救急におけるわれわれの

主要任務は常識を働かせること、患者を看護すること、患者を安静にさせることである。諸君は、

もちろん、班長として、いつも班員を考査するために事件や演習をつくりだしていることであろう。諸君は班集会で気絶したふりをしたことがあるか？ おそらく、班員はなににもできないであろうが、班員は手当ができなければいけない。諸君の救急の実演が真に迫っていればいるほど、諸君の班員は実際の事故によりよく対処できる。血を見ても驚かないようになるようなことが重要である。傷のないときに、包帯をすることができると、血だらけのところの処置をするのはまったくわけがちがう。しかし、肝心なのは血だらけの処置ができることであるから、できるかぎり、真に迫った状況で練習をすることである。ところで、三角布の包帯に一言ふれておこう。私は諸君がネッカーチーフを使わないようにせつにのぞむものである。緊急の場合に、患部にあて布をするために

スカーフを使うのは、まったく正しいことであるが、スカーフで練習をするのはまずい。準備のいきどどいた班は、班の備品として、三角布をそなえているものであり、諸君の班は、まちがいでなく、班のデンヤ、ハイクるとき、野営のときに、備えていることと思う。かつて、全スカウトが三角布を持ち歩いた時代があったが、それでも各班員の荷物がぐっと重くなったということではなかった。かえって、そのために、彼らの能力は増加した。諸君がスカーフを使うとすれば、訓練は実際性に欠けるし、まもなく、スカーフは使い古した三角布のようになろう。救急の訓練は、いつも、諸君がその機会をみつけるように心がけるべきことである。それはスカウティングのほとんどすべての活動に含めることができるし、訓練に迫力をだし、実際的で、しかも衛生的に行うようにするのは諸君の務めである。ちょっと、これまでのことを思い返してみたまえ、諸君は班員が床の上で三角布を巻いて、たんねんにばい菌を三角布に拾いあつめ、まるで、傷口にばい菌を運んでいるようなことをしている姿を思い起こすであろう。われわれの救急作業は、たとえ練習のときであっても、上手に、正しく、手当するとともに、清潔にすることが絶対的に必要である。

さて、次に水泳に移ろう。少数の者にとって、ほんの少し困難なことである。「昨日は思いのままにいったけど、今日は、思うようにいかない」小さい少年が、なぜ昨日ほど今日は楽しそうでないのかと聞かれたときに、こう答えた。B-Pがどうやってスカウティング・フォア・ボーイズを書く時間をみつけたかはだれにだってわからない。何千もの隊長がどうやって隊を運営していく時間をみつけられるかはだれにもわからない。しかし、これが事実なのである。諸君が班員の1級章取得のために水泳場をみつけてやれないとしたら、諸君は班長の看板をおろすべきである。諸君が水泳場から何百マイル離れていようと、そんなことは問題ではない。——それにこの国に住む者なら、こんなに水泳場から離れていることはあるまい。どんなに遠く離れていようと、どんな地域に住んでいようと、私は気にかけない。少なくとも

も、諸君は、諸君の班が水泳場の近くで野営をするようにすべきである。はっきりいえることだが、水泳に適していないスカウトには代替案がとれるが、水泳のできない少年は、たとえ1級章をつけているとはいっても、1級とはいえない。たとえば、諸君と諸君の次長が運河沿いの道を歩いていると仮定しよう。2人とも誇らかに、1級章を胸につけている。とつぜん、助けを求める声が聞こえ、諸君は河岸から水中へ小さな少年がころがり落ちるのを目にした。1級章をみせびらかせながら、諸君は泳ぐことができないためにその少年を救うこともできない。他の班員へのなんというすてきな見本ではないか、スカウト訓練のすてきな宣伝である。

私は水泳について諸君の手助けをしよう。水泳は、ただ練習が問題であり、いくら水泳場から遠く離れているとしても、箱の上に腹ばいになって、手足の運動の練習をすることができるし、呼吸のリズムの練習ができる。正しい呼吸法は水泳の秘訣であり、それは水の中と同じくらい簡単に地面の上でも練習することができる。しかし、諸君は水に馴れなければいけない。バケツに頭を突っこんで、目を開くような簡単なことは隊ルームですることができる。このようなささいなことが大事であり、こういうことはプログラムの中途半端な時間に入れるのに都合がよい。諸君の班員に泳げるようになるのだ、何事もそれをとどめることはできないという気持を持たせることである。たとえば、代替の考査をするようにすすめられても、その手にのるな——ただし、「医者」の命令であれば、もちろん、話は別である。

次に観察へとすすもう。これは全スカウト訓練の真の基礎である。もし諸君の班員が観察力の鋭いスカウトでなければ、彼らはスカウトとはいえない。しかし彼らの観察が鋭ければ、他の班員が見習うであろう。

観察の項目には3つの点があげられる。足跡の意味の解説、木と鳥の識別、計測の3つである。

足跡の意味の解説はむずかしくない。班員が、順番に他の班員のために簡単な問題をだして、解説をさせる。諸君の班を戸外に連れだし、自分で

やらせなさい。諸君たちのサインをつくり、諸君たちの足跡の形をつくり、他の人のつくったサインを判読してみる。足跡の追跡は戸外ではたいしたスポーツであるが、屋内ではなんの価値もない。

われわれが戸外で追跡している間に、周囲を見まわす時間と木や鳥について少々は学ぶ時間もある。

われわれは木についてなにを学ぼうとしているのか？ われわれは木が春夏秋冬でどんなふうに見えるかを知らなければいけない。その木の使用方法、燃え具合について知らなければいけない。



この本には、諸君の考えの指針とするため、2・3の要点を記したが、これは完璧な表ではないので、諸君が自分で考えて実験をするようにしたまえ。

木と鳥は観察するためにそこにある。きっと、諸君は鳥を識別するだけでは満足しないであろう。諸君はその鳥の卵はどんな格好をしているか、いつその鳥はわが国に渡ってき、いつわが国を去るか、いつ、どこでその鳥は巣をつくるか、幼鳥はどんなふうか、雄と雌のはっきりした違いはどこにあるか、などに興味を持とう。これは簡単な考査に生命を吹きこむものであり、考査をやりがいのあるものにする。諸君が追跡をするときには、諸君の知らない物の名前を調べるための本を持っていくとよい。諸君が12種の木と6種の鳥を見わけることができるようになって、やめてはいけ

ない。そのうえに、12種類の木と6種の鳥を見わけられるようにしなさい。こうすれば、やがて、諸君が見わけられない木は1本もなくなり、諸君が知らない鳥は1羽もなくなるであろう。この国に住むわれわれは非常に幸運であり、われわれが想像する以上にわれわれは幸運である。われわれの自然生活の種類はわが国ぐらいの大きさの、世界のいかなる場所より、豊富である。諸君が都市に住んでいても、それはほとんどかわりない。公園には、農村地帯と同じくらい、多くの種類の木がはえている。セント・ジェームズ公園にはペリカンが見られるが、ギルウェルでは一度も見ることがない。この世の中に、なんの見どころもない街はどこにもない——すずめ、鳩、アカシアの木、すずかけの木など。これらは、すべて農村より都市のほうによく見られるものであるが、案外見おとされやすいものである。

スカウトをいちばん悩ましているスカウト活動の一つは計測である。これはおもしろいし、役にたつし、さほどむずかしくもないのに、どうしてスカウトたちが頭を悩ますかわからない。しかし、正直な話、ギルウェルに樅の木があるが、この木の周囲は（だいたい、地面から5フィートの高さの周囲を計るようであるが）14フィートである。しかし、スカウトたち——その大部分は1級スカウトで、なかにはキングス・スカウトもいる——は3フィートから80フィートまでのあらゆる数値をだすのだから驚く。これは、考査で認められている10パーセントの誤差のわくをまるではずれた数値である。

なにか一つのことをしはじめるときに、そのものの意識をはっきりさせることからはじめるのは、悪いことではない。計測にとって諸君に教えたいたことは、計測とは「つねに練習を積むことによって正確な推測をすること」である。

スカウトは、なかなか当推量もうまいが、おそらくその練習にはあまり身を入れたがらないであろう。したがって、練習は興味深いものにするのである。おそらく、諸君のなかには、いやおうなしに、ピアノを習わされている者がいよう。音階、連急弾奏、こういう類のことは非常に重要で

はあるが、ちょっとばかり退屈な代物である。こんなとき、われわれの練習に「グリーン・グロー・ラッシュイゾーオー」の変え歌をまぜたら、どんなにほっとすることか。これによって、たちまち、練習の興味は増す。計測についてもこれと同じことがいえる。

諸君は、どうしてわれわれがスカウティングのなかで計測を苦手にするのか、考えたことがあるか。それには、どのような利益があるのか。私にはこういう疑問を持った時代があった。教会の高さを計測したり、平原の羊の数を推算する（推算法——農業大学で教えているあの方法、羊の足の数をかぞえて4で割るといふ）ことに、どれだけの価値があるのかと私もいいたい。たしかに、私は計測に疑義を持っていた。しかし今では、少しの疑いも持っていない。そのわけは、計測は、われわれのスカウティングのプログラムのなかでもっとも使いみちの広いことの一つであると信ずるようになったからである。要するに、計測の能力はたいていの人々の生命を保全させるカギであり、計測が不得手なだけで多くの人は命をおとすことがある。諸君が道を横切るとき、車がこちらに向か

ってくるのを見たらいつでも、諸君は車の速度を推測し、諸君が道を横切するのに要すると思われる速度を推測して、じゅうぶんに安全であることを確かめなければいけない。

諸君が自転車に乗っても、もっと大きくなって、オートバイや自動車に乗るようになって、運転のこつは推測である。つまり、諸君の速度、ブレーキをかけてどのくらいの距離で止まるものか、他の車の速度はどのくらいかを推測しておくことである。もし諸君がシー・スカウティングをやるなら、このことはもっとよくあてはまるであろう。諸君は川や潮の流れを測り、繫留したり、防波堤に横づけのときには諸君の重量はどのくらい船にかかるかを推測しなければならない。諸君の乗り船が上流につないである軍用輸送船と下流でカマスを釣っている人との間に入ることができるかどうか。（よけいなことだが、ここで測りまちがいをするなら、いつでも、軍用輸送船にぶつかる。カマスを釣っている人に迷惑をかけるより、船にぶつけたほうがことがめんどうではない。私にも覚えのあることであるから、よくわかっている）
(第11章つづく)



アメリカの斥候、フレデリック・バーナムはマタベルランドで有名になった。

班長の手引

—THE PATROL LEADERS' HANDBOOK—

ジョン・サーマン

今回、班制教育のよりいっそうの発展を願って、ジョン・サーマン氏著「班長の手引」を再掲載する。初版は1950年に出版され、これは1955年版の訳稿である。これが掲載されてからすでに18年の年月が経過しているが、指導者諸氏が熟読され、じゅうぶん咀嚼して実り多き班制を実現されるよう希望する。

《第11章》班と1級スカウト—2

われわれが野営にいくと、計測がはいてくる。あの黒イチゴの間にある隅に——テントをたてられる余地があるか、あるいは、まずテントをたててみて、広さがじゅうぶんにあるかどうか調べてみるか、われわれはよい場所を見つけ、これを隊の野営地として隊長に上申したいと思う。その場所は、隊野営の必須条件をすべて備えていると推測するか——隊長テント、班テント、食糧倉庫、旗の掲揚柱の場所、ゲームの場所、台所、便所、営火場。これは、すべて、推測である。

したがって、推測とは観察である。しかし、これは技能的な方法での観察であり、ここでいう技能とは練習と経験により得られたものをいう。

さて、実際的なことを話すとしよう。まず、諸君自身のことを考えよう。スカウティング・フォア・ボーイズのなかで、老総長はわれわれが歩く物さしであるべきだと説いている。たしかに、そのとおりである。

諸君が自分自身のことについて知るべきこと、また、諸君の班員が彼ら自身のことについて知るべきことは、次のことである。

身長（もっとも有効なのは、諸君の目の高さまでを知っておくことである）

差しわたし 広げた両腕の一方の指の先端から

他方の指の先端まで、ここでは二通りの測り方ができる——一つは息を吸いこんだとき、もう一つは肺から息を吐きだしたとき。ついでにいうが、もし両方に少しの相違もないなら、なんとかしなければいけない！

ひじから手首まで これは非常に便利な物さしである。諸君はあらゆる角度におけるし、これをもち運びのできる物さしとして活用できる。

膝から地面まで 上と同じことがいえる。
靴をはいたままの足 諸君がなにかを測ろうとするたびに靴をぬがなければならないとしたら、いささかばかしている。したがって、靴をはいたまま足の正確な寸法を知っておくことである。

大腿あるいは歩調 これを正確に習得する方法は、自然な歩調で、50歩をあるき、距離を測り、それから平均値をだす。自然に、歩調を一步でだせる者はいないし、不自然なものを測ってもなんの役にもたない。

ひとあたり おや指の先端からひとさし指の先端まで。

ひと横切り おや指のつけ根からこ指のつけ根まで。

そこで、やり方を逆にして、諸君の身体の一部で1インチの長さのもの——おそらく、指の1関節など——を捜しなさい。

諸君が、このように自分や班員に関係のあるあらゆる寸法を知っておれば、かぞえきれないほど多くのものを正確に測ることができよう。しかし、ここで一言注意しておきたい。諸君たちは、いつも寸法が同じままでいないことである。諸君は成長している。おそらく21歳ぐらいになるまでは、成長を続けることであろう。であるから、諸君は定期的に寸法を測っておく必要がある。事実、私が班長であるとしたら、私はプログラムに3か月ごとに定期的に入れるようにするであろう。というのは、諸君が12歳のときにとった寸法を、15歳になっている今でも使おうとするのは、なんの役にもたないからである。

スカウト杖 もともと、杖の効用の一つは物さしであった。そのためにフィートとインチの目もりがつけられていた。諸君は、ひんぱんに杖を使うのであるなら、注意を要する。杖は下のほうがすりへって、2年もすると2インチは軽くへってしまう、これで寸法をとったら、おかしな答えがでてしまうであろう。

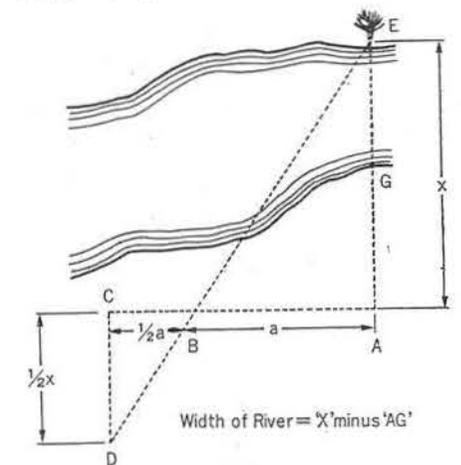
ベルト これは非常に正確な物さしである。
スカウト・ナイフ 要するに、諸君がいつも身につけてまわる品物の寸法を知っておくことである。たとえば、半ペンス貨の直径が1インチであるとか、その他の貨幣の寸法をはかって、それを覚えておくことである。つぎに、実際に物をはかるといふ大問題をあつかうとしよう。諸君の身体を使ったり、その他のものも使うことができる。たとえば、木の高さを正確に測る最上の方法は、私はこれがもっとも興味ある方法であると思うが、木のてっぺんまでよじのぼって、頂点から錘糸を——糸の先におもりをつけたものを——たらしすことである。たらしした錘糸を地面にのぼしてはかればよいわけである。

同じようにして、川幅をはかることができる。最上の方法はおもりのついた糸を向こう岸に投げ、それを引きもどして、はかることである。私がここで諸君にいいたいのは、もし正確にやれる方法があるなら、それを使えということである。推測力を伸ばす方法を（諸君が一つのことを測る前に）それがどのくらいかを推測し、諸君の班の者にも

同じことをやらせて、諸君の意見をまとめて一定値を書きだし、それからそれを計測し、どのくらい近い数字かを調べてみることである。この方法によってすぐに諸君は推測に熟達することができよう。一つのアイデアとして推測ゴルフというゲームをするのは、悪くない。まず、班長は「あの白樺の木の周囲は8フィートとぼくは思う」といって第一ホールを設定する。三番スカウトは「ぼくは6フィート半といたい」という、木を実測し、最近似値をだしたものがホールを獲得する。

また、このほかにも別の方法があり、これらの方法は練習を積み、非常に正確な値をだすことができる。私は、これからたくさん異なった方法をあげようと思う。諸君が、多くの方法を知れば知るほど、諸君はそれだけ多くの方法をやってみることができ、それだけ興味が増すと考えるからである。

第一に、B-P方式と呼ぶ方法をあげよう。図を参照してもらいたい。ご覧のとおり、簡単な幾何の応用である。



この方法で諸君が注意すべきことを二つについておこう。第一は、この方法を用いて、正確を期そうとするなら、地面が平らであることが理想的であること。第二に、木でも、建物でも、諸君が計測しようとする物体は、その近くに地面に垂直に物を立てられる状況にあること。それからもう一つ、（これは落葉樹にあてはまるのであるが）諸君が計測しようとする木の頂点が木の幹の真上、

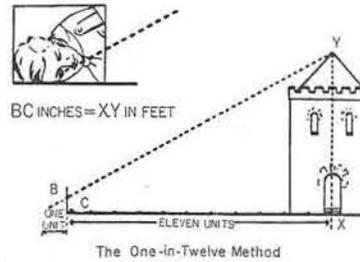
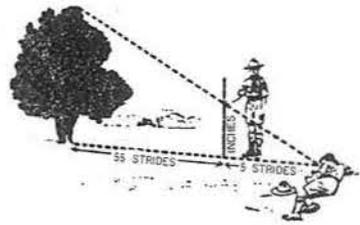
にない場合がよくあること。この問題を解決する方法はもう一つの図に示したようにすることである。

私はここに示す図のすべてをくわしく説明しようとは思わない。私は諸君自らで解読してほしいと思うからである——ただ、これらの方法のいくつかについて、二、三の点を注意しよう。まず、投影法、これは、たいへんよい方法であるが、わが国ではあまり役にたたない。しかし、希望を持

ってやってみたまえ！これは影が諸君が計測しようとする物体より長いときに使える。ということは、朝早くか、夕方に使えるが、日中はだめということである。なぜかといえば、影が物体より短いときには、誤差があまりにも大きすぎるからである。

次に、「泥水のはいった容器」方法がある。（「水のはいった汚れた容器」では使い物にならないから、注意されたい！）泥水をきれいな容器にいっぱい入れる。泥水は反射効果がすぐれているからである。諸君は鏡がいいのではないかと思うかもしれないが、鏡は地面にいつも水平に置けるとはかぎらないから、役にたたない。ところが、水は

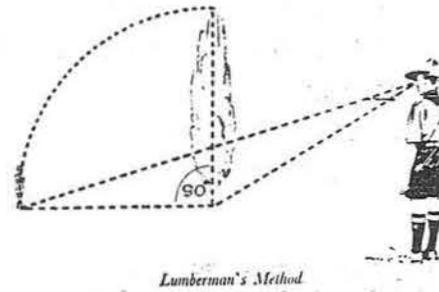
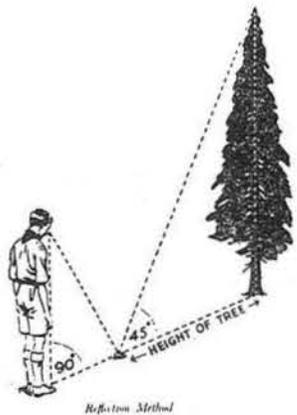
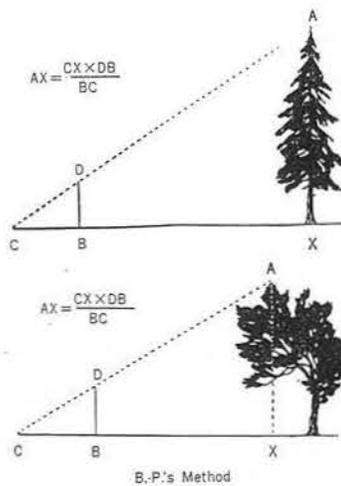
いつも水平になる。これが非常にたいせつなことである。



をのぞきこんで、諸君の視線の角度が地面に対して45度になるようにならなければいけない。簡単にいうと、つまり、諸君が股の間から見て、目標物（たとえば、諸君が高さをはかりたいと思う旗柱）の頂上をちょうど見通せる位置にいれば、諸君は旗柱の高さと同じ距離のところにいるのである。旗柱の話で思いだしたので、ついでにいうが、旗柱をはかる非常によい方法は揚索をはかることである。信じるか、信じないかは知らないが、私は旗柱をはかるのにそれをわざわざ倒したスカウトの班を知っている！彼らはそのために丸1日つぶした。いうまでもなく彼らは当然揚網の1か所に目じるしをつけ、網を引きあげて、

その長さをはかればよかった。もっとも、諸君が苦勞をしたのであるなら、私は諸君を止めようとは思わない！

つぎに、もう一つの方法——これは幅をはかる——として諸君に覚えてもらいたいのは、帽子の縁を使う方式である。ふつう、これはナポレオン法といわれている。諸君の班員が帽子の縁をびん



とさせていなければ、諸君たちはとんでもない結果を得ることになる。

それから、推測についての話を切り上げる前に、考査にある事柄だけでお知らせしないよう注意したい。数字と重量にも、あたってみなさい。これは、やってみる価値のあることであるし、班集会のよい教材になる。ある晩の集會に、たくさんの小包を持っていき、班員にそれを持たせてみて、中になにがはいつているか、どのくらい重いかをあてさせ、それから班員の目の前でそれをはかりかけ、成績をつけてみなさい。

じっさい、諸君がほんの少し頭を働かせれば、推測はすばらしい楽しみになる。これは、諸君がキャンプや、ハイクや、汽車を待っている間、キャンプの休息时间、いつでもすることがなくて時間をもてあましているときに、やることのできるものの一つである。

諸君が班員に投げつける質問は、ちょっと、こんなものであろう。

- どのくらい離れているか？
- どのくらい高いか？
- どのくらい幅があるか？
- どのくらい数があるか？
- どのくらい量があるか？

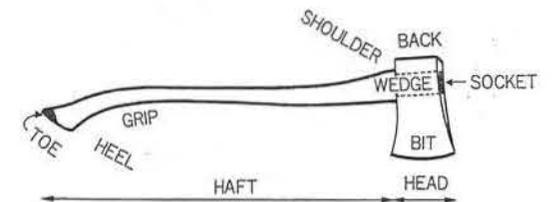
しかし、質問を投げつけるだけではいけない——諸君自らが、ときには、質問に答えるようにすることである。

開拓について、あまりくわしく話をするだけの紙面はない。この問題だけを専門にあつまっている良書が何冊もあるし、開拓は非常に大きな題目であり、スカウティングにおいて非常に大きな部位をしめるものであるから、開拓のことは専門書にゆずって、私はただ前に述べたことを、ここに、

もう一度くり返しておきたい。班のデンで練習をしたら、できるだけ早く、班員に實際活動を結束を使って、実施させるように仕向けなさい。

組つなぎについては、このことだけをいっておこう。3本よりのロープで組つなぎができるようになったら——この方法はたいいていの本にでているし、まず初歩として手ごろである——4本より、6本よりをためしなさい。諸君がとてもむずかしいのをやりたいのなら、鉄索で試みなさい。これは、おそらく、班長と次長が人目につかない所でやるだけにとどめることである。これは年のいかない見習いスカウトの領分を少々越えている！

次に、伐材斧の使用法について話そう。私はひと目でわかるような図を2・3ここにあげた。ところで、なんと多くのスカウトが1年のうちに斧で足を傷つけることであろうか？それは驚くほど高い数であり、斧でわざわざ傷をつけなくともよさそうなものと思うほどである。われわれはすべて少々注意を怠りがちである。おそらく、不注意に「なる」のではなく——われわれは不注意なのである。私が諸君に忘れてもらいたくないことは、斧は使いはじめから終わりまで危険なものであることである。諸君が斧をうまくこなせるとき



には、親友のように思えるが、一度しまつにおえなくなると、非常に危険な敵になる。

この章で、私は伐材斧の使い方を手とり足とり教えようとするのではない。それは大きな題目であるし、だいたいにおいて、諸君は伐材斧を使う機会がそんなにあるわけでないからである。木をきりたおすのは楽しい——多くの人は伐材を楽しみ、なかには度がすぎるほど楽しむ者がいる。私は、諸君の班が木を植え、木の世話をすることに満足を感じることを希望し、また、これはどんな

とより重要なことである。伐材用の斧でわれわれは枯木と倒木を切る。そうすれば、われわれは新しい植樹をする場所が広げられるし諸君の班は諸君のキャンプ場のまわり、諸君のデンのまわり諸君の庭に、木を植えることであろう。木を植えて、その世話をし、その成長を見守る、この世の中に、これほどする価値のあることはあまりない。

探検については、それに関する章にまかすことにした。ところで、公共奉仕について一言。これは2級章を継続するだけである。ということは、われわれは自分自身と班員を訓練して、彼らが街路を歩いているときに他の人の迷惑にならないように、必要があれば、道路整理などの手助けができるようにすることである。

これは、すべて、儀礼上の問題であり、それ以



上の意味はない。

この1級章に関する長い章を終わるにあたり、まずそれが興味深いものであることを諸君に教えられたこと、第2に、スカウト個人個人が非常に訓練を必要とすること、第3に1級章訓練はしょっちゅう行うようにするのが諸君の務めであり、それはだれかが1級章をとったことを後になって気がつくまで知らなかったことがないようにすることを、諸君は教えられたと思う。そこで、いつかは、老総長の言葉「……だから、諸君は1級章を得ることになろう」が真実になり、これまで

にわれわれが知っているより、もっとたくさんのスカウトが1級になるような時代がくることをわれわれすべては望む。

このことが起こり得るか、得ないかは、ひとえに、諸君たち班長にかかっている。

『班長の手引を読んで』

故 中 村 知

さきにも述べたように、1級スカウトの数が少ないことを、ここでも指摘している。統計上、1隊平均1人強しか1級スカウトがいないという現象は、ベーデン-パウエル卿の意思に反している——と、まで、ジョン・サーマン先生は極言している。

「いつまでも、2級のままでいたい。と、いう者はいないはず——」
と、痛いところを突いている。

これは結局、パトロールシステムが、正しく行われていない証明である。と、いわんばかりの指摘である。班長には痛いところ——。

この警告は、たしかにそうだといえる。昔、菊、隼、富士の課程が、まだ、設けられていなかった時代、1級は最高のものと考えられ、免許皆伝みたいに、隊長が出し惜しみをしていた時代が、日本にもあった。今から思うと、そんな思想はまちがっていたのであるが、それとは別に、私は、班制が正しく行われるならば1隊に4人、5人の1級は、きっと、できると考える。おそらく、班長はすべて1級になるだろう。

菊、隼、富士は、1級プラスアルファで、いわば増加課程であると考えるとき、少なくとも1級はスカウトとしては最高級だという点で、昔の解釈と一致する。だから、菊や隼や富士になれなかったからといって1級は、卑下する必要はないように思う。つまり等級としては1級が最高で、菊、隼、富士はアワードであるという考え方がよいのではなかろうか？

1級というものは、スカウトとしての、基本訓

練の完成である——とみたベーデン-パウエルの考え方をここで再認識してみたい。

ジョン・サーマンの考え方の根底も、この考え方にあり、私は、読んだ。

だから——

- 基本訓練完成者が、1隊平均1人強では少なすぎる。
 - それはパトロールシステムを正しくやっていないからである。
 - 15歳までに、1級をとることは、当然のことで、だれにもできうることである。
 - 要は、入隊の日から、1級に挑まさせることにある！ 16方位で満足しないで32方位を教えなさいと前に述べた趣旨もここにある。
 - 野営の基準でも、救急法でも、既得の力を高度化させるような指導がたいせつである。
 - スカーフ(ネッカチーフ)で三角巾の使用法を教えないで、ホンモノの三角巾でやりなさい。
 - 水泳——もし、水泳をやらせる場所の発見ができなかったら、「班長」の看板をおろしなさい。水泳ができないような者は、たとえ1級章をつけていても1級とはいえない。
 - 観察については——足跡が示した意味、樹木や鳥の鑑別、識別、そして計測ができなければ1級とはいえない、と。
- ここで、サーマンは、身体による体測法をくわ

しく述べている。これは、この人の「このみ」らしい。彼は建築士出身だそうだ。この計測法に習熟すると、交通事故の防止にかなりの貢献をすると言っている点、注目に値する。

○バイオニアリング(開拓法)にあつては、スプライス(Splice・組継法)を鋼索でもやらせなさい。これは、たいへんむずかしいから、班長と次長だけでこっそり練習するといいいい。
○斧で足を切った実例が、ひじょうに多い。
この章は、ほとんど全章がウッドクラフト(Woodcraft)の指導法である。

現在、日本のスカウティングは、ウッドクラフトの習熟が、じゅうぶんでないようである。その理由のひとつに、リーダーの不勉強があげられている。

いまひとつの理由は、考査の仕方にもある。参考書で得た知識だけをレポートに書いて提出するだけでは技術が身につかない。

1級というものは、基本訓練の完成ということであるから、班長が1級でなかったら、その班全員は基本訓練を完成できないことになる。これはパトロールシステムの効率に大きな支障をきたす。

とはいえ、1級がスカウトの終点だと考えたら、これも、まちがいである。スカウトとしては最高級だとしても、終点ではない。プラスアルファの増加課程もあれば、アワードとしての技能章課程もある！



班長の手引

—THE PATROL LEADERS' HANDBOOK—

ジョン・サーマン

今回、班制教育のよりいっそうの発展を願って、ジョン・サーマン氏著「班長の手引」を再掲載する。初版は1950年に出版され、これは1955年版の訳稿である。これが掲載されてからすでに18年の年月が経過しているが、指導者諸氏が熟読され、じゅうぶん咀嚼して実り多き班制を実現されるよう希望する。

《第12章 班と自然》

「スカウティング・フォア・ボーイズ」の初期の版では、この本は「スカウティング・フォア・ボーイズ：ウッドクラフトを通しての市民性教育」と呼ばれていた。老総長は、できるかぎり、われわれは戸外でスカウティングをしたい。われわれは自然との戦い方を学び、それにうちかちたい。なかんずく、われわれは辺境地の生活に適応し、ある程度辺境の生活をやりとおせるようにと熱心に思っていた。

ウッドクラフトの基礎は探検であり、辺境、野原、森林にでかけ、何かを発見し、それからときには指導者の手助けをうけるが、だいたい自分だけの力で、発見したものの正体を見きわめ、どんな役にたつかを知り、また、自然界の動きの中でどんなふうに変化するものかを知ることである。

今の世の中は科学の時代、原水爆の時代、ジェット機の時代、空飛ぶ円盤の時代、超音速の時代といわれる。とうぜん、諸君は、みな、宇宙船、人工衛星、月旅行、火星または、できれば、金星でのキャンプ、というようなことに興味を持つにちがいない。年寄りでもないのに、年寄りのように思われてはかなわないが、私は乗合馬車のすたれたころのことを覚えているし、自動車がまだ物珍しい機械であり、自動車に故障が付きものであ

って、乗ってでかけた帰りには長い距離を歩いて戻ったり、車を押してこなければならなかった時代のことも、よく、記憶している。まだ、ラジオの発明されない静かな時代の思い出、そして鉱石ラジオが全盛をきわめ、国内でもっともはやった英語が「静かに」という言葉であった。前よりもっと静かになった時代の思い出も記憶している。それが、わずか数年の間に、驚くべきほどの変化が起こった。すべて変わってしまった。しかし、変わらなかったものが、変わったとしてもほんのちょっとしか変わらなかったものが1つある。それは、われわれをとりまいていて自然界である。われわれがキャンプをする野原、われわれが探検をする森と丘、われわれが橋をかける小川と池、そして気候である。

私は少年時代をロンドンのはずれですごしたことを非常に幸福に思っている。庭の塀をとびこせば、目の前には何マイルも野原が広がり、私は6歳からずっとその森を探検してまわった。そこには、木登りのできる木、水遊びのできる池、イモリやオタマジャクシを捕えてきて、寝室にかけておくこともできた。私は、知らず知らずのうちに、自分のまわりの自然を少しずつ見きわめ、その知識をたくわえていった。私がこのようなこと

に対して持った興味は、年をへて、私のものとなり、いや、そればかりか、興味は高まっていった。このほかのことに対する興味は移りかわり、無限に定めなかったのに比べ、たいしたことであると思う。

さて、このことは諸君とどんな関係があるだろうか？ 諸君が私の思っているような班長であるなら、諸君は班員が成長をして隊を離れたあとまでも残るようなことを何か与えられるようにしてほしいと思う。諸君がこの点について班員に与えられるものは3つあり、その3つのことはそれぞれ関係があると私は信ずる。

第1はスカウティングというゲームの真の精神、第2は班員が考査と技能章に合格することにより有用な技能を身につけるという信念を持つこと、第3は班員を戸外に連れだし、自然界について学び、それを理解し、それを楽しむように班員を訓練させることである。

自然についての本は何百冊もでていることを、おそらく、諸君は知っていよう。幸い、私は自分でも300冊ぐらいの参考書を持っている。私はそれを全部読んだとはいいたくない。しかし、全部に目を通し、どこにどうということが書いてあるかは知っている。これらの本は良い友だちであり、私のたいせつな宝である。何百冊もの本があるから、諸君は私がこの短い章の中で本とか蝶とかその他もろもろのことについて一部始終を諸君に話すとは期待しないしてほしい。

そこで、私は諸君と諸君の班員が楽しみ、利益をえられるようなウッドクラフトの作業を1ダースほど紹介するのが非常に有益であると思う。これらの作業は、どの1つをとっても、スカウトに実験されてきたもので、だれもがその成功を保証しているものである。私はこれらの作業をどこで行うべきかについては話さないが、諸君は班長であるから、だれにも依存せずに自分のことは自分でするようにしてほしい。

私は、諸君がこれらの作業を一例として、これに付加したり、改良したり、諸君の想像力を働かせて諸君の身のまわりに起こるあらゆる機会を利用するようになっていくことを希望する。

もう1つ要点がある。世界のスカウトの大多数は都会に住んでいるようである。そこで、ときには、自然を勉強する機会が非常に限定されているという話を聞くことがある。しかし、これは、まったくの誤りである。もし諸君が都会に住んでいるなら、田舎に住むスカウトより、もっと多くの機会に恵まれているといえる点はいくつもある。これから、その真実を諸君に証明してみよう。ロンドンのセント・ジューズ公園およびオーストラリアのメルボルンにある植物園には、オーストラリアの灌木林や英国の森の同等の広さのいかなる部分より、多種類の樹木がある。いや、ギルウェルでさえ、100種類をこえる樹木があるが、ここはロンドンの中心チャーリング通りからわずか12マイルの地点である。ギルウェルには、1エーカーの土地に10種の異なった樹木があるのにたいし、ギルウェルの門から長くつづくエピングの森では、20エーカーの土地に1ダース以下の異なった種類の樹木を発見できるにすぎない。であるから、諸君たち班長は、自分の環境を見まわし、諸君の周囲では何もすることができないような話をしないようにしてほしい。諸君にやる気があれば、やりとげることはできるし、この章がそのための役にたてばと望む。

それでは、私の作業案を以下に記そう。

- (1) 針葉樹3種および落葉樹3種を選び、その表皮と材幹を比較せよ。これらの樹木をいろいろな方法で試験せよ。例、燃やす、ゆでる、さく、柔軟性など。諸君は、落葉する針葉樹を知っているか？
- (2) 次のものを各6種ずつ集めよ。野生の花、昆虫、木の葉、鳥の羽毛、池に棲息する生物、キノコ、草。キノコと草がいちばんむずかしい。諸君は、初歩の段階では、この2つをあとまわしにしたほうがよい。
- (3) 諸君の班を2人1組に分け、各組に以下の問題群を1つずつやらせて、資料づくりをさせる。全部をまとめて詳細な報告を作成させる。
問題群1 池の生物、鳥の羽毛
問題群2 針葉樹、今月咲いている野生の花

問題群3 落葉樹, キノコ

班を2分し、次長に一方の組を担当させることもできる。

(4) くだものの木の葉を収集せよ。木の葉、それぞれの木を研究し、識別に役だつための報告書を作れ。

これは1年のはじめにやっておけば、果実が熟す時期にあまり感わずにすむであろうが、私見をいわせてもらうなら、諸君が気に入った時期にするのがよい。

(5) 落葉樹12種類の特性を調べよ。

葉そのままにしておいて、その他の目だつ特徴を集める。たしかに、葉によって木を識別することの得意なスカウトは数限りない。しかし、ヨーロッパやその他の国のように大部分の樹木が落葉するところでは、これはあまり役に立たない。オーストラリアでは、ユーカリ科の木が1年中葉をつけているので問題は無い。そこで必要なことは273種類のユーカリ樹を知り、それが州ごとにどんな名称で呼ばれているかを聞きだすことである。まじめな話、少なくとも、ありふれた木については幹と総体的な形から識別ができるようになることが重要である。

(6) 鳥の巣を6つ見つけよ。どのような木に巣がつくられていたかを知る。どんな種類の鳥がその巣をつくったか? この場所が選ばれた理由は何であると思うか?

いうまでもなく、諸君は鳥の住んでいる巣をさわがせないようにする。スカウトは鳥の卵を集めるものではない、スカウトはそれを判別するために調べるだけである。

(7) キノコを収集する。できるかぎり、それを識別する。生育状況の特色を、特に生育場所を記す。

食用と有害なものとの区別せよ。

このためには、良い参考書が必要である。私は、観察シリーズの「キノコ」あるいは王室出版所が発行する「食用および有毒なキノコ」を推せんする。食用キノコの試食は隊長にやらせ、班員にはやらせないほうがよい。

(8) できるだけ多くのイモ虫を見つけ、それを識

別せよ。もし、捜している間に、諸君が蛾を見つけたら、それを持って帰る。

これは、なかなか骨が折れる。諸君には参考書が必要になる。観察シリーズの「英国の蝶」あるいは、ウェイサイド・アンド・ウッドランド・シリーズの「イモ虫」がよい。

(9) 次にあげる科それぞれから3~6種の野生の花を収集せよ。

ウマノアシガタ科 (Ranu mulaceac)

十字花科 (Crusiferae)

まめ科 (Leguminsae)

パセリ科 (Umbelliferae)

ラテン語名は、いささか、長すぎるし、綴りを覚えるのに困難はあろうが、そんなにもむずかしいものではない。木と花のラテン語名を覚えることの1つの長所はラテン語名は国際的に通用することである。これにたいし英語名は英語を使う国民にしか理解されない。

(10) 近くの公園に見られる落葉樹から3種を選び、観察した結果にもとづき、次の諸点について詳細な報告を作成せよ。

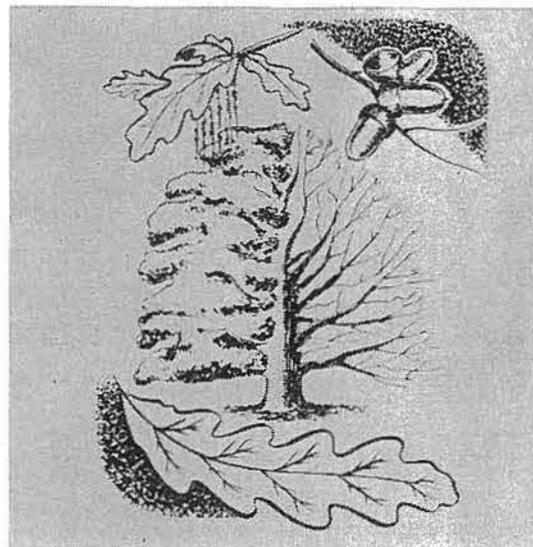
(a) 幹の形

(b) 葉の形

(c) 高さ

(d) 木の総体的な形 (スケッチせよ)

(e) 簡単に判別できる特徴 (50歩, 10歩, 1歩



はなれた地点で)

(f) 果実あるいは花

諸君の報告に標本を付加する。

詳細な調査をする場合には、全班員が分担して、何かは分担をうけるようにする。時間はじゅうぶんにかけるようにする。分担をしておえたと自分で思ったときには、15分間一服して、それから次のことにとりかかるようにする。真の観察眼を持つ者は、わかりきったこと以上のことを見きわめるものである。

(11) いけ垣を調べる。いけ垣に使われている木や灌木の種類を研究し、いけ垣の中あるいは下に生育あるいは棲息する動植物の生態を調べよ。

(12) 次の各項の標本を作り、展示せよ。

キノコ、小灌木、針葉樹、灌木林の雑草、寄生植物、草本、食用果実、有毒果実、コゲ、水中植物、地面をはう植物、軟らかい土質に生育するもの、湿土に生育するもの、シダ、落下傘法によって種子をまき散らす植物、動物を媒介として種子をまき散らす植物、鳥を媒介として種子をまき散らす植物。

これは土曜の午後の作業である。

(13) 50ヤード以上はなれた地点から、できるかぎり多くの樹木を識別し、その地点から識別するときの各樹木の特徴点を表にする。この表がかあがったら、木のところに近よって、諸君の観察を点検する。

(14) 次の樹木を発見し、その葉を標本にするため持ち帰る。木に特徴があれば、それを記帳し、報告する。

トネリコ、樫、シデ、チューリップ、ハコネシダ、ワイルド・サービス、柳、ロンバルディ・ポプラ、白ポプラ、桜、ホワイトビーム、杉、スコットランド杉、イチイ、イトスギ、ブナ、ハシバミ、ニレ、サンザシ、大楓樹、ノルウェー楓、カナダ楓、スズカケの木。

上記のうち、最末尾の5種の木の葉を比較する表を作り、将来識別するための資料とせよ。成熟した木だけを標本の対象とせよ。

若木の葉をとらないようにせよ。

ここにあげた樹木の表は、ギルウェルにある樹

木をもとにした。あきらかに、このような作業を諸君の班員にやらせる場合には、樹木は諸君の活動範囲にあるものと定めることを忘れないようにすることである。

(15) 2匹の昆虫を捕え、次のことをせよ。

(a) 1/16インチまで正確に、その体長を計る。

(b) 1ヤードのコースを進む時間を計る。

(c) 柔らかい土のはいった箱の中で、そのもぐる速度を計る。

(d) その成育過程を明確にせよ。

これについて、特に述べることはないが、諸君はこの作業を楽しむことができよう。私は大好きであった。

『班長の手引を読んで』

故中村知

“Scouting for Boys”の1908年の初版には、“A School of Citizenship through Woodcraft”という、サブタイトルがついていた。——とサーマンは指摘している。

そこで、私は、本箱から初版本を捜してみると、なるほど、そう、記されている。これは「スカウティングというものは、ウッドクラフトを通じて(あるいは介して)市民性を養う学校である」という説明である。

このサブタイトルは、1908年の時点では、スカウティングを軍事予備教育だと誤解した大衆に向かって、これは軍事訓練でなく公民教育である——という説明のため、付記されたものだろうという見かたがある。現今版に、このサブタイトルがなくなったのは、だれも、これを軍事訓練だと誤解しなくなったから、その必要がなくなって取り去ったのだろうと考えられる。

そういうせん索はとにかくとして、ここに、ジョン・サーマンが、わざわざこのサブタイトルを、ひっぱり出したについては、私も、彼と同じような所見を抱かざるを得ない。それは、ウッドクラフトを介しない、あるいは、ウッドクラフトに未

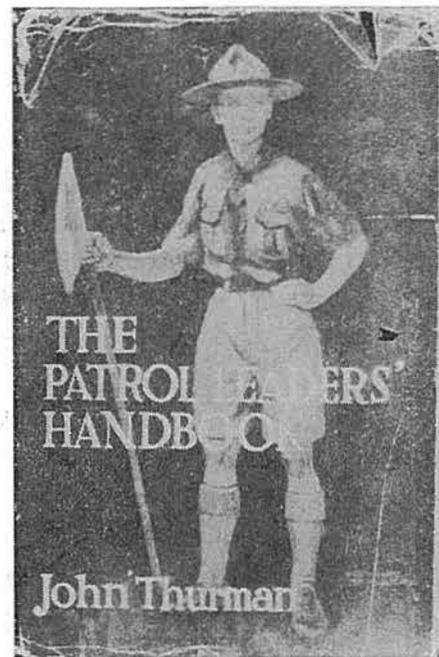
熟なスカウティングが相当、現存するからである。私が本誌の41年7～8月号から連載で、「ウッドクラフトとは」という稿を書いた理由もここにある。つまり、ウッドクラフトを通さなかったらスカウティングは成立しないからである。

サーマンは――

- その、ウッドクラフトの根底は探求 (exploration) にある。
 - 世の中が、いくら科学の時代になっても自然というものに結局はもどる。
 - 何年たっても自然である。(変わらぬ)
 - 自分は、自然について300冊の本を読んだ。
- 自然は、良い友である。

と述べ、班長たちに自然観察15問題を出題し、それを班活動でやるよう奨めている。

その15問の中には、日本にないものもあるから、これを日本化して班でやってみてほしい。こういうウッドクラフトを実施した班(またはスカウト)と、実施しない班(またはスカウト)と、どれだけ、ちがうか比較してみたいものである。

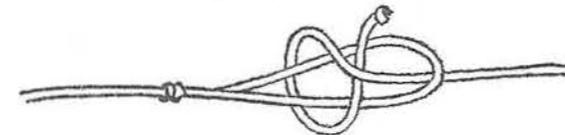


マスつりをするには熟練と手ぎわのよさがある。マスはひどくあばれることがあるから、油断しているとつかまらない。

図は結びかけで、しめる前の形をあらわしている。



これはとめむすび



輪に糸をつなぐには、このようにする。



針を糸につける時も同じようにする。



2本の糸をつなぐには、太さが違っている場合でもこの方法でしたまえ。

班長の手引

—THE PATROL LEADERS' HANDBOOK—

ジョン・サーマン

今回、班制教育のよりいっそうの発展を願って、ジョン・サーマン氏著「班長の手引」を再掲載する。初版は1950年に出版され、これは1955年版の訳稿である。これが掲載されてからすでに18年の年月が経過しているが、指導者諸氏が熟読され、じゅうぶん咀嚼して実り多き班制を実現されるよう希望する。

〈第13章 班と技能章〉

前の章では、初級、2級、1級のことを扱った。これらの進級に含まれた考査は、われわれの訓練に「欠かせないもの」といえる。これは、われわれにとってはたかさんの戸口であり、1級の段階までに、われわれはこれらの戸口を通して部屋の中を探検してきたことになる。そこで全員が1級とか、全員が少なくとも2級であれば、班長は全班員が考査課目の知識を持っていることを確信したうえで、いろいろな活動をすすめることができるから、私は全員が1級か2級であってほしいと思う。事実、先週加入した少年以外は、全班員が2級でなければ、スカウティングの冒険は制約されざるをえない。この基本訓練は「欠かせない」ものである。班員が2級の作業をつづけ、必要な水準にまで到達するのは、班長の務めである。

ところで、技能章には「欠かせない」ものは、ほとんどない。まあ、このことはあとで説明するが、班長からある程度「欠かせないもの」がでてくるのはかまわないが、諸君の隊長が要求をしないようにしたいと思う。

諸君が知ってのとおり、15歳未満のスカウトのために40種類ぐらいの活動に関して技能章が約50種ある。しかし、もっと正しい言い方をすれば、

技能章には40項目があり、その項目には約4,000の活動が含まれている。そのとおり——諸君が技能章をことこまかにやれば、そのぐらいの活動はある。

さて、だれも諸君が40も技能章をとることを期待してはいないし、私は諸君が諸君の班員に、40、30、いや20もの技能章をとらせようとしないうことを望む。

じつのところ、私はだれかがそんなにたかさんの技能章を着けているのを見たら、不思議に思うであろう。ここで、われわれは技能章をスカウティングの陳列窓と考えてみよう。このスカウト用品店と普通の店との違いは、この店では陳列されている技能章を買いたいときには、お金を払うかわりに、スカウトは時間と労力を支払わなければならないことにある。したがって、自分がとりたいと思う特定の技能章を、ある程度、自由意志で選ぶことができるといえるが、全く自由というわけではない。私は、班が班会議で、班全体として1つの作業方向をきめて、それにそって進むのがよいと思う。

班は人命救助に関連のある技能章、たとえば救急章、伝道章、人命救助章、消防章をとるようにするか、あるいは、野営とかそれに関することに熟達する意図から、野営章、炊事章、木樵章のような技能章をとろうとするか、あるいはまったく

方針をかえて、目標を各班員が1つ以上の技能章をとって、班全体で救急とか野営術に熟達するようにするのである。

さて、これは1つの方法、非常に良い方法であるが、もう1つまったく悪い方法がある。それは、つまり、各班員に技能章については好きなようにまかせることである。おそらく、起こると思われることは、2、3のスカウトが寄りあって規約集にのっている技能章一覧表に目を通して、こんなことを言うことであろう。「航空見習章？ あれはむずかしすぎる、あれはやめておこう！」「運動競技章？ むずかしすぎる」「木樵章？ あれは戸外へでかけるってわけだな」「野営章はしちめんどくさい」こんなぐあいに、次から次へと技能章を取捨し、とどのつまりは、とるにも足らないような技能章を、「これがやさしそうだ、いっちょ、やるか」といって選ぶ。ところで、おそらく、私はまちがっているであろうが、やさしい技能章はとるに値しないと思う。新しいことを習うのになんの努力もせずに終わったり、1回も失敗しないようでは、それはわれわれの精力と努力を要しないような技能章であるから、それは自慢することのできないものである。どんなに道はけわしかろうとも、諸君が興味を感じて追求する課題を決定したほうが、はるかによいと思う。

これは、われわれの班が救急作業とか野営とか特定のことに総がかりのときには、全体的な方針として、万事うまくいくが、いくつかの技能章をとりませたときには、趣味に応じて各個人にあった技能章を選ぶべきである。この場合には、全班員が1つの特定の趣味を持つのは賢明であるとは思われない。おそらく、各班員が1こずつ趣味を持てば、班は強力になろうし、班生活のおもしろ味は増すし、他の者の興味を引くこともできる。この種類にはいるものには切手収集章、製綱章、射撃章、音楽章などがある。このときには、選択はスカウトに完全にまかすべきであると私は思うが、同時に、班長はスカウトが必要を感じるようならゆる援助と勇気づけを与えるべきである。

第3番目の種類の技能章は第1番目に関連するところのある、公共奉仕の技能章である。ここで

は、われわれはかなり高い水準を置かなければいけない。これは、われわれの努力だけではだめである。われわれは、技能章がわれわれに求めることをすべて知っていなければいけない。というのは、これらの技能章を着用するときには、われわれは天下に「われわれはスカウトである」「われわれは人命を救助できる。われわれは救助法の知識があるし、必要があれば、それをする意志がある」と公表しているのである。意志があるだけではなんにもならない。技能章の範囲にあることは、やらなければいけない。

この公共奉仕は、ほんとうに重要である。公共奉仕をこんなふうに見てみよう。つまり、「善行」と「そなえよ、つねに」をとり上げるのである。この2つは公共奉仕のすべてであり、諸君の班全員が——精神的にも、肉体的にも——手助けが必要なきときには、援助をするように仕向けるのは、班長の務めである。しかし、その意志だけでは、じゅうぶんではない。いいかい、私が自転車でひっくり返り、鎖骨を折ってしまったとしよう。諸君の班は私の苦しさもかえりみず笑い、口笛を吹きながらやってきた。班長である諸君は「おや、君たち、犠牲者だよ。善行をするいいチャンスだ」そうして、全班員は、笑い、冗談をいいあいながら、彼らの善行をしはじめる。次長は私の足をふんづけ、膝をねじってしまう。3番スカウトは私の目にリュックサックを押しあて、諸君が私の手当てをおわるときには、私の鎖骨骨折はたいしたことではなく、その他にひどいめにあうでしょう。私が回復したときには——たとえ回復できたとしても——私が最初に思うのは「班員が手当てをしてくれなければ、もっと回復が早かったろう」ということであろう。

こういうときに公共奉仕章が役にたつ。ここで、諸君と諸君の班は援助の技術を習うようになる。諸君は方法を習うが、その一部を習っただけではなんの役にもたない。であるから諸君の班を技能と意欲のある班に育てあげるようにしなさい。そうすれば、私が事故にあっても安心して手当てしてもらうことができるであろう。

さて、技能章について総体的なことを1つ。た

しかに、諸君の班員に各群——スカウトクラブ、趣味、公共奉仕——の技能章を少しずつとらせるようにしなさい。こうすれば班員がバランスのとれたスカウトになれよう。私は互いに関連した技能章を持っているスカウトを好きになれない。彼は専門屋になって——狭い領域の熟練者——しまう。われわれはスカウトが人生のすべてに参加できるように、彼らがほんの少ししか人生を味わわないことがないようにしたいと思う。

技能章のこういう問題についてはこのくらいにして、まったく別の方向から諸君は班長として技能章をどういうふうに扱っていったらよいかを話そう。少なくとも年に2回は、諸君は技能章考査をひととおり読んでほしいと思う。諸君が班でやったらよいようなことが、あれこれと思ひあたりにちがいない。これから諸君にやってもらいたいと私が思うことを、技能章考査を読み通した結果、私の心にうかんだことを、各技能章ごとにあげてみる。諸君が以下の提案を試験し、また諸君自身の考えも実施してみるように希望する。

航空見習章：今度諸君が野営にいったときに、飛行機が1機野営場に不時着をしたと仮定しなさい。諸君の班を、飛行機が不時着したときにはどう行動したらよいか、そのためには各班員はどのようなことをすべきであるかを知るように、訓練をしなさい。ことによっては野営地を移動したり、撤去することになるかもしれない。しかし、あまり気にしないで、これを迫真的にやり、ほんとうに飛行機が不時着したら、どう処置すべきかを班員にはっきりと認識させなさい。

飛行機模型章：これは、たいして想像力を働かす必要はないが、とばすことのできる飛行機の模型を作ったらどうであろうか？ これを作るためには、航空スカウトになる必要はない。これはおもしろいし、冬の午後に、諸君が班全体の協同作業としてやってみたらよかろうと思う。

航空管制章：これは観察である。頭の上を飛行機が飛び過ぎるときには、かならず、その機種をあてるようにしなさい。

釣章：このことについては、言いたいことがたくさんあるが、1度魚釣りにでかけて、魚を料理することである。次の機会には、班または班の2、3名と野営をして、許可をうけた上で魚釣りをしてみなさい。すばらしいスポーツである。諸君が少年時代に釣りを覚えれば、年をとってからはるかに上達するであろう。

運動章：適応性およびそれを保つことは、スカウトの務めである。とくに、班がスカウトペースができ、それを活用できるように、諸君にお願いしたい。

木樵章：週末野営の1回は、テントを持っていかないようにする。わざとテントを持っていかないのは、諸君の班が仮小屋を作って、それを使うようにするためである。

水夫章：これはかなりむずかしい技能章であるが、普通の考査にはないもので、やっておかなければならない結索がいくつかある。班はこれらの結索を試しておくのがよい。フィッシャーマン・バンド、カリック・バンド、シングル・ウォール・ノットおよびマッシュ・ウォーカーなどには諸君は少し手こずるであろう。

図書章：ときには、班員の読んでいる本を調べ、また、諸君の愛読書を話してあげなさい。班員どうし本を貸しあい、ハイクや野営にいったときに読んだ本のことを話し合いなさい。諸君は図書館の会員であるか？

写真章：班員の中でだれかは写真機を持っていると思う。隊員の知らない間に、隊長を盗みどりするの、忍び寄りの技能とか班がやってきたあらゆるおとり作業に役だつと思う。

野営章：このことは、すでに述べたが、諸君は道具と食糧の一覧表を検討し、たびたびそれを修正するようにしなさい。

炊事章：がいして、スカウトは炊事がへたである。おそらく、あまり炊事の練習をしないためであろう。今度日帰りのハイクにでかけるときには、サンドウィッチを家に置いて、途中で調理するようにしなさい。

舵手章：この技能章を得るために、海洋スカウトになる必要はない。水上のスカウティングは、

だれにとっても、楽しい。海洋スカウトは、とうぜん、他のスカウトより、水上スカウティングを多くするが、すべてのスカウトは船のことをいづらか知っているべきであり、少なくとも4種の引き船を見分け、各部の名前を知るようにしなさい。

設計章：諸君の班コーナーとか、デンの設計をしたもどうか、新しい掲示板、班のトーマスの新しい飾りなどがある。全員がこれに参加するといふ。

消防章：手はじめに、隊本部と班のデンの防火を点検したらどうか？ 火災保険に手落ちはないか、隊長に聞いてみるのもよいし、班に「消防夫の腰掛結び」あるいは「スパニッシュ・ボウライン」を使わせてみたらよいと思う。後者は優れた結索であると思う。また、2階の窓から救助作業をしてみるとよい。

救急章：われわれは、救急をたびたび、やっているが、諸君の班員に確かめておきたいのは、電話が使えることおよび班員から班員への口頭による伝言が正しく伝えられるようにすることである。

園芸章：諸君が庭または空地を持っていて園芸を実験できる状況にあることを希望する。地面をたがやし、植物を植えることほど興味のある、価値のあることは少ない。

案内章：これは班の誇りになることである。諸君が諸君の地区の道にくわしくなり、不案内な人の案内ができるようになりなさい。発展し、変化している地区に住んでいれば、諸君の知識を新しくするように努め、新しい道路を通り、新しい街路名とか新しい学校の名前を知るようにしなさい。

趣味章：よい班は、少なくとも1月に1晩は、新しい趣味を試みるために、使うものである。製本、大工、印刷、金属細工など、素人いかけ屋というのはどうであろうか？ 簡単に、ふいごをつくり鉄のたたき方を習って、なんらかの形の物をつくる。考査の最後にある、長靴か革靴の底のはりかえはどうであろうか？ これができる班はたくさん資金が造成できよう。

修理章：手はじめに、班のデンの整備塗りかえ、必要な個所の修理をし、人のために役だつその他の仕事をさがそう。

人命救助章：この技能章で言いたいことはたくさんあるが、まず人工呼吸法が正しくできることがたいせつであり、これはどこでもできることである。

言語章：外国語を少し知っているのは、よいことである。班集会で10分間フランス語かその他の外国語だけを使って進行をしたらどうか？

射撃章：これはあれこれ簡単に提案ができるような技能章ではない。というのは適当な条件と適当な射撃場を持たなければならないからである。しかし、優れた班長は地方のライフルクラブの許可をうけて、そこへ班員を連れて行って、班員が技術を習得する機会を与えるようにするものである。

自衛術章：これはあらゆる種類のスカウト競技、拳闘、柔道、レスリング、体操などである。諸君の班員が自衛の訓練をし、自分の手足を使う術を習得するように希望する。

伝令章：優秀な班長は、班員の持っている自転車がより整備されており、班員が交通規則を厳守するよう監督するものである。

伝道章：これは班にとってすばらしい技能章である。班は病人の看護法、病人が病床に伏しているときにシーツを変える方法、病人食の作り方を学ぶ。交代に病人役に回り、班員に病人食を試食させなさい。

音楽章：これは人に迷惑にならないところで練習すべき技能章である。しかし、諸君の班が班の歌を持ち、それを作ったり、習ったり、歌を所望されたときには、喜んで歌うようにしてほしいと思う。

漕艇章：川とか運河の船旅に班員を連れだし、命綱の投げ方を習ったりしてはどうか？ 命綱は練習が必要であるが、寒い朝戸外でするのにもってこいのものである。

観察章：班員が交代にキムス・ゲームをやるようにしなさい。

管楽章：管楽器が好きな者は、これを練習し、で

きない者はあえてするまでもないことである。
乗馬章：諸君の班が30分乗馬の練習をしようとするときはまず貯金をすることである。3回映画へ行くぐらいの費用がかかるだけである。若いうちに乗馬を習えば、年をとっても長く乗馬をつづけることができる。

製綱章：これは、たいへんな作業であるし、スカウティングではあまり使わないようである。これはかなりの忍耐が必要である。しかし、諸君の班が持っている綱のより方を習得するように、ときどきやってみるよう希望する。輪まわしは興味あるスポーツであるし、スカウトに綱への親しみを増させることから、結索への助けにもなる。

書記章：これは班活動ではないが班のうちの1人は記録を整理したり、班の図書を管理する役目をつくるべきである。

信号章：信号は、何もすることのないときによくびたりとはてはまるものである。近くに住んでいる班員同志が信号灯で家から家へと信号をおくことができよう。信号を使っているいろいろなことを考えだすことはできようが、信号は活気と真に迫ったものとすべきである。

愛玩動物章：これは園芸章と関連を持つ技能章である。諸君が部屋を持っていれば、鳥を2、3羽、あひる、あるいは兎をかってみたまえ。班の山羊、班の兎を持つのは悪くない。手軽なものにしない。

弁論章：独創的な管火劇を自作し、それを班のデンで練習し、自信をもって演技できるようにしなさい。

忍び寄り章：「野原を半マイル横切り、所定の場所にいる監視人に近寄り」班員は、交互に監視人の役になり、いつ、どこで、どんなふうに忍び寄る者を見つけたかを報告する。

切手収集章：班としては、たいしたこともできなからうが、近くに収集に興味を持つ者がいるにちがいない。その人に班にその宝蔵品を見せてくれるよう頼んではどうか？

星座章：第1に、班の各員が北極星を見つけられるようにすることである。

水泳章：班の各員が水泳ができ、しかも上手に泳げることは班の名誉になることであり、機会あるごとに練習をするようにしたいものである。

測候章：数か月間、天気を予測するようにし、天気を予測するのに役立つ各地方のいい伝えを知るようにする。

ウッドクラフト章：これはもっともよい技能章の1つである。いくつかの収集を作るようにすすめる。班がハイクにでるたびに、何か新しいものが見つけられよう。それを持ち帰るか、絵に描くかすれば、その名がわかろうし、そのなんであるかもわかる。

さて、私は諸君のために技能章を一覧した、上に述べたことは、心にとまった非常に簡単なことである。もう一度この表を見通すならば、同じぐらいのことを、また、いろいろと考えさせられるであろう。

これら技能章は単なる考査ではなく、探検への招待である。諸君が正しい精神でこれを読み通すなら、どの技能章もこんなふうに呼びかけるであろう。「さあ、1つやってみたまえ」けっして「技能章に合格する」ことばかり考えるな。われわれを新しい世界へ新しい経験へ導き入れるものとして、技能章を考えなさい。もし諸君、班長たちが、技能章のことにときどき関心を注ぎ、技能章をプログラムの材料に使うなら、諸君の班員は知らず知らず技能章を取得し、諸君の班は優秀な班となり、技能章きちがいになって、技能章の考査に合格するだけでおわってしまうことはなからうし、また、卓越したというか、無知というか、次のようなことを言うものにもなるまい。「技能章なんか興味ないね」自然な、楽しい方法で、技能章をえるのが真のスカウトである。そうやってほしいと私は望む。



『班長の手引を読んで』

故中村知

私は、この章で、ひとつの大きい指摘に出あった。本誌2ページ、右欄の下から11行目に——
「自分がとりたいと思う特定の技能章を、ある程度自由意思で選ぶことができるといえるが、全くの自由というわけではない。私は班が班会議で班全体として1つの作業方向をきわめて、それにそって進むのがよいと思う」

とある。原文は——
every Scout ought to be left free to chose the particular Badges he wants to go in for, but not entirely so. I think it is a grand thing if a Patrol sits down and at one of its Council Meetings decide particular line along which the Patrol as a whole is going to work. (原本 p.148)

以上の提唱は、技能章の選択に二つの方法があって自由意思で選ぶ場合と、班全体の作業方針から割り出して分担的に選ぶ場合とがあること、そして、あとの場合は、その学習が班活動に反映して、パトロールシステムをもちあげるものだという趣旨に解する。原文中の but not entirely so. という点に、意味がある。すべてが自由選択ではない、というのである。

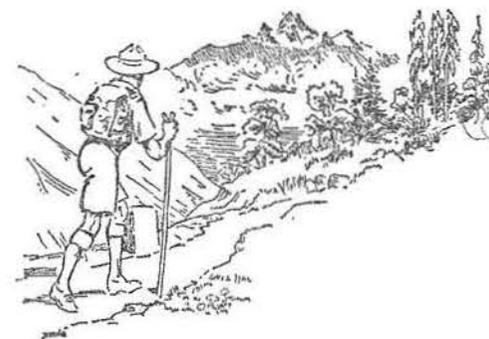
私は、かつて、班の全員が皆、ある一つの技能章を獲得したならば、その班の班旗に、その技能章をつけさせてよい。ときいたことがある。私の隊でやってみたこともあった。これは、規約にはないのだが、やってみて、それがその班の伝統と名誉とに一つの筋金を入れた経験がある。はたして、それがよいことかどうか、ご批判を仰ぎたい。

この「班と技能章」の項において、サーマンは、次の点を注意している。

○とりやすい技能章のみを選ぶことは感心しな

- い。
- 努力せずにとるのは、感心しない。
- 技能章をとりさえすればそれでよいのではない。
- 各自の趣味を伸ばす技能章もあるのだから、それを妨げてはならない。
- 班としての計画と、個別の趣味と、その技能が、公共奉仕に寄与するものであることの、この三つのバランスが、とれなくてはならない。
- 意思の表示だけではなく、能力と自信とそれに値することが伴わなくてはならない。
- 班を、技能と意欲のある班に育てなさい。
- 私は、偏向した技能の人を好まない。それは、狭い分野の専門家を作るにすぎない。もっと幅のある、バランスのとれた人間を好む。
- 班長は、少なくとも年2回、技能章課目の規定を読むがよい。そして班の計画をたてなさい。と、記している。

まことによい教示である。
私は、技能章制度について、もっと勉強すべき必要を感じた。
講習会での技能章についての講義も、考えなおす必要がありそうである。
なお、英国の少年技能章41種の解説があるのは参考となろう。



班長の手引

—THE PATROL LEADERS' HANDBOOK—

ジョン・サーマン

今回、班制教育のよりいっそうの発展を願って、ジョン・サーマン氏著「班長の手引」を再掲載する。初版は1950年に出版され、これは1955年版の訳稿である。これが掲載されてからすでに18年の年月が経過しているが、指導者諸氏が熟読され、じゅうぶん咀嚼して実り多き班制を実現されるよう希望する。

《第14章 班と戸外活動》

これまで、班のことをいろいろな面から取り扱ってきたし、班長としての諸君の役割をいろいろな状況の下で研究した。

この手引書の中で、私が戸外活動のことにたびたび触れていることに諸君は気がついていると思う。戸外の川辺でのスカウティング、山や、森や、野原や、公園や、庭でのスカウティングにである。

諸君は知っていると思うが、スカウティングが始まったときは、だれも本部建物を持つとは毛頭思わなかった。事実、多くの班は街灯のある街角、野原の納屋の中とか——ちょっと集まれるところ——に、適当な場所を見つけては集まり、活動をつづけてきた。

街灯の下で集会を開くなんてことはありえない（少なくとも私はそう思う）が、街灯は集まるには便利な目印になるから、全員がここに集まって、そこからスカウティングの目的地に決めたところに班はでかけるということであったろう。

班は隊よりも先にできあがったことを諸君は、ここで、思い出してください。私が、前にも、隊は班に分割するのではなく、隊は班からできているといったのは、以上の理由からである。要するに、班はスカウティングで最も古い、最も重要な

単位である。ところで、班がいくつかできると、それらは寄り集まって隊を作り、そのスカウティングはたいてい土曜日の午後のスカウティングである。班と隊は森や、町から少し離れた野原に集合して、スカウティングというゲームをするようになった。これは、今いうところのワイド・ゲーム（Wild—暴れる—のではなく、Wide—広々としたところをする—である）のようなことをした。

ワイドとは、かなり広い場所で行われ、その中身は忍びより、変装、とどのつまり、ちょっとしたかすり傷をつくとかいうものからなっている。それからもちろん、ゲームが終わると両チームは広場の中央に集まってたいていは火を起こし、料理をこしらえてでき事を話しあったり、次の週の計画をたてたりする。隊長はおそらく、夜話を聞かせやがて歌をいくつか歌うという習慣ができ上がり、今やっている営火が生まれたのだと思われる。

これは、私が個人的に確信していることではなく、この物語は私の仲のよい友だちの経験した話として聞いたことであるが、ハムステッドという所の荒地で忘れがたいゲームが2人のコミッショナーによって行われたということである。このコ



スカウト帽と軍服でみなりを……

ミッショナーたちは、馬の背にまたがり、スカウト帽に軍服で身なりを固めて、武装までしていた。ゲームは拳銃を空に向けて発射する音を合図にはじめられた。話はそれだけではない。ゲームは開始と同じ方法で終わることになっていた。というのはこの威だけだかな馬上の紳士に恐れをなしたスカウトたちは、忍び寄りを最大限に発揮して、こっそり見えなところにもぐりこんでしまったから、こうするより仕方なかったのである。

私は、またキャンプに拳銃をいつも持っていく隊長の話聞いたことがある。この隊長は夜間に妙な時間に拳銃を発射させたということである。彼の意図はわれわれ全員が常に備えていなければいけないということにある。このことは正しいが、彼のやり方は、妙である。「子どもはおどしつけるのがよいと信じている」と口ぐせのようにいつか聞いていた。これでは、思うとおりにいかなければ、全く、おかしなことである。

われわれのスカウティングのゲームに話を戻そう。土曜日の午後のスカウティングというところまで話したはずである。それから、こんなことが起こったものと思われる。しばらくして隊は、もし、火曜日の夕方に集まって、次の土曜日の計

画をたてたり、また先週の土曜日のことを反省してみたら、次の機会には、ゲームをもっとうまく進められるのではないかということに気がつくようになった。

そうして、今のように、スカウティングの大悲劇ともいえる悲しむべき事態が起こってしまったのである。つまり、隊は、だんだん、火曜日の晩に集会を開くようになり、土曜日には外へでなくなってしまい、われわれのスカウティングの大部分が、B-Pの名言を借りれば「お座敷スカウティング」になってしまった。すなわち、スカウテ

ィングを実践するかわりに、スカウティングをもて遊んでいるのである。

私は、前にもいったと思うが、班のデンとか、隊ルームは、どんなに美しく飾りたてても、どんなに工夫をこらしても、そこはスカウティングのやり方を学ぶところであって、スカウティングを実践するところではありません。われわれは、学びおえたときには、森や、野原や、山や、川にでかけていき、そこでスカウティングをすることである。私が諸君に、諸君の班員の訓練は迫真的であれとか、1つの結索を班のデンで習ったら、戸外に出かけてゲームや、橋や、戸外のどこでも、実際に使ってみるようすすめたのは、このためである。

昔、ある人がとてもいいことをいった。私は、このことはすべての班長が知っているべきことであり、また国中の全国の班のデンと隊ルームにこのことを額縁に入れてかかげ、この運動が戸外活動の運動であることを皆にいつも思い起こさせるようにしたいと思っている。それは「文明は森や、野原や、木々の代用にはならない。しかし、これら自然物がわれわれの中に生みだす精神は文明をつくり、文明の冷たさをやわらげることができる」

キャンプに行き、橋をつくり、ハイクに出かけ、漕艇をするのは楽しいが、自然人であることは、永久に変わらないのであるから、こういう楽しみは非常にたいせつである。われわれは自然から成長するし、自然に属している。われわれが自然にとどまることのできる唯一の満足な方法は、いつも自然界に戻り、静かな知性的な方法で、われわれが大地に根ざしていることを悟ることである。

私は、諸君がその他のいかなること——すべてささいなことであることを望む——に班長の任務がおろそかになろうとも、けっして、班員を戸外に連れていくことを忘れないようにと、念を押しておこう。

ちょっと、2つの班を比較してみなさい。1つは定期的に大きな火を囲んで集会を開き、世界を相手に激論を討つ。彼らは、安楽椅子に深々ともたれたままでも、ありとあらゆる結索をこなすことができるし、彼らがモールス信号を3フィート先に送る速度は——全く無益であるが——驚くべきほどである。彼らは、きちんと、完全に、お互い同志ほうたいをすることができる。つまり、彼らは理論どおりにすべてやれる。

彼らはたくさんの技能章を持っている。彼らのユニフォームは、いつも、清潔で、きれいにアイロンがあててあって、しわは1つもないし、全班員が髪をキチンと分けている。

この班ともう1つの班とを比較してみよう。彼らは自分たちのデンに集まるが、それは彼らが必要とする道具を取りに来るときだけで、用がすめばすぐに出てしまう。計画のあるときもあれば、何もないときもある。天気が良いから雨が、雨の日であろうが、おかまいなく、外に出ている。ユニフォームは、時々、あかじみているし、彼らの結索用のロープは、木の枝を伝わって川を飛びこすために使ったので、新品のような形はしていない。彼らも世界を相手に議論をぶつが、そんなに深刻にすることはない。彼らの信号は、前の班ほどに速くはないが、彼らは少なくとも丘から丘へ送信することができる。彼らはあまりたくさん技能章を持ってはいないが、よく調べてみると、彼らは数は少ないが役に立つ技能章を持っているこ

とがわかる。

諸君がこの2班を比べてみれば、最初の班のほうがカッコイイというに違いあるまい。諸君が、いわゆる頭脳重点テストで両方を試験すれば、最初の班のほうがよい点をとるといであらう。さて、どちらがすぐれたスカウトといえるか？ しかし、これはたいした問題ではない。問題はだれがスカウトかということである。班長ならだれしも、どちらの班に自分の班を持っていくか選ぶことができる。私がカッコのよさと優秀さを軽視していると思わないでほしい。そんな気持はまるでない。しかし、カッコのよさと優秀さは真の戸外スカウティングを基礎とすべきである。結局、諸君のユニフォームをカッコよく保とうとするのなら、その最も確実な方法はユニフォームを全然着ないでしまっておくことである。中には、こういうスカウトもいる。

スカウトにしる、班にしる、もっと多くのスカウトや班が、室内で集会するより、戸外で集会することをもっと多くすべきである。

来年は記録——諸君が好むなら、班日記——をつけて諸君の班の全活動を記録し、3か月ごとに室内で過ごしたのは何時間、屋外で過ごしたのは何時間と通計してみなさい。もし屋外の時間が室内より長くはないようであるなら、ほくは「たいした班長ではないな」と自分にいい聞かせなさい。さて、私は雨が降ろうと、寒かろうと、暗かろうと、いっこうに気にかけない。

もし諸君の班が「お天気屋」であるなら——まあ、班は存在するにはあたらぬ。私の隊にいたある班長ほど徹底する必要はないと思う。一夏、この班長は土曜日の朝に雨が降っているときだけキャンプに出かけるようにした。当然、これには表面にあらわれたこと以上の理由があったわけである。班長は雨の土曜日は日曜日が晴れるということの意味するといっていたし——この夏にかぎっていえば、彼のことは正しかった——また、土曜が晴れなら、日曜日は雨ともいっていたし、キャンプで過ごす時間は土曜日より日曜日のほうが長いのであるから、彼はまず雨を通り抜けるようにしたのであった。この班長のキャンプ期日を



選ぶこの妙な方法にたいしてあげ足をとったり、冷かしたりする者はいたけれど、この選び方はたいしたことであった。彼は班員にどんな天候の下でも設営をし、薪がびしょりぬれているときに火を起させ、どしゃ降りの中で炊事をさせ、雨の日に価値のあるスカウト活動を実施し、雨が川のようにあふれている中で寝床をつくらせるなど、彼の班員にすばらしい体験を与えた。何度、彼の班員は雨が晴れ上がったあとのあのすがすがしい目覚めを味わったことか。おまけに、隊や地区で夏の終わりにやる班対抗競技会のときには、この班は好敵手となる対抗班がおらずに、いとも簡単に優勝してしまった。しかも、この班は私の知る限りで最も楽しい班であった。彼らは悪条件にいとむことを常とし、それに対処して、体験を積んでいったのである。

天気の良い週の終わりに、金曜日とか土曜日にギルウェルにキャンプの申込みをするため電話がけたたましく鳴り、どの班のスカウトも、異口同音に「明日キャンプをしたいのだが」というのを聞くにつけ、私はあの班のことを思う。これはキャンプの問題を扱う1つの方法であると思う。しか

し一方、もう1つ、もっとよい方法がある。諸君知ってのとおり、あらかじめキャンプに行く日を定め、天候がどうであろうと、条件がどうであろうと、出発することである。

諸君の班が、ときには、洪水でテントから放りだされたり、テントが風で吹きとばされたり、寝床から起きだしてみると、食糧貯蔵テントに雨が浸み込んで、小麦粉が濡れてしまったり、風のためにミルクが吹きとばされたりする体験を積むことを望む。諸君が2時間もかかって朝の火を起したり、私も経験したことがあるが、こういう困難な思いをして、びしょ濡れになって、くたくたに疲れて重い足どりで家に帰るあのなんともいえない大きな楽しみ、困難な条件に取り組みそれを克服できたときに味わうあの満足感を体験してほしいと思う。それは、諸君がどんなことからえられない感情であり、諸君がこの感情を味わわずにすますなんて、私は考えたくない。

しかし、諸君は昔われわれがしたようなほどまで、無理をしないように気をつけてください。私は友だちと2人で小川の真中にある非常に小さな場所にキャンプをした。その場所は、ほんとに狭

くて、ちょっとした小部屋ぐらいの大きさしかなかったほどであった。

万事に悪いところはなかった。水の上から6インチほど高くなっているし、テントを張るのにもってこいのなめらかな場所があった。われわれが、そこへ行ったのは、イースターの日曜日であったと記憶している。

われわれはテントをたて、夕食をたべて、寝床にもぐり込んだ。夜にはいって雨が降りだしたようであった。われわれは、少しばかり不安になってきた。3時ごろになると、われわれが心配になるほど水がテントの中にはいってきた。寝床からぬけだして、テントの中から外をのぞいてみると、地面は跡形もなく消えうせて、われわれは川のだ真中でキャンプをしているようになっていた。とんでもない体験であった。われわれはびしょ濡れになって、からだもこごえてしまったが、かろうじて対岸にたどりつき火を起し、持物を乾かした。あれからかなりの月日がたったが、なんの病気にもかからなかったのはもっけの幸いであった。

たしかに、スカウティングの実際の際は戸外であり、班のデンではない。班のデンはわれわれが冒険に出かける出発点であり、あとでまた戻り、冒険の反省と次の計画を練る場である。もし、諸君たち班長が諸君のデンを起点・終点とだけ考えておれば、その考えを持っているかぎり、諸君は正しい考えを持っているといえる。

『班長の手引を読んで』

故 中村 知

この章で、ジョン・サーマン先生は、班というものは、隊よりも先にできたものだ、と、いうことを再び説いている。

現今では、隊のほうが先にでき、班は、あとから組織されるのがふつうの順序であるが、これは、スカウティング発生の本来の形ではない、と、いうことを考えさせている。

しかも、その班は、戸外を「場」として生まれたもので、建物というもの、施設というものは考えてもいなかったのだと、指摘している。

正に、そのとおりである。レイノルズ著「スカウト運動」にも、創始期の実話が載っている。

だから、班というものは、スカウト運動における、いちばん古い、いちばん重要な単位なのである。それは、今日において再確認されるべきことなのである。

○彼らは、班を組んで、戸外活動をした。

○ワイドゲームをした。

○追跡、忍び寄り、変装をし、火を作り、食物を調理し、火を囲んで夜話をした。

○それが今は「お座敷スカウティング」(parlour scouting) になった。

○playing at Scouting instead of playing it. スカウティングをするのでなく、スカウティングを、もてあそんでいる。

(playing というコトバに二つある！)

と、サーマンは、キツイ批判をしている。

○隊ルームや、班のデンは、スカウティングをするところではなくてそのガクヤ(楽屋)である。

○舞台(ぶたい)は戸外である。

○それゆえ、班日誌には、
戸外で何時間したか。
屋内で何時間したか。

記録しなさい。

○屋内でしたほうの時間が多かったら、君は、タイシタ班長ではありませんぞ。

○戸外活動にも、いろいろある。

雨天の土曜の夜からキャンプする班長なら君はタイシタ班長だ。

と、サーマンはいう。

私は、このコトバに共鳴する。よりによって雨中ハイクしたり、嵐中ハイク、またはキャンプをしたことのある私にとって、このコトバは、わが意を得たりと、いいたい。

今日のラグビー選手は、雨の日には決して練習しないそうだ。好天のときにはばかり練習する。ところが、スポーツの中でも、ラグビーは晴雨を論

せず、どんな悪天候でも試合を決行することになっている。雨になるとグラウンドは、ぬかるんですべるから、ドリブルパスの戦法をこきざみにとる。ボールが水分をふくんで重量を増すからパスオンの投げ方も力を加えなければ届かない。キックはボールが重くてとばない。タックルも、足が泥にすべってうまくゆかない。風が加わればいっそう難戦で、とてもオープンへまわしてのラッシュはおぼつかない。そこで、昔は、雨天を特に選んで練習したものだが、今日のラグビーは、それをやらないからお話にならぬ——とあるOBは評していた。

それと同じことが、スカウトのハイクやキャンプについてもいえると思う。ただし、防水・防寒・重量の計算、雨中の火おこし、調理などについての配慮はじゅうぶんしなければならない。健康

を害しては逆に有害となる。

「しかし、諸君は昔、われわれがしたようなことまで無理をしないように気をつけてください」と、サーマンはいう。なるほど——

川の中でのキャンプの実話もおもしろい。

この章の中ほどで、サーマンは——

「文明は、森や野原や、木々の代用にはならない。しかし、これら自然物が、われわれの中に生みだす精神は、文明を作り、文明の冷たさを、やわらげることができる」

と、いう自然観を述べている。おもしろいので、次にその原文を紹介しておこう——

“Civilization is no substitute for the Woods, the field, and the trees, but the spirit that these things engender in us made civilization possible and will keep it tolerable.”



世界中の移民や狩りうどや探検家は、みんなスカウトだ。彼らは何でも自分でできなければならない。

班長の手引

—THE PATROL LEADERS' HANDBOOK—

ジョン・サーマン

今回、班制教育のよりいっそうの発展を願って、ジョン・サーマン氏著「班長の手引」を再掲載する。初版は1950年に出版され、これは1955年版の訳稿である。これが掲載されてからすでに18年の年月が経過しているが、指導者諸氏が熟読され、じゅうぶん咀嚼して実り多き班制を実現されるよう希望する。

《第15章 班とハイカー1》

スカウティングのすべての活動の中で、ハイキングほど楽しいものはないと信ずる。私は、大きな荷物を背負って途方もなく長い距離を踏破するのが楽しいというのではない。私は、そういったことには、あまり重きを置かない。私のいいたいのは1級章基準の、12ないし14マイルを2日間、手ごろな荷物を背負い、その荷物にはできるだけ楽しいときが過ぎるだけのじゅうぶんなものはいっているハイカーのことである。諸君が知ってのとおり、計画性をもってかけたのに、楽しくないのでは、あまり意味がない。いや、スカウトのハイカーであれば、ほんとうに価値のあるものでなければいけない。仲間と2人だけで、あるいは班の幾人かと、ときには短い距離を班員が揃って行く。年下の者も、距離が短ければ、なんとかいっしょに行けよう。まず、班全員のハイカーのことを話そう。

諸君は、スカウティング・フォア・ボーイズで班の編成を示す図を見たことであろう。さて、何百万ものスカウトがこれを見ているのにちがいないのに、いまだもって、私はそれを使っている班を知らない。先を争って進む班、ワニの進み方で進む班、あるいは、2人、3人ずつかたまって行く班もある。もう1度あの図を見てください。そ

うすれば、老総長が班の編成で意図した3つの重点がわかってもらえよう。とくに、ハイカーについては、われわれはそれをよく理解しなければいけないし、それを実行に移してもらいたいと思う。

第1の要点は、君たち班長のことである。諸君は先頭に立って指揮するのでも、しんがりについて指揮するのでもない。諸君は真中に位置して指揮をする。さて、これは諸君には不思議に思われるかもしれないが、諸君はすぐにそれが指揮するのに最上の場所であることを知るであろう。この位置にあれば、いつでも諸君は班のだれとでも連絡がとれる。諸君は、前や、後や、脇で、どんなことが起こっているかを、正確に知ることができる。たしかに、ハイカーでは、班長が中央にいるのが最上の場所である。

第2点は次長である。彼は先頭に立ち、地図と磁石を持って、進路を見定める先達である。諸君は彼と緊密な連絡をとっているが、彼は先頭にいるのであるからハイカーで進路を知るのににたけた、経験のあるスカウトでなければならない。

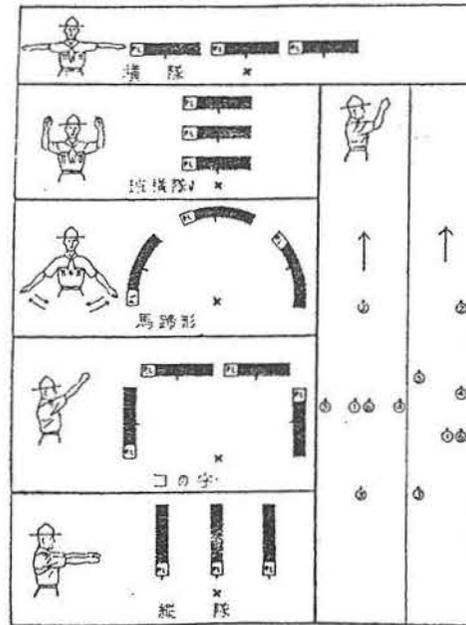
第3点は初級スカウト、つまり、先週加わったばかりの者、あるいは、少し前にカブから上進したばかりの者のことである。彼は諸君のそばにおく。班に置きざりにされまいとして後からあたふたとしてくるようであったり、先頭につきだして沼に落ちるような目にあわせ、垣根を越えさせ

たり、牛の放されている広場に最初にはいるようにしたりしてはいけない。

これは次長の仕事である。彼は諸君のそばにいて、諸君が彼を知り、彼が諸君を知るようにして、お互いによく理解しあえるようにする。とともに、諸君はスカウティングの技術とハイカーの技術を彼に教えるようにすべきである。

この班編成を使いなさい。町の中でも、野にでも、それを活用しなさい。諸君はそれが最上無二の方法であることを知るであろう。全班員がまわりに目を配り、いろいろな事物を観察し、そして、休憩したときに記録を比較しあえば、あらゆる事象を皆で分かちあうことができる。

ところで、どこへハイカーに行こうか？



注：日本連盟ではコの字型の手の合図は使っていない

いうまでもないが、ハイキングは、いつも、なんらかの冒険があるものである。さもなければ、それは散歩と変わりなくなる。散歩に行くのはよいことではあるが、ハイキングのほうがもっとよい。散歩とハイキングの相違は、どこへ行くかによってきまると思う。

諸君が諸君の班をハイカーに連れていくときには、いつでも、諸君の班員の大部分が行ったことのない所を選びなさい。そうすれば、班員は地図と磁石を使うことになろうし、彼は観察眼を開い

て、既存の人通りのある道を通るまいとするであろう。また、彼らは未知の土地に飛びだして行き、新しい事物を見、未知の人々に会い、真の探検から得られる興味を味わい冒険心を満足する。諸君は何千マイルも探検することはない。

チングフォードに住む人のなかにも、ギルウェルの在所を知らない人が何百人となくいることを私は知っている。(ここだけの話だが、私にはそのほうがうれしい気持もするが、あることは事実である) 近所にこんなに美しい野営地があるのに、彼らはそれをのぞきにこようともしない。こんなことは、だれにでもあてはまることである。自分の住んでいる所のことを知らない人はいるものである。彼らは少し離れたところにある森や野原のことは、まったく、知らない。諸君が町に住んでいようと、国のどこに住んでいようと、諸君がどんなに多くハイキングをしようとも、諸君が班長である国に諸君の住んでいる所の半径20マイル以内を完全にハイカーしつくすことはできまい。諸君の班員にハイカーの行先を教えるのばかりが能ではない。諸君は行先を知らなければならないし、諸君に事故のあることを考えれば、次長には教えておかなければいけないが、班員には行先を知らないという冒険の楽しさを味わわせなさい。諸君と次長が、あらかじめ、ハイカーをしておくのが、よいかもしれない。諸君が満足し、あらゆる障害を知りつくし、あらゆる魅力を知り、あらゆるハイカーの価値を知りつくせば、班員たちが同じ道を通るときにことをすべて味わえるようになることができよう。

つぎに、ハイキングの用具について一言。それはあまりキャンプ用具と相違するものではないが、ただ諸君に覚えてもらいたいことは、ハイカーに行くときは、諸君の班員は用具をかついでいかなければならないことである。正しい量の用具を持っていくことは、ただ、経験の問題である。他のことと同じように、最初は諸君は何を持っていったのかかわからない。ここでこそ、班制度を活用すべきである。諸君たち班長は初めてのことはなからうから、初めてハイカーに行く班員に携行すべき品目を教えるべきである。しかし、彼



流れ者のいかけ屋ごとき格好はするな

らにも選択の自由は許すことである。間違った物を持っていったり、必要な物を持ち忘れてきたりすることから教訓をえるようにしなさい。ともかく、出発前に点検をするようにしなさい。流れ者のいかけ屋ごとき格好はするな。見た目のよいリュックサック、グラウンドシートで包んで背負架に、あらゆるものを詰めこんでおく。こまかな物をいろいろとぶらさげて、家から家へと道具を売り歩く行商人のようななりをするな。ほんとうにスマートな風采で出発するようにしなさい。なぜなら、ハイキングに出かけたときに、スマートな見なりこそ、気持よく過ごす一法である。

あるやせて背の高い男がハイキングについて本を書いたが、その中で諸君には非常に長くて、柱の低いテントが必要であるといっている。「太っちょ」はその本を買い、長くて低いテントを買ったが、どうもそれが気に入らなかった。というのは、それは「太っちょ」が買おうとも思わなかった種類のテントであり、彼にはまるっきり役に立たない種類のテントなのである。ハイキングの用具は個人に合ったものが必要である。

それは、それを使う少年に適合することが必要である。であるから、諸君の班員に好みの選択を許すようにしなさい。これは利己心を發揮してもよい機会の一つといえる。われわれは自分で物事を決めることのできる少年を必要としており、こ

の個人的なことにあっては個人の好みに合うようにする。何が必要不可欠か？ リュックサック（小物入れはハイクにはあわない）、グラウンドシート、テントは共有すべきものである。

私は「ビビー」型のテントを愛好している。というのは、それは半分に分割できるし、諸君の間、ないし諸君の班の2人1組の者がビビーを各半分ずつ持つていくことができる。そうすれば、もし諸君が道に迷うことがあれば——さてと、少なくとも諸君はテントの片方を持つていて、しかも半分だけあれば夜は過ごせる。しかし、中にはそれを嫌う者もいよう。諸君のことは諸君で決めなければいけない。

テントのポールをたくさん持つていくようなことはするな。もしテントをたてるポールになるものがないようなら、キャンプに行った場所が悪いのである。——木を切って（しかし幹木を切らないように）ポールにしたり、門柱にくくりつけたり、あるいは、諸君の杖を用いる。杖は諸君の制服の一部ともいえるものであるから、ハイクには杖を持つていくことを望む。老総長は興味のためにそれを入れたのではない。たしかに、バスや電車の中では迷惑するが、B-Pはわれわれがバスや電車には長々と乗ることなぞ思ってもいなかった。それは、後になって、だれかが考えだしたものであった。諸君は諸君の両足で進むことである。そうすれば杖は諸君の制服の必要の一部であることがわらう。けっして、ハイキングのときに、テントをたてるために使うものでないこともわらう。一目でわかる必要具、リュックサック、グラウンドシート、テントはこれで済んだ。ところで、われわれは夜間に身を温める物が必要である。毛布、そのとおり、毛布は妙なことに、軽ければ軽いほど保温がよいし、重ければ重いほど使いにくい。よい毛布の生命はフラップがどのくらいついているか——ついでだが、毛布についているフラップのことで、落ちてしまうようなフラップではない——にかかっている。しかし、なんといいても、ハイクには寝袋がいちばんである——ノミ袋と諸君はいいたいかもしれない。しかし、毎日裏返しをして、よく振って、陽光にあて

なければ、その恐れはじゅうぶんある。寝袋ほど心地よいものはないし、労働でえたお金をためてよい寝袋を購入するのは価値あることである。（労働でえたお金を貯蓄して、諸君自らのハイク用具を買うことは、もっとも楽しいことの1つであると思う）私は諸君が寝袋を所有し、諸君の班員が諸君の例にならうように勧めることを望む。寝袋の種類は多いし、よい物がたくさんあるが、上等品であればあるほど——たしかに、長持ちがするし、暖かく、気持よく、諸君は眠ることができる。

それから、諸君には炊具が必要である。おなじみのギルウェル型炊具箱が理想的である——このごろは簡単に手にはいらぬが、時間がかかっても入手するだけの価値はある。なぜならそれにはハイキングに必要なものはすべて——大鉄鍋、フライパン、炊事にも料理をもるにも使える皿——そろっている。

靴下のはきかえ——これは絶対必要——つぎあて用のウール地、できれば、もし少なくとも遠距離を行くなら、シャツとパンツの着がえ、セーター、防水外套。

さて、多くの人がそでなし外套兼グラウンドシートを好むことを知っているが、私は好きではない。その理由を話そう。諸君は、ほんとのところ、グラウンドシートも防水外套も必要である。諸君が歩いているときには、そでなし外套に悪いところは無いが、止まったときには、一体どういうことになるか？ 諸君はテントをたてなければなら



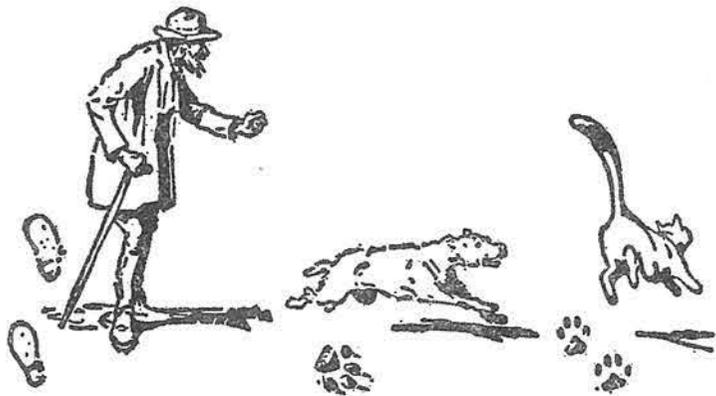
「太っちょ」が買おうとも思わなかった種類のテント

ないし、諸君は荷をほどかなければならないし、諸君が荷をほどく前には、諸君はグラウンドシートを地面に広げなければならぬ。諸君がグラウンドシートを下に敷くなら、諸君は着ているわけにはいかない。着ていれば、荷を濡れた草の上に置かなければならないことになるし、さもなくば、雨に濡れて薪や炊事用の水などを捜し回らなければならぬことになる。これではいけない。軽いグラウンドシートと軽い防水外套を持つて行きなさい。これら2つは欠かせないものである。

食糧袋？ そう、諸君はこれを持つてなければいけない。テント布で袋を作りなさい。食糧に悪臭がつくといけないから防水布を使わないように、小麦袋のお古をよく洗ったりして、リンネル地のものがだんぜんよい。食糧袋はもちろんいるとして、それなら食糧はどうか？ 私は、1級章旅行に2週間分のサンドウィッチを山と積んで持つていくスカウトを見たことがある。たいてい、なかなかまいサンドウィッチであるが、調べてみればわかるが、それはスカウトの母親が骨を折って作ったもので、スカウト自身が作ったものではない。ともあれ、サンドウィッチは冒険にとってうまくない食物である。ハイクにでかけるときに、旅の途中で調理し、料理するものだけ持つていくのは、よい規則である。パンの塊りは家に置いて、粉を持つて行き、ねじりパンやダンパーを作りなさい。運がよければ野兎をわなにかけて、それを森林生活者風に料理することができる。諸君が巧妙であり、熱い石で卵を焼いたり、熱い灰でじゃがいもを焼くとすれば、暖い飲物を作るための小さいブリキのやかんだけを持つていけばじゅうぶんであるから、炊具の重さはぐっと軽くできる。ときには炊事ハイクを班にやらせて、生の食糧からはじめて、調理をし、それを炊事する経験を積ませることである。もし諸君が半分でも班長らしきがあるなら、諸君はそうだと思うが、サンドウィッチなど持たず、缶詰もわずかしか持たないだろう。これもまた、諸君が班集会で練習するとよい。そうすれば、諸君がハイクに出かけるときには、諸君の班員の健康が保証されるし、胃に裏打ちをすることができる。（つづく）



キムは、小麦粉と灰を使ってその男をこじきに変装させた。



家の入口の前にあるなんでもない足跡も解説できれば何かの物語りを語っているかもしれない。これは犬がネコを追いかけて、ネコの飼い主が怒っているという簡単な話の足跡だ。

班長の手引

—THE PATROL LEADERS' HANDBOOK—

ジョン・サーマン

今回、班制教育のよりいっそうの発展を願って、ジョン・サーマン氏著「班長の手引」を再掲載する。初版は1950年に出版され、これは1955年版の訳稿である。これが掲載されてからすでに18年の年月が経過しているが、指導者諸氏が熟読され、じゅうぶん咀嚼して実り多き班制を実現されるよう希望する。

《第15章 班とハイカー2》

諸君の釜と鍋も袋に入れなさい。ハイカーで鍋を清潔に保つのはむずかしい——衛生面できれいにすることはできるが、すすやいぶり跡を完全に消し去ることはできないから、鍋は袋に入れておく必要がある。

以上に、タオル、櫛、歯ブラシ、等々を加えれば、必要なものはすべて整ったことになる。諸君は2、3つけ加えたいものがあるかもしれない。私は非常に重要なものを忘れるところだった。——帳面である。帳面を持ちあるけば、記憶しようと思っても記憶できないことを控えておけるから、その習慣をつけるのはよいことである。われわれが控えておきたいと思うことは楽しいこと興味のあること、われわれが通った場所の名前、会った人々のことなどである。そうすれば、完全な行動記録——それは1級章ハイカーの要件ではあるが——にはならないまでも、生きた記録がとれる。生きた記録であるように

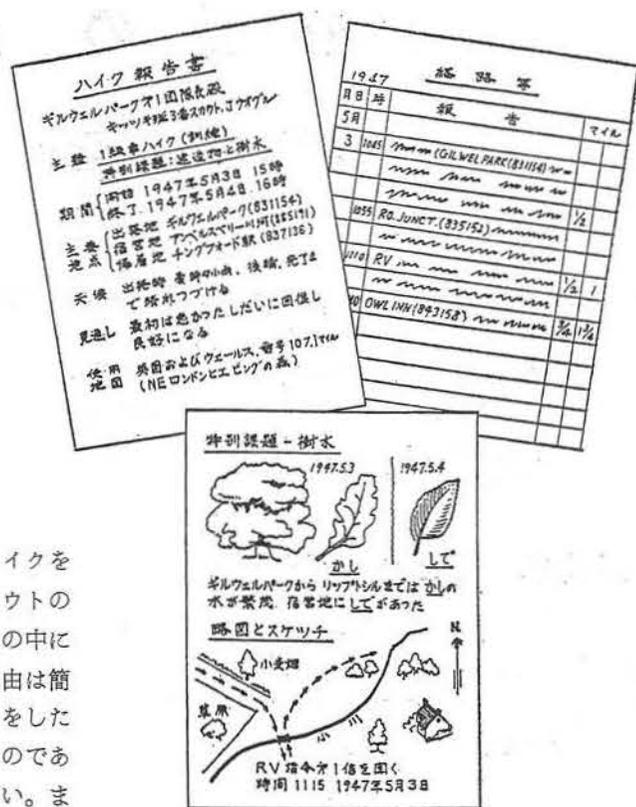
いつも心がける。冬の夜にもう一度見返して、ハイキングにでかけたときの情景を思いだすよすがともなるものである。

ハイキングに行かない班は班とはいえない。それは、ときどき実施することにより。班を1つにまとめるとともに、試練を与えることの1つである。それはよいスポーツであり、よいスカウティングであり、諸君が班長として班員を知ることができるすばらしい機会である。

ところで、1級章ハイカーはどうであろう？ この場合には、地区コミッショナーが諸君の班員を



考査することになる。諸君の班の3番スカウトがそれを受けると仮定しよう。まずはじめに、彼はどんな練習を積んだか？彼は諸君とハイクをしたことがあるか？諸君は彼に諸君の習った技術を教えてやったか？彼は、ほんとに、調理をしたり、テントをたてることのできるか？彼は自分の荷物をまとめられるか？彼は薪の選び方や、野営地での設営の方法や、地図と磁石の読み方や、そういったあらゆることを知っているか？これまでに、彼はハイク報告をだしたことがあるか、それとも彼は一度もハイクをしたことがないか？私はたくさんのスカウトの1級章旅行を見ているが、たしかに、彼らの中にはそれを楽しんでいない者もいる。その理由は簡単に理解できる。彼らはこれまでにハイクをしたことがない——そうして、しなくてもすむのであれば、彼らは2度とハイクに行きたがらない。まずい見世物である。幾分は隊長の責任であるが、主に班長の責任である。班長は彼の班員の訓練に手を抜いたのである。そのために、1級章旅行をするときがきても、彼らはほんの少し余分な努力をすることとは考えずに、班の3番スカウトに期待しても無理なばかりに超人的な努力を求められているように考える。スカウトが1級章旅行を楽しめないなら、彼はそれに出発しないほうが、はるかによい。彼は訓練を積み、冒険心に燃え、成功することを信じて——笑顔で地区コミッショナーから指令書をうけ、それを開き、地図の上で進路を定め、勇ましく、元気よく楽しげに友だちと出発する——こそ、彼はハイクに行きたいと思う。しかし、もし諸君が以前にハイクをしたことがなければ、こういう気持で出発はできない。もし諸君が虫に食われて穴のあいたリュックをかつぎ、その中に不要な物ばかり詰めているとしたら、ああいう気持で出発することはできない。さて、報告書について一言。諸君は、練習をた



(注：日本連盟にはハイク報告書の所定の様式があります)

くさん積まなければ、よい報告書を作ることはできない。私はこのことを繰り返し述べてきたが、それがどんなに正しいことであるかを諸君にわかってもらいたい。

諸君がこれまでにやったことがなければ、報告書の作成にたいへん苦勞する。しかし、諸君が前に経験しており、諸君がこつを心得ていれば、そうして諸君が書き方を知っていれば、よい報告書を作るのはこの世の中でいちばんやさしいことである。出発前に、まず少しのことを報告する——諸君が使う地図の詳細、諸君が踏破する地域のこと、天候の状況、携行する用具、だれに対して報告するか、等々を記入する。

この頁に報告書の書き方の実例をあげました。これが唯一の方法ではないが、簡単で、1つのよい方法といえる。報告書はきれいであること、そ

うして、たいせつなことは、仕上がりはちょっと見ばえがし、雨の中に放置されていた汚れた紙みたいなのはいけない。

諸君の班員が自分の報告書に誇りを持つように仕向けなさい。私は、諸君の1級章ハイクの報告書はよくできているので、諸君がそれを報告書のあるべき形を示す模範として班員に見せられるようであってほしいと思う。そうであってほしいと思うが、もしそうでなかったら——そう、もう一度やり直したらどうか？もう一度やってみて、班員にこのくらいの報告書は作れといえるようなものを作りなさい。

さて、1級章旅行はこれまでとして、しばらくの間その他のハイク、別のやり方のハイクのことを考えてみよう。1級章旅行の考査の終わりに、シースカウトはハイクの一部を水上でできると記されているのを知っていよう。シースカウトに光榮あれ。諸君はシースカウトにならないから、1級章ハイクに水上を入れることはない。しかし、諸君が水上のハイクをやってはいけないとは一言もいっていない。水上ハイクはとてもおもしろい。運河や川をカヌーで行き、兩岸を探索したり、自然の生物を観察したり、船の操作を覚えたり、野営地を見つけたり——ほんとに充実している。私は何年前かにやってみた。船を操ることだけにすぎたこの週末は、最も楽しいものの1つであった。よい仲間と船旅をするのは——いつものハイキングとは少し趣を異にする。諸君は長い距離を漕破することはできないが、小さな船をもたもた動かしているのもなかなか愉快である。

もちろん、諸君は泳げるであろうし、諸君の連れていく班員も泳げるであろう。さもなければ、船旅をするのは愚の骨頂である。泳げるといっても、私のいうのは1級章の基準を衣服をつけたままやれることである。というのは、まあ、諸君が海に落ちるときは海水着は着けていないものであるから。班長として、諸君はスカウト用規則集を1冊は持っていよう。もし持っていないなら——まあ、高いことは高いが、それは班の備品として

必要なものである。船旅にでかけるときには、いつも、漕艇と水泳に関する規則に目を通し、もし漕艇許可証や資格章が必要な水域へでかけるのなら、必要な資格を備えた人と同行しなさい。たしかに、規則は楽しみをそぐが、諸君と諸君の班員を守ってくれるものである。規則を遵守することは冒険をとり除くことになるが、また愚行も除いてくれる。班長は愚行は避けるようにすべきである。

それから、諸君には自転車がある。これを忘れてはいけない。自転車で国中を回り、長旅をしなさい。いつも道路ばかりに執着しないようにしなさい。

手押車については、すでに述べた。ここで繰り返すが、手押車を引いて一日を過ごしたり、キャンプに行ったり、週末を送るのはすばらしいことである。

最後に、しかし重要なことであるが、諸君と諸君の次長が一日乗馬をやってみたらどうであろう。乗馬はハイキングと異なった危険を導入する。自転車から降りるときには、自転車は停止するが、馬から降りるときには馬が止まるとは絶対に保証できない。また諸君が馬から降りるときには、馬をいたわり、鞍をはずし、水で洗ってやり、まぐさを与え、諸君が寝支度をする前に馬が気持ちよい夜を過ごせるように世話をしなければならない。

諸君がこれをすべてやるように私は勧めつつもりはないが、諸君にその心がけさえあれば、このうちのいくつかはできるであろう。スカウトはこういうことをしてきている。諸君の班は冒険を恐れて何もしないような班になり下がらないようにしなさい。常識、それが水上のハイクでも、騎馬ハイクでも必要なことのすべてである。常識と冒険心と、それに愉快な気持、これらが要点である。私は諸君の班がそれを持っていることを望む。

ハイキングの話のまとめをしよう。諸君は人類に残されている最も安い、最も自由なものへの扉を開こうとしている。——諸君の国を（おそらく、後には、外国を）諸君の両足を使って、諸君の両目で見て回る楽しみ。演劇、映画、本、その他の

ものはすべてすばらしい。私はそれらが大好きであるが、私がいちばん好きなのは野の情景であり、小麦の香りであり、樹木の臭いであり、踏みつけた草の感触であり、なかでも、めずらしい景色の丘の斜面を朝歩いていると、朝日が昇り、一日がはじまっていくのを見ることである。人生のほんとに貴重な体験である。諸君の班員が真の班になるのは、この経験あってこそである。だから、ハイキングに行きなさい。班長の諸君、登の暖炉から離れなさい。もし夏しか時期がないというなら、諸君は間違っている。冬は異なっているが、多くの点で、ハイキングにいちばんよい季節といえる。ハイクを、たとえば、6週間に1度は、やりなさい。そうすれば、1年に8回はできることになるし。この8回のハイクを通じて、諸君の班は800人力の力を加えることになる。

注：杖は英国のスカウトは持つことになっているが、日本では持たないことになっているので、この部分の文章は日本にあてはまらない。

『班長の手引を読んで』

故 中 村 知

著者は、「スカウティングのすべてのなかで、いちばん愉快なものはハイクだ」という。私もそう思う。ある人々は、キャンプのほうがハイクよりおもしろいという。ハイクにはオーバナイトハイクもあり、それには当然キャンプすることをふくむから、ハイクのほうが、よりおもしろい。と弁解しておくことにしよう。

サーマンはここで、パトロール・フォーメーション (Patrol formation 訳して班行進隊形) について書いている。この隊形は、班のパトロール(つまり観察推理活動)に欠くことのできない隊形であるのに、近來これをやらない隊がふえてると指摘している。この隊形の図解は「スカウティング・フォア・ボーイズ」の「キャンプファイア物

語その5」に出ている。ベーデン-パウエル卿の独創のものであるから、著者は特に、励行を望んでいるのだと思う。

すなわち、次長は先頭に、4番、5番は左と右の両翼に、班長は中心に、3番は後尾に、そして6番、(7番、8番)は班長の近くに位置し、それぞれ、警戒分野を分担して、チームワークをとって行進する隊形である。各自が部署をもち、責任を分って行動する。そのため、私語をつつしみ、全身の神経と感覚器官をフルに働かせて観察にあたる——というものである。一見すると、ばらばらに散開してあるいているように見えるので、第三者の眼(または敵の斥候)の注意をひかない、一種の秘匿戦術というわけ。

元海軍少将であられた佐野常羽先生は、海軍の戦隊の航行隊形(索敵、警戒のための)も、これとそっくりだと、実修所の講義で述べられた。

日本でも、この隊形を実行しない隊がふえている。その理由を、私は二つ考えている。その第1のものは戦後、米国のやり方が与えた影響らしい。私は、米国に渡ったことがないから真相は知らない。写真や映画で見た限り、米国のハイクは、三々五々、別に隊形をとらないようである。ときとして班旗が先頭に立つ。これは次長が持つようである。英国では班長が持って隊伍の中心に位置する。

そこで、ここにも、パトロールシステムと、パトロールメソッドのちがいがあらわれているのではなかろうか、という説がある。日本は、英式をとるべきか、米式によるべきか、きまりがないので、自由であろうが、英国では、前述のようにきまっているので、サーマンは、注意しているわけである。

いまひとつの理由は、自動車などがふえて、交通事情が一変した。都市でそんな隊形をとっていたら違反になる。いなかでさえ、よほどのいなか道でない限り実施困難だということ。おそらく米国は、こんなことから隊形をやめたのかもしれない。

著者は、班ハイクの用具についても一言してい

る。これも班活動の一環として考えたい。出発にあたってその点検を厳重にする。とたく不要な品物を携行したがる。スマートネスにも関連する。

次に、1級旅行について述べている。

1級旅行は、基本訓練の総仕上げ、ということであるが、英国においても、満足に実施していない隊があるらしく、サーマン所長は、それを指摘し、それは、班長の責任でありますぞ——と、いいきっている。

私は、日本の1級章をつけているスカウトに、君はどんな場所で1級旅行をしたか?と、たずねたところ、全然、1級旅行をせずに1級になったことがわかった。これは夏休みでないを実施困難なので、そのため夏休みになるまで進級をオアズケにするのはかわいそうだ。と、いう配慮から、かりに1級章を授けてやり、夏休みを待って実施してよいという内々の手配があるにはあるが、それがそのままに流れてしまう例もあるらしい。そうすると「正札」でなく「かけね」の1級にならざるを得ない。

ある県コミッショナーは、うっかり、1級旅行に出すと、アベックに出あったり、非行少年におそわれたりして逆効果になった例がある。1泊のキャンプサイトも、都市の周辺では得難いので、実施を強調しにくいと語っていた。英国でも、同じような事情があろうかと思う。

ハイク報告書——について、サーマン先生は、これは、結局、何回も何回も練習する以外に上達する方法はない、と記している。



スカウトは積極的に善行をし、消極的な善人ではない。ほかの人の役に立つ心のひろい人になるのがその義務だ。

日本のシニアスカウト諸君でも、ハイク報告書の書ける人は、そう多くはないらしい。と、いうわけはあまりハイクをしないからだ。しても記録をつけないから——に原因がある。記録をつけることに絶妙の興味を感じだしたら、しめたものだ! 日本連盟ではハイク報告用紙を売っているがあまり売れないらしい。

この章で、ハイクは6週間に1回、年間8回しなさい。と、のべている。

いかがですか? みなさんの隊は?



ローワンは不可能の言葉から「不」の字をけとばして義務を果たした。彼のしたように行動すれば必ず成功できる。

班長の手引

—THE PATROL LEADERS' HANDBOOK—

ジョン・サーマン

今回、班制教育のよりいっそうの発展を願って、ジョン・サーマン氏著「班長の手引」を再掲載する。初版は1950年に出版され、これは1955年版の訳稿である。これが掲載されてからすでに18年の年月が経過しているが、指導者諸氏が熟読され、じゅうぶん咀嚼して実り多き班制を実現されるよう希望する。

《第16章 班と他の人々》

他の人々とは？ あらゆる人のことではあるが、ここではある特定の人たちのことを考えてみたいと思う。そうして、彼らが班制度とどういつながりを持ち、班として行動するわれわれは彼らとどういふ関連を持つかを明らかにしたい。

まずはじめに、スカウト班長、隊長が——実は、隊長にあてはまることだが——おちいりがちな重要なことに注意しておきたい。どうして私が注意をしたいかという、それはスカウティングの落とし穴の1つであるからである（そうして、非常に実際的なものであり、人々がそれほど強く認識していないこと、したがって、非常に危険な落とし穴といえる）つまり、諸君がスカウティングに熱中するがあまりおちいるわなで、それはスカウティングの所期の目的を忘れてしまうことである。それがなんであるか、われわれはスカウティングを君たちのためにどう役だたせようとしているのか、班長の役割を持つ諸君は諸君の班員のためにスカウティングをなんの役にたたせようとしているのか、諸君はあらためて考えてもらいたい。

簡単にいえば、次のようにいえると思う。スカウティングは、明日の社会で諸君が占める役割に諸君がよりよく適合できるように育てる運動であると考えよう。

しかし、明日といっても、木曜日とか金曜日とかいった類の明日ではなくて、あらゆる意味での明日——来週、来月、来年、10年先、20年先、30年先のことである。「社会で諸君の役割を占めること」さて、諸君が社会の一員でなければ、社会での役割を——つまりりっぱに——占めることはできない。どんな所にはいっても、はいる所のことを全然知りもしないでは、そこでうまくやっていくことはできない。第1章でわれわれが話し合ったことを思いだしてください——フットボールのし方とその規則のことを話しました。明らかに、フットボールのことを聞いたこともない者がフットボールをすることはできない。実際、諸君がほんのわずかな知識も持たずに、その中に飛び込んでいっても、うまくやれないし、ただぶざまなことをするだけである。つまり、諸君と諸君の班員は社会生活に参加しなければいけない。現在は、学校と家庭が社会生活であるかもしれない。しかし、将来は家庭生活ばかりでなく、同時に役所とか、工場とか、農業とか、あるいは外国にでけるとか、多くの諸君は生活の一部を公共の奉仕のためにさくことにもなる。今日、諸君の生活は単純であるが、諸君は年をとるにつれて、複雑にこみ入った社会へとはいり、ついには、家庭で、

家族関係で、工場や役所で——あらゆる分野で——諸君の役割を占めることになる。

もし、諸君の余暇がスカウティングだけに使われるなら——ここでいうのは、スカウティングの諸活動という狭い意味である（諸君が常に実施すべき、また、実施に努めるべきスカウティングの精神のことではない）——諸君がしていることは、社会からの分離である。諸君が年寄りであろうと若かろうと、スカウティングは他の人々とかかわりを持っていることを覚えていなさい。スカウティングは人生の一部である。

さて、このことを諸君や諸君の班員にわかりやすく話してみよう。学校のことから始めよう。理論上、優れた班長が学校の成績は11番目とか15番目とか、またどんなことにも全校を代表することがないかというならまだしも、学級で最低の成績しかとれない少年であるということはある。たしかに、そういうことはありうるが、真の班長であれば、どんな学課にも落第をすることはないと、私は思う。断わっておくが、私は、諸君がクリケットの主将で、フットボールの主将で、万能選手で、しかも優等生であってほしいと思っているのではない。そんな気持はまるっきりない。

私は、ただ、学業がちっともできないのに、優秀な班長になれるということはあるえないと思っている。諸君が、たとえ救急や結索やその他のことが抜群であっても、学業の成績が最低なら、諸君の班員は諸君を尊敬はしない。つまり、良い班長であるということは、われわれが話してきたような、この本の中でたびたびふれたような模範をいつも、どこでも、示すことである。要するに、諸君は班や隊の集会でユニフォームを着ているときと同じように、学校でも良いスカウトでなければいけないのである。

さて、家庭についてはどうか？ 両親に対する態度はどの程度が良いスカウトの基準といえるか。諸君はいうことをよく聞く息子か。それとも毎晩外出をするほうか？ 月、水、金はスカウト、火、木は映画、土曜日はスカウトかフットボールの試合、日曜日はまる1日どこかへ外出する。諸



君たちのことではないことを私は希望する。諸君の両親はおそらく、ときには諸君の顔も見たかろうし、家に引きこもってほしいと思っている。たとえば、諸君が大工仕事や模型飛行機の製作や写真や切手の収集の整理などで、家の中をちらかして、諸君が家にいてほしいと思っている。

両親が諸君の顔が見られるし、諸君も両親の顔を見られるのは、いいことである。たしかに、諸君の隊長、諸君の学校の先生、諸君が通う教会の牧師、その他にも多くの人々が諸君を助け、諸君に忠言をしてくれる。

しかし、実は、これらの人たちのだれも、諸君の両親にしてもらうほど、諸君の両親の役目をうまくやってくれるものはいない。もし諸君が家にいて両親にその時間を与えなければ、両親は諸君のためにしてやりたいと思うことをすることさえできないであろう。私は諸君が息子として両親に果たさなければならない義務のことをいっているのではない。たくさんの人たちが、そのことについて、諸君に話をしている。そうすることは正に正しいことであるが、私はその問題は諸君自身で解決するのに待ちたい。また諸君にはそれができると思う。諸君は、心の奥深くでは、だれかが諸

君にお説教を聞かせるまでもなく、諸君の両親に対する鬱めを十二分に知っていると思う。私が諸君に注意してもらいたいのは、諸君の両親はたかさんのことを諸君に与えることができるということ、諸君は無知な若輩であるということである。もし諸君が両親に諸君にしてやりたいと思うことをさせる機会を与えないとしたら、諸君はかびくさい若者になりはてしてしまう。

諸君の班員とその両親についてはどうか？ まず質問をしよう。諸君は諸君の班員の両親を知っているか？ ビル君のお父さんの職業が何であるか知っているか？ ジムのお父さんが失業しているのを聞いているか？ あのジャックという子のお母さんは重病である——そういうことを知っているか？ 諸君は知っていなければいけない。諸君の班員を良いスカウトにしたいと思うなら、諸君は知らなければいけない。諸君がそういうことを知る必要があるのは、班員が隊集会や班集会に来るからではなく、諸君は彼らの背後のこと、彼らの両親がどういう人か、どんな家に住んでいるか、兄弟姉妹がいるかを知っておく必要があるからである——もっとも、姉妹のことは知るであろうが、われわれは何かに属しているし、われわれの住む家の一員である。家庭がよかろうと、あまりよくなかろうと、われわれが一員であることに変わりはないし、われわれはその影響を受ける。諸君が班長として班員を指導しようとするには班員の背景、彼の環境というものを知る必要がある。

おそらく、程なくして、あるいはすでに始めているかもしれないが、諸君は生活費をかせぐようになろう。「うん、それでいいんだ。おやじから週末の小遣いを5シリングもらわなくとも、自分で50シリングをかせげるんだ」と思うか。あるいは「ぼくは働くんた。ぼくは社会に出て、その一員として、われわれの文化の進歩と向上に尽くすのだ。ぼくは社会の一員となりその責任を荷ない、貢献をするんだ」と思うか？ 諸君のスカウティングが本物であるならば、諸君はこんなふうに社会へ出るであろう。諸君の班員が、社会へ出るときにはこんな心がけが持てるように、彼らを訓練

しなさい。私のいいたい要点は、諸君が社会に出たら、諸君の生きる社会にスカウト精神を持ち込むことである。他の友だち、机が隣りあわせとか、隣りに座っているとかの友だちのことは気にするな。諸君は諸君のスカウティングを固守することである。友だちが諸君をあざ笑ったらどうするか？ 笑うことができるのは諸君だけである。諸君は友だちの持ってない宝を持っているのである。

私は3種類の人たちのことを話しましたが、この他にも「他の人々」はたくさんいる。諸君の教会、諸君の属しているクラブ、あれや、これやの諸々の社会の人たち、スカウトの間に、諸君が多くの社会に属することを私は期待している。どこへ行こうとも、社会の一員になり、諸君が体得したスカウティングの精神を実践しなさい。そうすることによって、諸君に会う他の人々に影響を与え、彼は諸君を尊敬し諸君に感謝をすることになろう。そうです、「他の人々」は班長と深い関係がある。

私は、諸君が知っており、私もよく知っている人たちのことを最後に残した。——つまりスカウト隊長である。諸君は班長の意味を考えたことがあるかな。諸君が隊長というのには愉快な人たちだと感じてることを望む。たしかに、そのとおりである。私はほとんどの隊長と顔なじみであり、その数は何千にもなっている。彼らの全部が、ことごとく好きだからこそ、スカウト隊をやっているものであり、妙に思われるかもしれないが、彼らは諸君が好きでたまらないから、たとえ諸君の班でいたずらばかりしているとしても、諸君が好きでしようがないから、隊をあずかっているのである。しかも、隊長は時間—非常に貴重な余暇—を使い、お金を使い、キャンプにもでかけ、また、あまり気のすまないようなことなどもすべてやるのに、それでもそれだけの価値があると信じているのである。

隊長は、諸君のために、その価値を認めているのである。他に理由があるわけではなく、諸君のためだけである。隊長は賞をもらうことも、お金で報酬をもらうわけでもない。隊長が報われるた

だ1つの喜びは、いつかは諸君が成人し、諸君の班員が1人前になる。その姿を見ることだけである。隊長の希望はそれだけであり、それだけが得られればと思っている——つまり、諸君がおとなになることである。もちろん、諸君は、ともかくも、おとなにはなれる。しかし、私がここでいうのは価値のあるおとな、ただ善良なだけではなく、真に活動的な価値あるおとなのことである。中にはなる者がいるかもしれないが、私としては諸君が皆閣僚とか市長とか重要人物になってくれることを期待してはいない。われわれは諸君が心の優しい、神を敬い、愛国心のある、隣人に対する思いやりのある人間に成長してほしいと思う。われわれは諸君が紳士になることを望んでいる。青二才ではいけない。何よりも——そう、何はさておき——諸君のすべてが老総長の短いことばを実現できる人間になってほしいと思う。どうしたことばか？ それは次のことばである。「スカウトは、ただ良い人間になるという消極的なものではなく、積極的に良いことをする」積極的な行動であって、積極的に良い人間になるのではない。これこそ、私がこの章で諸君にお話をしたいことである。これは私が一貫して押し通してきた主張である。

この章を終わらせるにあたり、私の私見をちょっと披露したい。それが有益であってほしいと思う。それは私の役にたつので、多くの人々にも役だつと思う。

諸君と諸君の班の役にもたってほしい。それは次のことばである。万事は自分しだいであり、自分は神しだいである。

『班長の手引を読んで』

故 中 村 知

この章は、班制度というものが他の人々と、つながりをもっている。という点を、班長にさとらせるために書かれている。一心にスカウティング

に熱中し、それだけに生きがいを感じていると、ほかの人たちのことは考えなくなるだろう。けれども、それは、落とし穴しかも危険な落とし穴だと警告している。

○スカウティングが人生の全部ではなく、それは人生の一部であること。

○学校の勉強も君の人生の一部ではないか？

○いくら君が最上の班長であっても、学校の成績が最低だったら、君は班員から尊敬されなくなる。

○班長というものは、いつでも、どこでも、模範を示すこと。

○家庭では？ 学校では？ 教会では？ クラブでは？

○親・教師へのあり方、班員の親、その家庭、班員の環境、学業、その将来についても知る

こと。
○特に君の隊長についてどう考えているか？
彼はスカウティングと少年を、好むばかりに無報酬で奉仕している。

○社会に出たら、社会にスカウト精神を持ちこむこと。自信をもって——。

○心のやさしい、神をうやまい、愛国心のある、隣人への思いやりのある人物に成長してほしい。

○すべては自分しだい、そして自分は、神しだいである。

と、いってこの章を結んでいる。

日本の班長教育において、こういう点にまで班制度が関連をもっていることが説かれているだろうか？

班制度というものは、スカウト内部の孤城であって外界、つまり社会、そして部外者と絶縁しているのごとく、思いつめられたり、思いあがっているのではなからうか？ 要するに公民的という要素がお留守になってはいないか？ と考えるのである。落とし穴、危険な落とし穴——と、サーマン先生のいったのは、このことだろうと思いつつ、この章を読んだ。

班長の手引

—THE PATROL LEADERS' HANDBOOK—

ジョン・サーマン

今回、班制教育のよりいっそうの発展を願って、ジョン・サーマン氏著「班長の手引」を再掲載する。初版は1950年に出版され、これは1955年版の訳稿である。これが掲載されてからすでに18年の年月が経過しているが、指導者諸氏が熟読され、じゅうぶん^{そしやく}咀嚼して実り多き班制を実現されるよう希望する。

《第17章 班集会》

ここは、諸君に読ませたくない章である。私は全く本気でそう思っている。なぜ諸君に読ませたくないかという、この章にたくさんの方が書いてあり——その大部分は諸君がやれるし、できれば、これを手がかりとして、向上をさせたり、班集会に合うように使っていけるアイデアであるからである。この章は例示されている項目を一度に最大限3つ見て、そのうちの1つを実際にやってみてから、次にまた2・3の例を読んで実行してみるというふうに進めてもらいたいと思う。

それでは、次に100の実例をあげよう。

- (1) 本人に気づかれないようにして、地区コミッショナーや隊長の写真をとりなさい。あとで、ネガを彼に売りつけてやることもできますよ!
- (2) 諸君の班員に次のことを調べに行かせなさい。
 - (a) 2か月前に、当地の映画館で上映される予定の映画名
 - (b) 諸君の最寄駅では何枚の季節割引券が発行されているか
 - (c) 過去3か月間に、隊員のうちの何人が2級に合格したか
 - (d) 地方警察派出所の巡査部長の標識は何色か
 - (e) 諸君の町や村にはフットボールチームがいく

つあるか、それらはどこで競技をするか

こうやって、あらゆる例をあげる必要はあるまい。諸君は自分で考えて、もっとたくさん付け加えなさい。

- (3) ところで、がらくた探しをしてみよう。なかなか手に入れるのに骨が折れるものの例をここに2・3あげよう。諸君もそれに付け加えるようにしなさい。

- (a) 牛の尻尾の毛
- (b) 山羊のひげの毛
- (c) マンチェスター・ガーディアン新聞の一部
- (d) 教会の役僧の署名
- (e) 真中に穴のあいている石、あるいは石で囲まれた穴
- (f) 16フィートもあるヒルガオ
- (g) 古銭

あとは諸君が考えてほしい、まあせいぜい12種ぐらいがいいところである。

- (4) 次に、夜間にどんなものを捜したらよいか、わりあい簡単なものを次にあげる。
 - (a) どんぐりの実を半ポンド集める。
 - (b) 9ペンスのバス券
 - (c) だれかの足跡を石膏でとる
 - (d) かしの木、とねりこの木、しでの木、ぶなの

木、かばの木、さんざしの木などの葉を集める。冬のことを心配する必要はない。冬にだっどこかにあるはずである。

足りなければ、ここも諸君が付け加えなさい。

- (5) 新しい結索を3種発明しなさい。手もとにある結索の本をすべて班のデンに持ち寄って、班員の発明した結索が、どの本にもものっていないかどうかを確かめなさい。これは口でいうほどむずかしいことはない。本には書いてはないが、まだたくさん有用な結索はあるものである。
- (6) 結索をしている間に、いろいろな結索の抗張力を検査する器械を作り、結索のどこが弱いかを調べなさい。
- (7) ロープのついでに、自分でロープを作ったかどうか。やさしいことではないが、なせばなる。冬の雨が降ってくる夜など、戸外で活動ができないときには、これはとてもよい活動になる。
- (8) 古くからある「ショーウィンドー」ゲームをやりなさい。集会へいく途中、諸君はある特定の店をのぞきこんで、何が飾られているかを見きわめてから、質問を作りなさい。班員にあとで見にいかせなさい。しかし、あまり時間をかけさせないようにしなさい!
- (9) ゲームを発明しなさい。ほんとに、やさしいことである。いちばんやさしい方法は、古いがらくたを集めてきて、それを使ったゲームを班員に発明させる。たとえばクリケットのバット、玉突の棒、昔の大鉄鍋、クリケットの球、ロープ、ろうそく、ペニー貨、はき古したウエリントン型長靴
- (10) 発明といえば、新しい歌をつくったらどうか。まず、古い歌の替え歌なんかはどうか、歌詞が多少へたくそであっても、あまり気にしないことだ、いい歌は、ほんとに、少ないものだ。
- (11) 歌詞ができるようになったら、作曲をしたらどうか。そんなむずかしいことではありませんよ。もっとも、でき上がった曲がむずかしいことはあるけどね。
- (12) 地図を使って1つ、2つやってみたらどうか。地図の一部を覆いかくし——そこに紙片をはり

つける。班員を連れだして、現場で実際に観察と計測をして、かくした部分を完全に復元する。諸君は6インチの地図を使うとよい。1インチの地図では、少し小さすぎる。

- (13) もう1つ、諸君が好みそうな地図の作業がある。時間は多少かかるが、やりがいのあることである。古い地図を捜しだして、それを最新のものにする。最近版の地図でさえ、とくに市街地のものは、最新にする余地があるものだ。数年来に行われた変化は地図には記載されていない。新しい住宅、飛行場、工場——これらは地図に入れなければいけない。諸君の班のデンや班コーナーには、最新の地図を備えるようにしなさい。そうあってこそ、諸君は、ほんとうに、進路探索者(Pathfinder)といわれる。
- (14) もう1つ、時間のかかる作業がある。いも虫を採集して、卵袋になるまで飼育し、その生態とあらゆる成育過程の変化を記録し、どのような蝶になるかを調べなさい、おそらく、蝶か蛾か、それとも思いもよらぬものが、でてくるかもしれない。しかしそれもおもしろいではないか。飼育箱の空気穴はいも虫より小さくしなさい。さもないと、班のデンを動きまわる厄介物になりかねない。
- (15) 何か工作するのはどうか。まず、班のデン用のものを作る。新しい暖炉は? 独創的なものを作ろう。まず、設計図を描き、それから仕事にかかろう。
- (16) 班用の黒板を作ろう。諸君の班の所属物らしく独創性を生かそう。
- (17) 諸君のテントに飾りをつけよう。繊維を傷つけないように気をつけよう。スカウトのテントに班の目印となるものを塗るのもよい。テントに班の歴史を描いた班もある。うがったやり方だと私は思う。
- (18) 炊事の練習を少しやったらどうか。班の全部が物を——炊事の材料を——持ち寄って、それで何ができるかやってみる。材料も腕も悪いときには、でき上がり品は——シチューと呼べばよい。皆、気に入りますよ!



- (19)薪はどうか。たびたび薪のことは書いたが、6種の木材を選んで、その可燃性を調べよ。マッチで火をつけてから、湯わかし1杯のお湯を沸かすまでどのくらい時間がかかるかを調べなさい。
- (20)もう少し進んで、火の燃え具合を観察してみよう。薪によって焰の色がどう違うか。どんな煙がでるか。その種類の多様さにびっくりしよう。
- (21)次に耳で判断してみよう。薪をたたいて、その発する音によって、どんな薪が燃えやすいかを知ろう。やさしいことではないが、なせばなる。西洋ひいらぎとか、かばの木とか、やさしい木から始めなさい。
- (22)工作をもう少し。まだ、お目にかかったこともないような用具を作りなさい。たぶん、2度と見たくない代物になろうが、やってみてごらん。野営用具だよ。
- (23)天候については？ どの班も天気予報をしたがるものである。思うほどむずかしくはない。雨量計、風向計などは、作れよう。

- (24)時計はどうか、ひとつやってみなさい。8日巻時計を作ったらと私はいわない。5分間動く時計でよい。水と振子を使ったり、砂を一方から、他方へ動かす方式で、実験してみなさい。
- (25)信号は？ 何をすることができるのか。木の頂上に信号所を作ってみなさい。
- (26)信号器を作ったらどうか。たとえば、10フィート離れたところから送信できる信号器を。
- (27)空からしか見えないモールス信号器を作ったらどうか。信号手は身をかくし、姿が見えないように工夫する。
- (28)地図をもう少し。池がよい。池の深さを示す等高線図を作る。この作業のためには、いかだを作る必要がある。
- (29)いかだ作りも、1つの仕事だ、古いグラウンドシートを使ったり、木樽を使ったり、石油かんや、その他の物で、あらゆる種類のいかだをやってみなさい。作ったら、乗ってみなさい。いかだからの水の中に落ちるのはおもしろいことには違いないが、いかだの真価は人を落とさないように作られることにある。

- (30)石膏の鑄型。足跡をとる。木の葉の形を石膏にとり、それに色をつけなさい。そうすれば、葉の識別ができる。細工用粘土に葉を押しつけ、その跡から石膏の鑄型をとりなさい。これには、のし棒が有用である。しかし、私がそういったなんてだれにもいわないでほしい。
- (31)班のトーテムポールを彫刻したらどうか。1晩とか、1週間とかではできない。設計図を書いて、粘土で模型を作り、それから手ごろな木材を使って、金槌とのみで仕事にとりかかりなさい。
- (32)営火のために、新しい劇を作りなさい。配役をきめて予行演習をなさい。
- (33)それに必要な衣裳を作りなさい。諸君をお針子にする気持は、私には毛頭ない。
- (34)諸君は、張りこ作りには大騒ぎをするだろう。私も大騒ぎした経験があるが、そのうちのいちばんいい話をしよう。何年も前に、私は「真夏の夜の夢」にでるロバの頭を作ったことがあった。ところができあがってみると、牛そっくりになってしまった——しかたがないので、われわれは劇のほうを変えてしまった！
- (35)川を水源までさかのぼってみなさい。さかのぼるといのは、どんな所へ来ようとも、水中をくぐらないですむ限り、川伝いに進むことである。
- (36)釣りをやってみなさい。班の中で、だれが所定時間内にたくさんの魚を釣り上げるか、競争してみなさい。
- (37)諸君が釣りに興味があれば、釣り竿を自分で作りなさい。これは諸君の巻きしぼりのテストになる。
- (38)ハンモックを作り、野営で使ってみなさい。
- (39)カブ隊に対して善行をすることができるかどうか調べなさい。カブ隊長に面会して、どんな援助がいちばん歓迎されるか聞いてみなさい。
- (40)キノコの採集をしなさい。それをすべて照会しなさい。農林省は非常によい参考書を発行している。キノコの識別法とその生育地がはっきりいえるかどうか、調べなさい。

- (41)諸君の知っている建物のうちでいちばん古いものを捜しだして、その歴史と建築について調べ、また、絵を描いたり写真にとったりしなさい。また、諸君がその歴史物語が書けるかどうかやってみなさい。
- (42)諸君の隊本部から1マイル以内にある街路の名前をすべて調べ、その由来を知りなさい。このためには、諸君はたくさんの人に会って話を聞くことになる。
- (43)種をまいて木になるまで育てなさい。水をかけたり、除草をするのを忘れないように。
- (44)綱のぼりをやり、また、初歩的なブランコ遊びをしなさい。ただし、地上すれすれから——落ちててもあぶなくないところから——はじめなさい。
- (45)1月に1羽は新しい鳥を見分けられるようになさい。
- (46)カヌーを作りなさい。時間はあまりかからないし、やりがいのある作業である。また、かかも自分で堅い木で作みなさい。
- (47)ペンナイフの割り方をやってみなさい。
- (48)樹木の上に、台をわたし、それにおおいをつけ、次にそこで野営するときには、交代でその上で寝てみなさい。寝ばけ癖のある者は、台に身体をしばりつけておきなさい。
- (49)自然物を利用して、ロープ梯子を作りなさい。
- (50)他隊の1班を野営に招待し、ともにキャンプしなさい。諸君は招待者としてふるまいなさい。
- (51)1週間で農場ですごしなさい。ただの野営ではいけない。農場で働き、早起きをするようにしなさい！
- (52)次のうち幾か所かを見学する計画をたてなさい。新聞社、撮影所、電話局、商店、下水処理場、工場。つまり、どこでもよいから、諸君が首を突っ込んでも迷惑にならないところ。
- (53)独創的なテントを設計し、製作しなさい。
- (54)班の使う手押車を作りなさい。
- (55)水路を使って、週末ハイクに行きなさい。
- (56)一直線に広野を突っ切って進みなさい。つま

- り、磁石で方向を定めて、もし、池を横切らなければならなかったら——幸運を祈る。もしだれかの家の庭を横切るときには——お願いをください。
- (57)新しい形の橋を考案しなさい。考案したら、設計図を書いて、実際に作ってみなさい。
- (58)外出をして、どこかで善行ができるか調べなさい。デンに戻って、何をしたらよいかを皆で話し合いなさい。
- (59)各人6ペンス持って外へ出なさい。そのお金で、だれがいちばんりっぱな物を買うか競争してみなさい。
- (60)班内に通ずる暗号を作り、それを使いなさい。
- (61)モールス符号の使い方を新しく考えだしなさい。たとえば、右の耳をかけば——を示すとか、左の耳なら、——を示すとか。この例は目だちすぎるから、もっとわかりにくい方法を考えなさい。
- (62)他の班となんらか題を定めて討論会をしなさい。たとえば「班長は必要であるか?」という題で。
- (63)斧を研いだり、柄のつけ替えをする。
- (64)諸君の班員に各自の斧を持つように勧め、そのあとで斧に適当なマスクをつくらせる。
- (65)野営で揚げる三角旗をデザインし、それを作りなさい。
- (66)岡の上から見た俯瞰図を作りなさい。各班員が一部ずつ作って持ち寄る。これを2・3回天候が違うときにおこなう。
- (67)デンの上空を飛行した飛行機の記録をつける。
- (68)プリマス・ストーブ(石油ストーブの一種)の使い方を習う。(諸君がローバーになったとき非常に役にたつ)
- (69)暗闇で荷物を梱包する練習をする。まず初めに、山盛りの用具とリュックサック6個を備える。目かくしをして、作業にとりかかる。
- (70)暗がり、報告書を書くことを学ぶ。
- (71)草の採集をし、そのうち6種の識別をする。
- (72)海辺にでかけ、半日、波とたわむれる。

- (73)弓と矢を作り、弓術の練習をする。
- (74)弓と矢を用いて、木の大きな枝に縄をかけなさい。
- (75)板のこぎりおよび鎖のこぎりの練習をする。
- (76)焼却炉を作り、そのあとで、班のデンを清掃する。
- (77)野営火用の衣袋の独創的なものをデザインする。
- (78)モカシン(北米インディアンがはいた表と裏とが一枚の皮からなる靴)を作ってみる。
- (79)雪ぐつを作る。
- (80)雪ぞりを作る。
- (81)次に氷がはったとき氷の上でフットボールをする。
- (82)氷に穴をあけて釣りをする。
- (83)新しい料理を考案し、できあがったら、それを食べる。
- (84)カタパルトを作り、小川の向こうへ綱を投げる。その他の目的にカタパルトを使うなら、私は責任を持たない。
- (85)衣服をつけたまま、水泳の練習をする。
- (86)スカウトユニフォームの各部の理由と使用方法を見いだしなさい。
- (87)近くの教会に行き、その教会に名前を与えた聖者のすべての物語を知りなさい。
- (88)諸君の町の紋章の歴史と紋章の意義を知り、石膏または彫刻でそれを作りなさい。
- (89)夜間ハイクに出かけなさい。
- (90)夜行性動物のかわうそ、かわねずみ、たぬき、てん、いたち、きつね、隊長などを見つけなさい。
- (91)班のために、新しいエールを作りなさい。
- (92)植樹をしなさい。その世話をしなさい。
- (93)貯水池を見学し、その浄水装置を知りなさい。釣り竿を持っていきなさい!
- (94)森林地域へでかけ、森林に育つ各種の樹木の割合を調べ、自然の生態をこまかく調べて報告書を作りなさい。
- (95)キャンプに不適當な所、水がないとか、薪が少なくて、地面が凹凸とか、そういう所で野



自分に何ができるか、スカウトとして勉強していれば、世の中に出てうまく仕事をやれる機会が多い。

んなものかを私のところに報告してください。

以上が、実施例100種である。これを考えたり、紙に写したりするのは、たいして時間がかからないが、これを実行するには、相当の時間がかかる。これらすべてはスカウトたちによって実行されてきたし、この他にも何千ものことが行われてきた。諸君が、以上のいずれかをするに当たっても、諸君は自分の頭でよく考えて独創的なものにするように心をくばってほしいと思う。

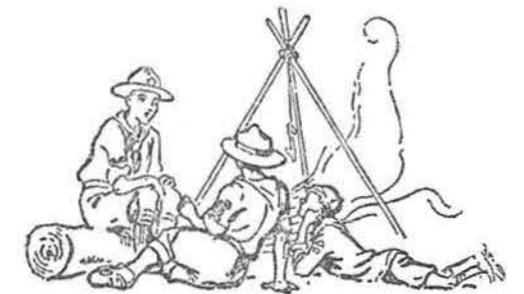
『班長の手引を読んで』

故 中 村 知

この章は、班長に読んでほしくない章だという。なんのことだろうか、と読んでゆくと、サーマンは、班集会でとりあげる参考となるテーマを100種あげ、これはひとつのアイデアだと、記している。そこで私は、班長たちがこのアイデアに便乗・依存して、自己の創意工夫をしなくなるのをおそれて、そういつているのだろうと、読んだ。

なるほど、100種あげてある。私も、こういうことはすきであるが、サーマンには1歩をゆずらざるを得ない。

日本のリーダーにも、このようなアイデアに満ちた作業を、だれにもたのまれず、自発的に、こつこつたのしんをするような人が、望まれているしだいである。この点で専任のキャンプチーフがほしい。または専任のスタッフが——。



- 営をしなさい。週末の経験としてはほんとうに価値がある。しかし、町からだけは遠くはなれること。
- (96)班のために神秘的な野営をやりなさい。行く先はだれにも教えず、自分だけにしまっておきなさい。
- (97)「左右ハイク」にでかけなさい。つまり、まがり角にくるたびに左と右へ順次に曲がっていく。
- (98)自転車ハイクにでかけなさい。できるだけ、一線になって自転車を走らせ、必要があれば道のない広野を横切って渡り、また、川があれば、いかだを作らねばならない。
- (99)同じような班名を持つ外国の班を招待して、諸君と起居をともにさせる。かならずしも野営である必要はない。このような計画はクリスマスの時期にするのが、時期からは最適といえる。
- (100)町の隊は田舎の班と、田舎の隊は町の班と交歓のために縁組をする。
- (101)これらすべてをやりあげたら諸君の成果はど

班長の手引

—THE PATROL LEADERS' HANDBOOK—

ジョン・サーマン

今回、班制教育のよりいっそうの発展を願って、ジョン・サーマン氏著「班長の手引」を再掲載する。初版は1950年に出版され、これは1955年版の訳稿である。これが掲載されてからすでに21年の年月が経過しているが、指導者諸氏が熟読され、じゅうぶん咀嚼して実り多き班制を実現されるよう希望する。

《第18章 班とスカウトのおきて》

スカウティングの中で、スカウトのおきてとちかいほど多く書かれたものはないと思う。疑いなくこれが全体の基礎であるから、このことは当然といえる。

それは、スカウティングにおける最も重要なことである。私はこの章で、このことを詳しく説明するつもりはないが、スカウトのおきてとちかいの1、2の面について諸君に考えてもらいたいと思ひ、これから諸君にいくつかの質問をしたいと思う。

諸君が知ってのとおり、質問には2種類ある。1つは諸君がはっきりした解答を与えられるものである。

たとえば、もし私が諸君に「エベレスト山の高さは？」と質問したとすると、答えを知っていれば、諸君は「約29,000フィートです」と答えられる。私が質問し諸君が答えられた——これは上できである。あるいは私が「ピーコック（雄のくじゃくのこと）の卵は何色か？」と諸君にたずねたとして。答えられる者も、答えられない者もでてくる。もちろん答えは「そんなものは存在しない」——卵を生むのはピーヘン（雌のくじゃく）だからである。——このような質問では、いつでも答えは同じである。しかし、こんな質問をした

らどうだろう「いつ諸君は諸君の班を教会に連れていったか？」諸君の答えは、ひとえに諸君が教会へ班を連れていった日のいかにかかっている。私がこれからする質問は、このような質問、つまり、いつも同じ答えがえられるようなのではなく、諸君がよい班長で任務を果たしているなら、たえず、自分に質問を続けているようなものである。

さあ、スカウトのちかいをみてみよう。

「私は、私の名誉にかけて、次のことに私の最善を尽くすことをちかいます。

神に対する私の務めと国王に対する務めをはたすこと

いつも他の人々を助けること

スカウトのおきてをまもること」

「私の名誉にかけて……」あなたの名誉ですよ、私の名誉でも、だれか他の人の名誉のためでもない。

ここで最初の質問をしよう。「諸君の名誉とは、諸君にとってどういう意味があるのか？」諸君が次のように答えてくれることを期待する。「それは、私が真実で正直であると信頼されることです」そうして、諸君は諸君の生涯を通じ毎日、この答えができることである。諸君の班が集会したときに、いつか、こんなことを聞いてみなさい。

「われわれの名誉とはどういう意味があるか？」そうして、このことを約半分間でも静かに考えさ

せるようにしなさい。さて、名誉のことはこのくらいにしよう。実のところ、名誉は諸君、諸君自身の問題であり、班と班の良心の問題である。

「私は………尽くすことをちかいます」たしかに、間違いなくそう書いてある。「尽くす」「尽くす」「尽くす」「尽くす」ことはちかい全体で最もたいせつなことである。前章ですでに引用したことのある老総長のことを思い出してください。「スカウトは積極的に善行を行うものであり、消極的にただ良い人間というのではない」そう、どこでも同じことがいえる。諸君は、スカウトのちかい全体を諸君と諸君の班が実行しなければならぬものだと思うなければならない。諸君はキャンプや炊事やその他のあらゆる事柄と同じように、ちかいに対して積極的であることだ。ただキャンプや炊事などは、時々するだけのことであるが、ちかいにはいつも積極的に進めなければいけない。この点だけが相違している。これらは、すべて活動であり、ただちかいは、ふだんの活動なのである。

次の質問に移ろう「昨日から、今日にかけて諸君はちかいについて何かを実行したか？」さあ、諸君の答えを聞かせなさい。

「神に対する私の務めを行うこと」質問、「諸君がお祈りを最後にしたのはいつのことか？」「この前の班集会の開始と終了時にお祈りをしたか？」「諸君の班を教会に最後に連れていったのはいつのことか」という質問に自問自答し、しかも、毎週必ず質問することである。班集会をお祈りで始めるのを恥ずかしいと思っはいけない。お祈りは班集会をいっそうよいものにするであろう。諸君は神のお導きを祈ることに誇りを持たなければいけない。この誇りは16秒間に42種類の結索ができることと同様——ほんとうはそれ以上に——高いものである。祈りは結索よりも、はるかに、役にたつからである。神に対する務めについて私が諸君にいいたいことは「スカウティングのすべての事柄と同じように、諸君はこのこと



について誇りを持ち、純粋であれ。もし諸君が神に対する諸君の務めを行わないとするなら、諸君のスカウティングは時間のむだになる」私が言いたいことはこれだけであるが、上の質問をたびたび自分にすることを忘れないでほしい。ついでに言うが、これらの質問をときには大声で自分に発してみると、よいであろう。

次に、「国王に対する務め」。「ところで、諸君はこれまでの班集会で国王や王室のことを話し合ったことがあるか？」「諸君は班集会を国旗に対する敬礼ではじめているか？」「ときには、国王や王室の家庭生活について知識を広めようとしたことがあるか？」「国王を首長とする英連邦についてはどうか？」多数の人々は、今日、国王を問題にしていけないような素振りをしている。流行おくれの考えと思っているようである。彼らは理解のたりない愚か者たちである。彼らは国家を倒し、国家を騒がせたいと思う人々である。

しかし、真の国民は、その中に全国のスカウトすべてが包含されることを願うが、1つのいい思いつきとしてではなく、われわれが誇りをもって追従できるりっぱな模範を示す人間として、「国王」に対して信望をいただいている。

「いつも他の人々を助けること」「諸君は近ごろに善行をしたか？」つまり、諸君と班員とが個人的にまた班全体として、善行について話すのを恥じることはするな。班員の行いについて調べるのは諸君の務めである。彼らのために、新しい奉仕領域を教えてあげなさい。また、彼らに新しい方法を見つけてあげなさい。前に言った意欲を持つことと技能を持つこととを思い出しなさい。

もう一つの質問を追加しよう。「諸君は、最近、善行をよりよく成しとげられるような技能を学んだか？」善行は諸君にとってどういう意味があるのか？ いくらかの犠牲を意味することにはちがいない。さて、それにちがいないかな？つまり、諸君は、どんな不便が起ころうとも、どんな厄介なことが起ころうと、そのためほかのことをあきらめられることになろうとも、諸君の時間と労力とをそのために奉げることを意味するのではなからうか？ 諸君の母親が病気のときには家にとどまって看病をすべきであるから、諸君はせっかくのキャンプをあきらめなければならぬ。その気持が諸君にできているか？「諸君は犠牲を払う覚悟ができていますか？」さて、これが問題である。諸君はそれに答えなければいけない。

「スカウトのおきてを守ること」今、それを見てみよう。まず、最初に全体をまとめて見てみよう。諸君はこんな特別なことがわかるであろう。すべてスカウトのおきては活動である。それらはすべて、実行されるべきことである。どの1つも「スカウトはしてはいけない」とか「スカウトはそうではない」とか、まして「スカウトはすべきである」とか言ってははいない。それらは、すべて「スカウトはかくある」と言っている。言い換えるならば、諸君がおきてを守らなければ、諸君はスカウトではないのである。このことがたいせつなことである。したがって、質問はこうなる。

「諸君はスカウトのおきてを守っているか？」そして、この質問だけをひっきりなしに諸君は答えなければいけない。

おきてを1つずつあたってみよう。

(1) スカウトの名誉は信頼されることにある。

そうわれわれはちかいの項でこのことは扱った。諸君の名誉は信頼されることにある。他のだれの名誉でもない。諸君の名誉であり、諸君に付属する個人的なことである。われわれには、あらゆる種類の名誉と関連をもつ、諸君個人の名誉、諸君の班員個人の名誉、班全体の合同の名誉、これは班員の個々の名誉から成り立っている。質問はこんなふうになると思う。「われわれの班は、われわれ自身が誇れる班であるか？」ただ「われわれの名誉は信頼されるか？」というのではなく「信頼されてきたか？」ということである。この点をたびたび自問しなさい。

(2) スカウトは忠誠である。

そう、スカウトは自分が熱中できないことにも、無中になれることに対すると同じように、忠誠である。このことは、諸君が好きになれないことに対しても向かっていくことを意味する。つまり、諸君はいったんやるときめたら、諸君の名誉とスカウティングおよび諸君の班の名誉のため、またそれと同様に、国王と国と隊長の名誉のため、また特に諸君たち班長に向けて言うが「部下の者」のために立ち向かうことを意味する。これは指導者の真価をためすものである。もし必要があれば、諸君はだれかが犯したあやまちに対して、それが諸君を奈落に引き落とすものでも、その非難を引きうける用意を持たねばならない。諸君は班員の弱点を補ってやれるだけの大きさを持たなければいけない。事が悪くなると、多くの人々はその張本人を捜しだそうとする。だれがせめられるか？

スカウティングでも、また他のところでも、責められる者はただ1人、それはリーダーだけである。つまり諸君たちである。そこで、諸君は次の質問をしなさい。「私は私の下の者に対して忠誠であるか？」

(3) スカウトの務めは役にたち、他の人々を助けることにある。

このことは、ちかいの項ですでに扱った。まったく、スカウトのちかいと同じことがいえるから、われわれは次の質問をしたい。「われわれはスカウトのちかい、第2条を守っているか？」

(4) スカウトはあらゆる人の友となり、他のすべてのスカウトと兄弟である。

このことは諸君の恋仇きである向こうの町の隊のスカウトとも兄弟であり、また同様に、外国のスカウトとも兄弟であることを意味する。信ずるかどうかは別として外国のスカウトと兄弟になるほうがはるかにやさしいことであろう。兄弟愛は家庭、自分の家族との関係、同じ通りや同じ町のスカウトとの関係といった具合に、家庭から始まる真の兄弟愛にまで達するには、わが国から外へまで伸ばして世界のスカウトや国民を結ぶ兄弟愛とすべきである。そこで、われわれの質問がでる。「私は自分が知っているスカウトばかりでなく、知り合いになりたいと思うスカウトとも兄弟になれるか？」

(5) スカウトは礼儀正しい。

そう、これはむずかしいことの1つである。スカウトに礼儀正しいことはどういう意味かとたずねると、いつでも、きっと「ていねいである」と答える。それでは半分しか答えになってない。礼儀正しいとは、諸君の考えと諸君の行動の両方である。礼儀正しいとは、諸君から礼儀を受けるべき人にたいして正しい敬意を払うことを意味する。

私はスカウトが天使であってほしいとは思わない。事実（今のところ）天使には用はない。しかし、元気はつらつとした少年が礼儀正しいのを見たことがある。礼儀の正しさは騎士道のことである。諸君はスカウティング・フォア・ボーイズとかその他のもので、昔の騎士の基準のことを読んでいたであろう。彼らは元気のよいりっぱな人たちであった。1日中、二輪軽馬車にかんづめにされて走り回られる人間は頑丈であったはずだ。

しかし彼らはこれが騎士道と考えそれを守って

行動した。彼らは困った人々を助けるために各地を回った。昔は巨人や竜や人喰い鬼がいた。これらの怪物が目だったのは気の毒であった。われわれの巨人はそれほど目だちはしない——女性に座席をゆずるとか、こどもが道を渡るのを助けるとか、遠回りでも人の荷物を持ってやるとか——し、火を喰う竜にたち向かうほど勇気のいるものでもない。しかし、はるかに有益なことである。

粗野は男のしるしと思ひこむのは、前代未聞の愚かな考えである。スカウトが礼儀の正しさとか、思いやりの心を引き出すことだけをするならば、われわれは全く正しいといえる。礼儀の正しさは文明という歯車を回す油である。こういう油が、現代の世界にはじゅうぶんにないようである。

われわれが礼儀の正しさについて言える質問は次のようになる。「他の人の安楽と気持ちをよわらせるために何かをわざわざしてあげたことがあるか？」

(6) スカウトは動物に親切である。

これは犬の尻尾にあき缶をゆわえつることでない。それは動物は助けを必要とする。特に町や市に生きる動物には助けが必要であることを意味する。ここで問題になるのはささいなことである。たとえば、池などがすべて凍りついてしまったときに犬や猫に新鮮な飲み水を与えとか、自然の食物がないときに鳥に残り物を与えとかいうことである。数年前に、ひどく寒さの厳しい冬があった。鳥は食べ物が何もなかったために、ぼたぼた死んでいった。われわれの食糧事情が非常に悪かったので、そのときには手のほどこしようがなかった。しかし、質問はこうである。「諸君の班は鳥や動物を助けるためには実際的な行いをしたことがあるか？」「われわれはちっとも害をしたことはない」といったのではだめである。これが意図ではない、何かをしなればいけない。人目につきにくいことは、人目につくことよりも、もっと意味がある。諸君は人目につかないことをやってほしい、車にはねられた犬を助けるとか、すべりやすい道でつまづいた馬を立たせてやるとか——こういうことを必ずするようにしなさい。し

第18章 班とスカウトのおきて

かし、目だたないことでも道理のたったことをするようにしなさい。

(7) スカウトは命令に従う。

さて、諸君は大いに関係がある。諸君が順序を見分けられることを私は望む。両親第一、班長第二、隊長第三の順序である。つまり、隊長は班長を通じて隊員に命令をだし、班長はスカウトはまず第一に両親の望みを果たすことをはっきり知っていることである。さて、する気のあるときには命令に従うことはやさしい。問題は、諸君が命令に従いたくないときたとえば何かの仕事をしているとか他の場所へ行くときとか、そういった命令を避けたいと思うときである。これは試練である。したがってわれわれの質問は「われわれは命令に従う意志がある」というのではなく、「おもしろくない命令に従ったことがあるか？」ということである。

(8) 笑って口笛を吹く。

諸君がたくさん困難に直面すると思わないし——そうでないことを私は希望する。諸君の困難を2、3あげれば、バイクで道を見失ったとか、キャンプに行ってテントのないのがわかったとか——これは心配すべきことではなく、愉快なことである——ということであろう。何が起ころうと諸君が心を明るく、班員が快活さを失わなければスカウトのおきての他の項目はずっとやさしくなる。そこで質問は次のようになる。「私はいつも快活であるか？」これは、諸君が顔に空虚なやにや笑いをぶらさげて歩き回ることではない。また、だれかが何か話をしたときに大笑いをしたり、口笛を吹いたりすることでもない。

私のいいたいのは心の底から「諸君は快活か、どんなことでも言われたことをする意志があるか？」ということである。諸君は熱中できる性質か？ 世の中には笑うのも嫌うような半分生気の抜けた人間がいっぱいいる。こういう面にも、スカウティングは模範を見せることができる。質問、「私の班は楽しくやっているか？」もしそうでなかったら、彼らが楽しむようになるのは諸君だけである。

(9) スカウトは儉約である。

今のところ、お金のことは心配するな。もっとたいせつなことが他にたくさんある。その主なものは時間である——世の中でいちばん貴重であり、諸君が余分にえることができないものがある。浪費した時間は取り返すことはできない。

キップリングが言ったことだが、「もし諸君が容赦ない1分を60秒の価値のある旅行で満たすことができるなら出発しなさい」 たしかに、問題は分という半ばな時間であり、ほんのわずかな情報を与えられる何分か、新しいことを習う何分間か、お祈りをする何分間かである。満足させるべきは何分間かである。したがってわれわれの質問は「われわれは一時たりとも無駄にしなかったか？」ということである。

さて、この外に制服とか用具とか等々がある。私は大げんかをするに大賛成である。しかし、無駄な大げんかは不経済であるからやめてもらいたい。もし大げんかがしたければ外にでて、服が破れないようにするため、衣服をとりなさい。

われわれのデンを3か月もかかってかっこよく、飾りたてた上で、正装で開場式に臨んで、そこで最初の使用日からぶちこわしをするのは狂気の沙汰である。質問「われわれはわれわれの用具や制服をたいせつにしているか？」

最初に、もっともたいせつなお金のこと、われわれのお金を予算化しよう。班基金——諸君に基金のあることを望む——諸君の小遣いをも、行きあたりばったり金を使い、一文も残りのないようなことをするな。緊急の必要のために多少の貯金を持つようにしなさい。不幸はわれわれだれにでも、個人的にも、班全体としても、いつかは訪れる。諸君が儉約であれば諸君は他の人のお世話にならないで済ませよう。

(10) スカウトは考え、ことば、行動がきれいである。

まずはじめに、このことばの意味からはじめよう。第一の質問「私はきれいか？」つまり、私は最近に耳の裏側を洗ったか？ 靴をみがいた、最後はいつのことか？ なぜ私の歯ぶらしはこんな

第18章 班とスカウトのおきて

にじゅうぶん仕事を与えているか？」

さて、これまでである。ずいぶんたくさん質問があるが、諸君がこのすべてにりっぱな答えができるなら、今日だけでなく、明日も、明後日もできるなら、諸君はなかなかりっぱな班長といえるし、諸君の班員はりっぱな成人への道を進むことになる。しかし口先だけが上手であったり、スカウトのおきては悲観したりするな——スカウトのおきては、これまでにあったどんなことより楽しいものである。それを守るのは大きな楽しみであり、さあ、戸外にでて楽しくやろう。

昔の騎士が胸に正義の文字板を着けたように、諸君はスカウトのおきてを身につけて。

『班長の手引を読んで』

故 中 村 知

この章で感じたことは、英国では、ちかい、おきてについての質問が、班内において、しばしば、とりかわされている、ということに、私は注目した。

日本では、はたして、そういう吟味が、こうまで、なされているかどうか、反省してみても、寂しい気がしてならない。多くのスカウトは、技能面にばかりたよって、精神面がおろそかにされているのではなからうか、と思う。

この章で、サーマン先生は、ちかいについて大事な質問点をあげ、かつ、おきての各条について、その解説ならびに、質問点をくわしくあげている。

ちかいとおきての義解についてさえ、日本の現状では、その基準または定説となるべきものが発表されていないのではなからうか？ もし、ある人が、その作業を試みたとしても、それは、その人個人の解明に終わる結果となりかねない。よしんば、ある人が、自信をもって解明したとしても、それはその人だけのもつ世界観によるほかないので、普通妥当性があるかどうかは、別個の問題となるだろう。定説とするためには特別委員会を設けて作業するほか、ないだろう。

ここでは、ここにあげられた質問例に、目を見はるだけである。

に乾燥しているのか？ これを諸君自身と班員に質問しなさい。こういったからといって、私は、われわれがいつもきちんとして、こざれいでいられるというのではない。諸君が真のスカウティングをいくらかでもやっているなら、諸君はよごれるはずである。しかし年代を経た垢と最近のよごれとは、まるっきりちがう。たいてい午後の4時ごろまでに、私はよごれてしまうが、それは私が戸外で労働をするからである。しかし4時30分には再びきれいになっている。この問題はそのとおりである。

「私はどのくらい長くきたないままであったか？」もし答えが非常に長くであるなら、諸君はなんとかしたほうがよい。

「考えがきれい」 奇妙な、ほんとに恐ろしい考えがわれわれの心に起こる。それを避ける唯一の方法は良いことをたくさん考えて、悪い考えのはいる余地のないようにすること、ここでスカウティングが役だつのである。

「ことばがきれい」 私は諸君に、前に話した腕から冷水をコップに一杯そそぎこむ話を思い出してもらいたい。それを諸君や班に対して行ってみなさい。だれかがうっかり使ってはならないような悪いことば使いをしたら——コップに一杯の水が課せられ、彼らはそれを忘れないであろう。諸君とて例外ではない。

よくあることだが、おとなとか少年とかが寄り集まるときには程度が下がる危険がある。だれにもその理由はわからないが、いつもそうであった。よく、いかがわしい話もできるようなのである。私が思うに、自分を誇示したいから、それが誇示するやさしい方法であるから、行われているようである。いちばんよい試験はスカウトが自分に次のことを質問することだと思う。

「この話をお母さんに繰り返して聞かせるか？」 答えがノーであるなら、それはだれにも話さないほうがよい話であり、また、人から聞かないほうがよい話である。考え、ことば、行動をきれいに保つ秘訣は暇を与えないことである。そこで諸君に班長として、質問することは「私は班員

班長の手引

—THE PATROL LEADERS' HANDBOOK—

ジョン・サーマン

今回、班制教育のよりいっそうの発展を願って、ジョン・サーマン氏著「班長の手引」を再掲載する。初版は1950年に出版され、これは1955年版の訳稿である。これが掲載されてからすでに21年の年月が経過しているが、指導者諸氏が熟読され、じゅうぶん咀嚼して実り多き班制を実現されるよう希望する。

— 最終回 —

《第19章 班長にさよなら》

諸君が班長章を隊長に返すときがやってくる。それは諸君のもとでしばらくの間でも訓練をした次長に渡されるものと思う。おそらく、諸君にとっては、諸君が大事にしてきたものを手放すのは、これがはじめてのことであろうし、この仕事は諸君がだれにも負けまいと思ってやってきたことだけに、感慨もひとしおであろう。

1つの任務から離れる方法を学ぶのは、班制教育の重要なことかどうかはわからない。しかし、前任者と同じ方法で仕事のできる者がいないことは確かといえる。たいていは、後継者のほうがいい仕事をするようである。諸君の班でも、後継の班長は諸君のよい点を見習い、しかも、それに自分の考えをも付け加えるであろうから、諸君たちより優秀なはずである。

諸君が班を去るときに、ちょっと寂しく感ずるのは自然なことである。諸君が少しでも班長らしいところがあったなら、諸君の班員は諸君が去ることを寂しく感ずるであろう。おもしろいことに、この世の中には、喜ぶべきことを悲しく思うことがよくある。諸君にとっても、諸君の班を他の者にゆだねるのは次の2つの理由から喜ぶべき

である。

1つの理由は、諸君は今や、スカウトとしてより広い領域へと進んでいくのである。あらゆる種類の新しい活動が、諸君の前に開け、あらゆる種類の友情に触れるようになる。諸君はまもなく、これまで知り合いになったよりもっと多くの数の外国のスカウトを知ることになる。

第2の理由は、第1の理由よりもっと重要といえるであろうが、このときにこそ諸君の指導者はその真価を試せるからである。諸君の指導力がじゅうぶんでなかったなら、当然、諸君は班を去ることを心配し、悲しくなるのもあたり前である。

しかし、諸君がそれなりによい班長であったなら、もし諸君が私がこの本に書き記したことを少しでも実行しているなら、諸君は後継者がとんでもない者でないかぎり、——諸君の班にはそんなのはいないと思うが——諸君の班は向上しつづけることを確信して、班を次の者にまかすことができよう。

諸君は学校で習った（私は習ったが）ことと思うが、こんな格言がある、「人間の悪事は死後まで残り、人間の善事は死とともに埋もれる」これは有名な格言ではあるが、私は真実をいい表しているとは思わない。ほんとうは、その反対のこと

をいったほうが、もっと真実味があると私は思う。つまり、人間のなす善事はいつまでも生きつづけると、ともかくも、私はそれが真実であることを希望する。

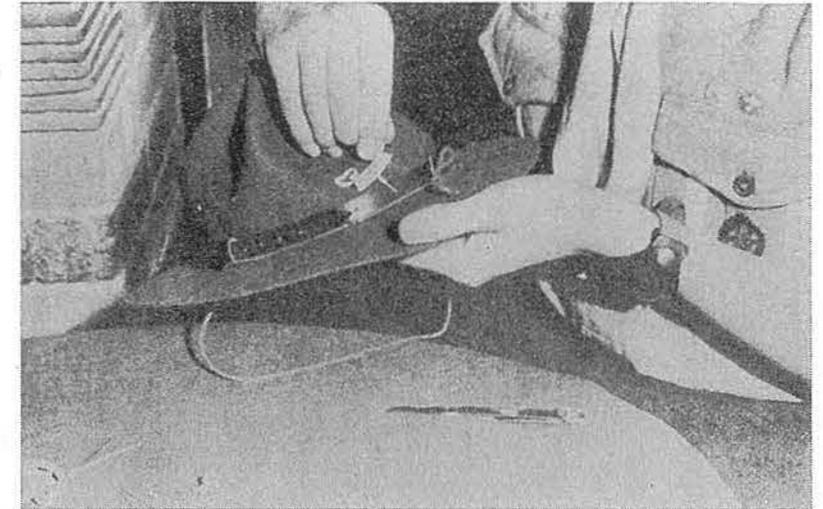
諸君は、まだやめてはいないけれども、やがて諸君の班の指導力をゆずることになる。私は諸君がその班を指導したことにより、班が利益をうけたと諸君の班員がずっと思ってくれるように、諸君が班の伝統に貢献したことを希望する。

しかしながら、離別は身をきるほど悲しいことを私は知っている。これは避けられぬことであり、われわれはどうしようもないことである。しかしただ1つできることは諸君の力で、諸君の前に開かれている新しい分野に思いきり飛びこんでいくことである。それこそ、班長としての役割を離れた後に残された空虚を満たしてくれるものである。

そして諸君の班のことを思って、新しい者にチャンスを与えることである。おせっかいをやいたり、邪魔をしたりするな。諸君が正しい指導をしてきたのであれば、新しい班長は忠告をうる必要があれば、諸君のところに来るであろう。彼が来るのをまちなさい——彼のところに出かけることはするな。

諸君は何年間も、班に招かれ歓迎されることを私は希望する。隊の行事、キャンプ、その他の場所で昔の班といっしょになることであろう。

しかし、彼らとともにあるときは、自分は昔は班長ではあったが、今は班長でないことを忘れないことである。班員は過去も未来も同じままではありえない。彼らは異なった考えを持ち、異なった事をし、同じ事でも異なった方法です。しかし、スカウティングはそれを許せるほど大きな運動であり、それはりっぱなスカウティングであり、



諸君の昔の班をりっぱなものにする。たしかに、スカウティングは大きい。しかし、問題は諸君がそれを認められるだけ大きいか、それを理解できるだけ大きいかということである。変化が起こっても、それが変に思われぬほどでありなさい。

諸君はそうであると思う。私は諸君は自分で持っているより大きな心の人間であってほしいと思う。もし諸君が班長になって何かを学びえたとするなら、必ずといってよいくらい物事のなし方に2通りがあることを学んだことであってほしい。つまり、諸君のやり方と仲間のやり方があり、しかも、その両方が正しいことが多いことである。

わがスカウト運動の大きな長所の1つはその柔軟さである。スカウトのちかきとおきての柔軟さではない。方法の柔軟さである。だから、諸君の昔の班を見て、どうも以前とは違うと思って首をかしげることがあるならば、諸君の首を別の方向に傾けて、何とよくなったことか（たぶんそれが正しいことであろう）——自分が考えていたとおりだというようにしなさい。

さあ、班長はこれまでである。私は諸君を助けてあげようとした。それは私自身の経験からだけではない。私がやり通したのは私がたくさんの場所で会ったことのある、私が知りあいになり、尊敬するに至った、何千人もの班長の経験を、諸君に伝えただけである。

スカウティングに関する本は、すべて、手引書

“世界の総長” 安らかに眠る

にしかすぎない。スカウティングは、いつも、諸君しだいであり——個人的にも、われわれすべてにとっても——われわれはどうやら目標に到達したようであるから、私は諸君が私がこれまでそうであったように、スカウティングを堪能してほしいと思う。世界には惨めなことにも何も事をなさずに日々を送ることを名譽なことに思う者がいる。

私はそれを見るにつけ、ともかくスカウティングでは、事をしつづけること、たくさんをすること、われわれは楽しく歌いながら神の許へまいるということを実行していくのだと思うのである。

『班長の手引を読んで』

故 中 村 知

- さて、いよいよ、君は、隊長に、班長章を返納する日が来た。
- 班長章はたぶん、君の班のだれかに（次長に）隊長から渡されることになるだろう。
- 君は、一抹の寂しさを感じるだろうが、それは喜ぶべきことであって悲しむべきことではない。
- 後継者のほうが、前任者よりも、よい仕事をするものだ。
- 君はさらに、広い、新しい世界にふみ出して、奉仕することになる。
- リーダーも、君にそれを期待し、君の力だめしを見守ることになる。
- だから君にとっても、リーダーにとっても悲しむべきでなく、むしろ喜ぶべきことである。
- 君の後継者は、君から受けついで伝統の上に、新しいアルファをつけたすだろう。
- 君は、後任者に対し、じゃまをしたり、おせっかいをしてはならない。
- 君の班長のころと、ちがったことがなされても、それを悪くするな、それは発展だと思いなさい。
- 方法の発展だと解しなさい。

○方法には柔軟性がある。それが、スカウティングの長所というものだ。

○スカウティングの特長は、事をなし続けること、たくさんすること、たのしく歌いながら神のもとへまいることを実行してゆくのだと思う。と、記して、筆をおいている。

■ 結 語 ■

以上で、19章からなる「班長の手引」は終わっている。この原書は、その後、新版が刊行された。

私は不幸にしてその新版は入手していないので、新版をもっている人に、どこが改訂されたかたずねたところ、新版で増補されたものは一つもない、むしろ、新版のほうがページが減って削除されている、という返事だった。（たとえば16章は削除）そう聞いて私は、ほっとした。その他、進級課目の改正のため、幾分細部の改訂はあるといわれる。

いずれにしても、パトロールシステムというものはなかなかむずかしいのは喜ぶべきことだ、と冒頭に著者ジョン・サーマン先生もいっている。おそらく、実際に、班を運営する人だけが、その妙諦をつかむことになろう。

私は、もういちど、班長になってそのだいご味をつかんでみたいと思うが、私の年齢がそれを許さない。

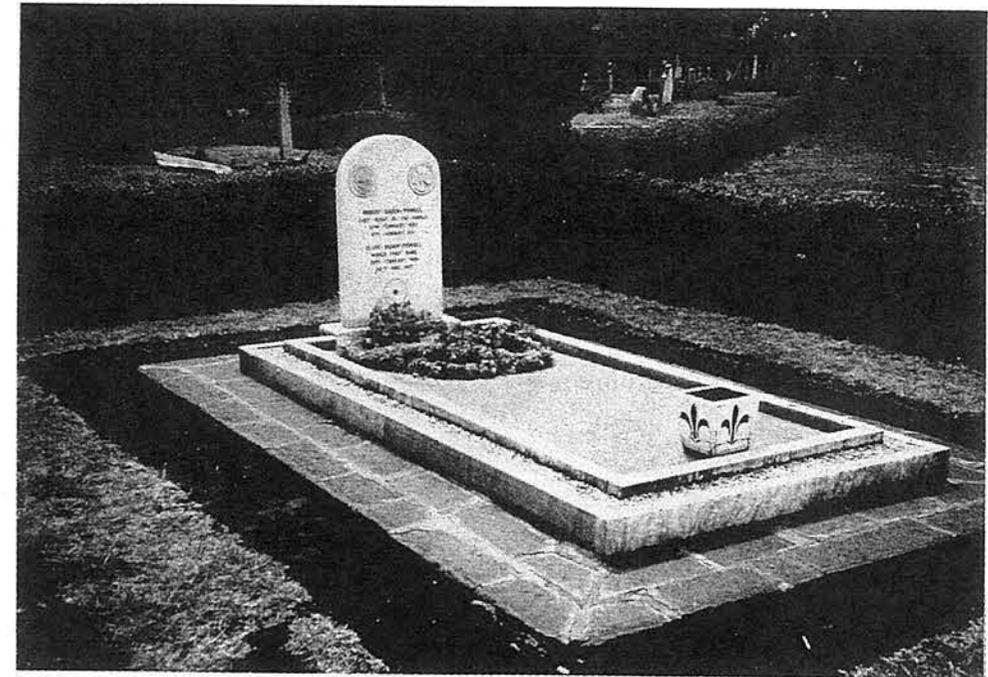
たいへん、不備な所感となったが、著者ジョン・サーマン先生に謝意を表してこの稿を終わりたい。

本誌昭和58年6月号より21回にわたって、連載してまいりました「班長の手引」は今回で終了致しました。

長い間、ご愛読いただきありがとうございました。

連載が不定期となりご迷惑をおかけしましたことを、お詫び申し上げます。

なお、通読をご希望の方は、本誌昭和61年12月号、昭和62年1月号をご参照ください。また日本連盟出版課へ、「バックナンバー索引」をご請求いただいても結構です。



1941年1月8日永眠、84歳
B-Pの愛したケニア・ニエリ
に安らかに眠る

写真提供
宮本佳明
埼玉県連盟与野第3団